源義経と静御前

中島道子

源平合戦の華
若き勇者と
京の舞姫

PHP文庫

この白拍子の舞の爽やかな艶やかさはどうだろう。女の美しさと哀しさ、時には男の凛気さえ感じさせる。(略)
気がつくと、目の前に静が座って頭を垂れていた。舞が終わったようだ。
「おお、見事じゃった。そなたの姿に、ついわが母を憶い出しておったわ」
「そうなれば、有難く、嬉しゅうござりまする」
「そうか。ならば明日もまたこられよ」
と義経は照れながら次の舞を約束させた。

本文より

装丁——多田和博
装画——浜坂公男

源義経と静御前

中島道子

源平合戦の華
若き勇者と京の舞姫

PHP文庫

な32
5

中島道子　源義経と静御前

PHP文庫
667

9784569662503
1920193006674

ISBN4-569-66250-1
C0193 ¥667E

定価：本体667円(税別)

源義経と静御前

源平合戦の華　若き勇者と京の舞姫

中島道子

源平争乱の世に彗星のごとく現れ、奢る平家を滅ぼした稀代の英雄・源義経。やがて兄の源頼朝に疎まれ、逃避行のすえに奥州平泉で自刃に至るその生涯は、美貌の白拍子・静御前との真摯な愛を彩りとし、長く日本人に親しまれてきた。本書は、伝説化された二人の物語を、女流作家ならではのみずみずしい筆致で、生身の男女としての血肉を通わせて描ききった力作小説である。文庫書き下ろし。

PHP文庫

PHP文庫
中島道子の本

松平忠輝
柳生石舟斎宗厳
松平春嶽

源義経と静御前

源平合戦の華　若き勇者と京の舞姫

中島道子

PHP文庫

中島道子

源義経と静御前

PHP文庫

源義経と静御前

源平合戦の華 若き勇者と京の舞姫

中島道子

PHP文庫

源義経と静御前◈目次

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○本表紙デザイン＋紋章＝上田晃郷

第一章　鞍　馬……8
第二章　美濃青墓（あおはか）……38
第三章　木曾谷……64
第四章　奥州平泉……89
第五章　五条大橋……120
第六章　伊　豆……146
第七章　黄瀬（きせ）川……171
第八章　宇治川……198
第九章　鵯越（ひよどりご）え・一ノ谷……227
第十章　堀川館（やかた）……262
第十一章　屋島・壇ノ浦……289
第十二章　吉　野……324
第十三章　衣川高館（ころもがわたかだち）……355
あとがき

源義経と静御前

挿画——中嶋伸子

第一章　鞍馬

(一)

陰々とした漆黒の深山幽谷である。

「魔王尊の影向」と恐れられている千年杉が天空を圧し、昼なお陽光を閉ざす鞍馬山の北面、そこを「僧正ケ谷」という。

古来より物の怪、天狗のすみかといわれ参籠する人影もない。

利鎌のような月が中天に上がった頃、二本の松明が火霊のような炎の尾を引きながら下から上ってきた。

火の止まった所が「僧正ケ谷」である。地表に幾条もの大蛇のうねりのような老杉の根が盛り上がっているが、ここだけは不思議に平らである。

「それでは御曹司」

野太い男の声がした。細い月の光がわずかに天空から降りているが、互いの顔は定かではない。それでも松明の火に輪郭が浮き出ている。

「この正親奴を平氏と思し召して渾身打たれませっ」

「オウッ」

闇の中で木剣の打ち合う音がバシッと響いた。次にすかさず二の太刀を振るったが、それは空を切っただけである。遮那王は闇の中で眼を凝らした。しかし、人の影を捉えることができない。

「どこじゃ！」

「ここでござりまする」

その声はなんと真後ろである。すかさず袈裟がけに振るったが、これも空を打つのみである。

遮那王は真暗な中に立ちつくしてしまった。それこそまるで天狗のように、漆黒の闇を自在に動く正親である。その正親がぬっと遮那王の傍に近づいてきた。

「おぬしはやっぱり天狗じゃ」

「それでは御曹司の番にござりまする」

「よし」

「いきまするぞ！」

正親の木剣がサッと空を切った。手応えはなく、かわって風のように空気が動いただけである。

（さてどちらに……）

風の動きを全神経で捉えようとした。気配は左方、三間先辺りである。

（よしっ）

気配をみて突進した。手応えはあるはずだ。ところが瞬間、サッと風が右に動いた。宙を飛んだ風である。

正親は佇立（ちょりつ）して凝然と闇の中に眼を凝らした。形が見えない。

（はて!?）

細い月明りと、ゆらめく松明の火先（ほさき）の中に遮那王の姿を捉えようとした。しかし、依然として視界に入ってこない。

「どこでござりまする」

声も戻らず全く静寂である。

（この闇の中を、自在に素早く動けるとは――）

御曹司も大したものだ。正親はそのまま佇んで反応を待つことにした。

と、後ろの方で、

「ここじゃ」

振り返ると、松明の細い火影に、少年の姿が映った。

「どうじゃ」

遮那王は得意げに笑った。

「見事でござる。御曹司は正親の技を抜かれましてござりまする」

「そうかな」

二人は共に近寄った。

「それでは一服なされまするか」

父子のように並んで、夜露に濡れた「不動明王堂」の石段に腰をおろすと、

「上達なされましたな」

と正親は呟（つぶや）くように言った。

「そうかな。したがもう三年にもなるではないか。当り前じゃ」

「いや、何年やっても駄目なものは駄目でござりまするよ」

正親は息を吐いた。

「お教えした甲斐がござりました」

「したがわしの手筋はどうかな」

「いい方でござります」

「なら大将になれるか?」

「それは御曹司のお励み次第にござります」
「うん」
暫く沈黙がつづいた。夜の冷気が項から差してくる。
「正親」
「はい」
「父上はどうして敗けたのであろう」
「戦さの勝ち負けは一口には申せませぬ。いろいろとその時々の状況がございます。それに加えて『運』というものもございます」
「運」などといっても、十五歳の少年にはわからないだろう。それよりこの少年ほど、奇特な運命を担った者はいない。
「おぬしに会わなかったら、今のわしはない」
だしぬけに、遮那王が言った。
「御曹司……」
正親の声が微かに震えた。この震えは、喜びとも呻きともつかぬものである。
（この御曹司を、とうとうわしは、怨念の戦さの中に引きずり出したことになる）
気色ばむ遮那王に、正親は喜びと同じ量で、自虐の念がないわけではない。

鎌田正親＝「義朝に従ふ兵多かりけり。先づ鎌田次郎正清をはじめとして……」と『保元物語』にある鎌田正清の子が正親である。
源氏筆頭の郎党で、兵衛尉の官を与えられたが、「平治ノ乱」で源氏の棟梁源義朝が平氏に敗れて落ちのび、尾張は内海長田の荘で、庄司長田忠致に殺されたとき、従者の正清も殺された。
「平治ノ乱」とは、平治元年（一一五九）藤原信頼と源義朝とが京で起こした戦さである。これは藤原通憲（信西）と信頼との権力争いとともに、源義朝と平清盛の勢力争いでもあった。
ともかく正清の子、正親は生きのびた。京で四散する源氏の中で、正親は洛北、大原の里まで逃れ、来迎院に逃げこんだ。
以来十余年が経っている。その間、平清盛は太政大臣に栄進し、旭日の如き栄華の上り坂を登っている。
それに対し、源氏は義朝の嫡男義平が再起を図るも、後、捕えられて刑死した。更に次男朝長も死に、頼朝は伊豆へ配流とさんざんである。
そんな中で正親は、身過ぎを坊主ときめ、あやしげな僧となってその日暮らしをやってきた。
ところがある日、一条坊門の前にきたとき、牛車に乗ろうとする上臈と目が合っ

た。覚えのある顔である。上臈もまた正親の面差しに覚えがあったようだ。両者は期せずして互いを引き寄せた。

「鎌田殿ではないか」

上臈の口から洩れたことばは意外であった。

「はっ、これはもしやしたら常盤ノ方様」

驚きと懐かしさに、思わずわれを忘れて牛車に寄った。

それから二日後、正親は一条坊門の藤原長成屋敷の北ノ対の屋で、十余年ぶりに常盤御前と対面した。

「お懐かしゅうございまする」

義朝の館が、京の室町押小路に在った頃、父正清に従って義朝に拝謁したことが二、三度あった。正親二十歳そこそこである。そのとき義朝の傍らに在った常盤御前に、目を奪われた。

（何というたおやかさ……）

京の町なかで見た遊女や踊女にはない高貴な美しさである。

詳しいことは知らぬが、なんでも九条院（近衛天皇の中宮・呈子）付きの女房を採用するため、都中の美女から一人を選んだという。

その折、美女千人の中から百人を選び、百人の中から十人を、さらに十人の中から一人を選んだ美女が常盤だったという。だが彼女の身分は九条院雑仕女、つまり下級の女官というところだ。年齢は十四、五歳だったろう。

しかし、身分はともかく、京中の美女から選ばれた、つまり美女中の美女ということで、京雀たちの話題になった。

この噂にひそかに心を躍らす北面の武家の棟梁が二人いた。源義朝と片や平清盛である。二人は共に文を送り、常盤の許に通ったが、常盤は清盛より五つ年若い義朝を選んだ。

そして義朝館に移った常盤は、次々と和子（男児）を産んだ。恋を義朝に奪われた清盛が、歯ぎしりし、怨みを打倒源氏に替えたことは言わずもがなだ。

ともかく、正親が見た絶世の美女は、主君義朝の愛妾だったのだ。

ところが彼女の幸せは薄く、三人の子を抱えて、「平治ノ乱」の敗北後、雪の大和路を逃げ廻り、とうとう母、関屋が捕えられたことを知ると、三人の子を連れて六波羅に出頭した。

そこで斬られるべき三人の男の子が、常盤の嘆願により、鼻の下を長くした清盛によって僧坊に送られ、一命を拾った。常盤捨て身の母心と、清盛の憐愍というより情欲のなせるわざであった。

ともかくこの措置（三児の助命）は、平氏にとっても秘中の秘であり、まして源

氏の残党の知るところではなかった。
そして程なく常盤は亡夫の仇、清盛の愛妾となった。
（女性とは恐るべきもの）
夫の仇に身を委ねて、かくものうのうと生き延びるものか——。
正親は腹が立った。今に至るも女を持とうとしないのは、美しい常盤への憧憬と失望が重なっているからだ。
それからなんと十年近く経っていた。
目の前の常盤は、もはや旧主義朝の愛妾ではない。旧主の仇、清盛に身を任せて一女を儲け、飽きられた玩具のように藤原長成に与えられた女である。
こういう女を蔑むか哀れむか——しかし、どちらにしても女の生きる道はそういうものだと首肯せざるを得ない。
それにしても、あのときの常盤の容色が衰えていないから不思議だ。義朝亡き後、清盛に嬲られ、三たび目の男の妻におさまったとはいえ、青眉を掃いた白い額や薄桃色の頬は女の盛りである。それに瞳の艶が、一度目を合わせたら男心をそそらずにおかない。
とてものことに三人の男の子を産み落とした女性とは思えぬ艶やかさである。
（女は魔物）

この愚直な正親はまたそれを思った。
「それでお子たちは」
声を落として訊いた。
「ああ、今若は醍醐寺へ。乙若は叡山に……」
さもあろう。本来なら斬られるべき運命を、常盤の哀願で助命された子らである。二度と再び武門に戻ることは許されないのだ。
「して、牛若様がおられましたが」
「ああ、あの子は乳呑児ゆえ、わたしの手許に置くことを許されたが、これも鞍馬に送った」
「いつでござりました」
「ここでもう一人子が産まれてから数年後であろうか」
ここで常盤は溜息をついた。そしてふいと呟くように、
「女子であったらわらわの側におれるものを——男の子は哀れじゃ」
と目尻に手をやった。
（男の子は哀れか）
この女性にとってはそうであろう。しかし、正親の論理はその逆である。
「それでは」

辞そうとすると、

「今のこと、そなたのみに打ち明けたことゆえ、ゆめゆめ他言なされまするな。それからここへは二度とこられぬよう」

と念を押された。

「承知しております」

再度手をついて立とうとしたとき、

「あっ、正親殿、そなたと行きずりに出会うたも何かの縁。わらわが一番気になる和子は、鞍馬へやった牛若じゃ。もし哀れと思うてくれるなら……」

とそこで常盤は絶句した。

(二)

まだ三十代の男である。父正清の傍らにいた頃は、黒々とした髪に口髭が横鬢の揉み上げまで繋がる毛深さで、父を凌ぐ面構えといわれたものだ。

しかし、源氏が京を逐われてからは、その形相を変えるべく、頭髪や自慢の揉み上げもきれいさっぱり剃り落としてしまった。つまり僧形になったのだ。

京の巷で、源氏の残党などと怪しまれぬためには、僧形になるしかない。そして

僧名も「正親」などと騙った。

それから十年にもなろうとしている。腕を売って平氏に身売り鞍替えをする者もいたが、正親はたとえどんなに尾羽打ち枯らそうとも、仇敵平氏の馬前に屈しようとは思わなかった。

僧形になってから経を覚え、路上や、門前に立って托鉢すれば、今日一日の日銭と何がしの食い物にはありつけた。

しかし、これが十年近くつづくとなると、そろそろ草臥れてきた。そんなときに常盤ノ方とめぐり会ったのだ。

すると正親の体内に、不思議な情炎のようなものが湧いてきた。

「鞍馬へやった牛若を……」。あの観音のような常盤ノ方から、牛若丸を托されたような気がした。これまでの毎日は、ただその日暮らしの為体だった。

ところがあの美しい観音から、源氏再興の旗印を托された。かつてのように、武士として生きる命題が与えられたような気がした。

(鞍馬へ行こう)

熱い思いが体内を吹いた。

鞍馬山は京洛の真北に位置し、南麓に鞍馬川、北麓に貴船川をめぐらしている。

南面の鞍馬寺は、宝亀元年（七七〇）鑑真和上の高弟だった鑑禎がこの地に草庵をむすび、延暦十五年（七九六）に勅を受けた藤原伊勢人が堂塔を建立した。王城鎮護の勅額を掲げた威権の寺である。

半日以上もかかって鞍馬山の下まで辿りついた。しかし、正親は見上げるばかりの山門の下で立ち竦んでしまった。世を忍ぶ一介の私僧が、門をくぐることに憚りを覚えたからだ。

そこで門の外に広がる地下人の聚落に入った。地下人とは、寺の雑用をする人たちのことである。

それと別に、鞍馬法師と称する僧兵の聚落がある。彼等も山内に入ることを許されない寺の傭兵である。比叡山にも傭兵軍団はあるが、勇猛さでは鞍馬だといわれている。

その鞍馬法師の中に、多数の源氏の落武者が入っていると聞いていた。ならば見覚えのある顔に出くわすこともあろうかと、立ち並ぶ小屋の通りを、一つ一つ目を凝らして歩いた。

酒気帯びの喚き声が聞こえ、通りで薙刀をしごき出している者もいて、なかなか荒っぽい。そんな小屋の通りを正親はゆっくり歩いた。

しかし、そんな正親に嫌がらせをする者はいない。それは十年来身についた法体から、怪しまれることがないからだろう。

僧坊の入り口を出入りする法師の顔、すれ違う坊主の顔を検めるようにして歩いていると、

「おう、鎌田殿ではないか」

と一人から声をかけられた。ハッとしたが救われた思いだ。法師は正親と同じくらいの年恰好で、一見してわかった。

「ここにおられたか」

相手の名を呼ぶわけにはいかない。この男は保元・平治ノ乱を戦ってきたいわば同士であった。肩を叩かれ、坊から離れた杉林の中に入った。

「いつからここに」

「まだ二年くらいじゃが、一時期、園城寺（三井寺）に入り、常陸坊海尊と名乗っておる。まさか坊主になろうとは思わなんだが、今ではすっかり身についてしもうた。それでもこっちは法師とはいえ、薙刀や刀を取る身じゃから、今も半分以上は侍の気が抜けておらん」

「そうか。わしもあれからやむなく身過ぎに坊主の真似事をしてきたが、この頃はようよう飽きてきた」

「それでここへやってきたのか」

「まあ、そういう訳じゃ。しかし、やっぱり本物の坊主にはなれんのう。そこでここへくれば、昔の仲間もいると聞いてやってきたが、おぬしの顔で仲間入りはできぬものかな」

あの猛者だった正親の顔に、憂愁が滲んでいる。

(奴もいよいよ疲れてきたか)

「わかった。したがここの組織は固く、滅多な者は入れぬが、そこはわしの口で何とかしよう」

それから法師の首領の所へ連れていかれ、元、源氏筆頭の郎党の息子というだけで、直ぐに話が決まった。

ここでは源氏も平氏もない。諸国を流れ、溢れた男でも結構だが、要は弓矢刀剣が使えることだ。

「ここには元、源氏の者が何人も潜ってるぞ」

と言われ、難なく仲間入りができた。これで明日の食い物に事欠くことはない。

それに、ここにいる限り身の安全は保障される。

(もっと早くに来べきだった)

次はここへやってきた本当の目的、常盤ノ方の第三子、牛若丸を探すことだ。

二、三日して、海尊に訊いてみた。

「この山内に、頭ノ殿(義朝)の末子『牛若』殿がおられるはずじゃが、どこの坊であろう」

すると海尊は、

「そんなことは聞いたことがないぞ」

と言う。

「いや、確かにおられる。おられるのじゃ」

「わしは知らぬが有り得ぬことではないな。常盤ノ方様の今若殿が醍醐寺、乙若殿が叡山なら。ま、探ってみよう」

と言ってくれた。そしてわかったのは、なんと十日も後のことであった。

「わかったぞ、確かにおられた」

常陸坊海尊の話はこうだった。

牛若が鞍馬に送られたのは嘉応元年(一一六九)の数え年十一歳だった。それまで母常盤の再嫁先、藤原長成の許にあった。

長成は藤原とはいっても末流で、四十歳になってやっと大蔵卿(財務省の長官)にありついて一条坊門に住んでいる。所領は遠州と備前にそれぞれ一カ荘、それに常盤下げ渡しの土産として、清盛から山城で一カ荘を貰った。

その長成の許で成長した牛若だったが、彼が四歳のとき、弟が生まれた。父も母も菊丸にかかりっきりで、牛若の存在が薄くなった。

当然その憂さをまぎらそうと外へ出る。外へ出ればよく似た年恰好の童に出会う。そこで少しずつ悪さを覚えるようになった。

棒振りはいいが、人の畑の作物を取ったり、盗みまで手伝うことになった。それでも牛若は父母に曖気にも出さなかった。

そんなことより、父母の愛が小さい弟に傾けられ、牛若は妙な疎外感を覚えるようになっていた。

（どこの家でも小さい者が生まれると、こうであろうか）

親への甘えが、やがて弟への嫉妬に変わろうとした頃「牛若様はここのお子でないゆえ、いずれどこかにやられるだろう」という雑仕の囁きを耳にした。

びっくりした牛若は、早速それを母に詰った。すると母は一寸顔を曇らせたが、

「そんなことは他人の減らず口じゃ。決して気にしてはなりませぬ。そなたはわれらが子」

とはっきり言われ、その夜は久しぶりに母に抱かれるようにして寝た。

他人の言葉より、親の言葉を信ずることだと牛若はこれで少し成長した。

その牛若が十一歳になった年、鞍馬、東光坊の阿闍梨（僧の学位）蓮忍に預けられることになった。しかし蓮忍が高齢なため、蓮忍の弟子で禅林坊の阿闍梨覚日の許で暮らすことになった。

「み仏のもとで」

と涙で見送ってくれた母のことばを、今も半分信じ、半分疑っている。

「お名を遮那王といわれる」

「ほう、牛若殿が遮那王と。ということはまだ得度前じゃな」

海尊の言葉を聞き、正親の目に青い炎が映った。

「何を考えている？」

「うむ」

正親は亭々とした杉林を仰いだ。

「少し歩かぬか」

「ああ」

先を行く正親は無言である。

「どこまで行く？」

「僧正ケ谷という所があろう。そこへ案内してくれ」

「僧正ケ谷か。そんな所へ何をしに？」

「うむ、ともかく頼む」
二人はそれから薄暗い原生林の険しい奥の院参道を辿った。山ひだから清水が湧き出している。獣のあばら骨のような木の根が地上にせり上がり、何度もつまずきそうになった。
そして尾根を過ぎて下り路となり、鞍馬の北面の「不動明王堂」に辿りついた。そこは平たく、木の根もなく、不思議に穏やかな空間が広がっていた。
「ここが僧正ケ谷じゃ」
二人は明王堂の石段に腰をおろした。暫く沈黙がつづいた。
「何が言いたいのじゃ」
海尊は訊いた。
「おぬし、察しがつこう」
「いや、はきと言ってもらわねば」
「わしが鞍馬へきたのは坊主になりたいがためではない。実は、牛若殿を探しにきたのじゃ」
「ほう……それで？」
「いずれ牛若殿にその気になって貰おう」
「その気とはどんな気じゃ」

海尊は僧衣の白い衿をかき合わせた。
「きまっておろう。源氏再興の旗頭じゃ」
「そんなことを考えて正親殿はこられたのか」
五分ほど伸びた坊主頭の海尊は、細い目を丸くした。
「おかしいか？」
正親はジロリと見やった。
「源氏は武門の棟梁じゃ。清盛奴にしてやられっ放しというわけにはいかぬわ。平家といえどもそういつまでも長くはあるまい。その間に若木を育てておかねば」
海尊はまるで別人でも見るような目で正親を見つめた。
「やっぱりおぬしは違うのう」
「どう違う？　おかしいか？」
「いや、眩しいくらいじゃ。侍の血を思い出させてくれたわ。やっぱりおぬしはわしらと違う」
海尊は溜息をついた。
「そこでじゃ。その遮那王殿を、ここへお連れしてくれまいかな」
「お連れするじゃと？」
「直ぐにとは言わぬが、出来るだけ早い方がいい」

「してどうするのじゃ」
「牛若殿に事の次第を打ち明けてその気になっていただく。その気になれる方か、なれないかは、われらが見定めよう」
「ほう……」
「それからおぬしと二人で、剣術を仕込むのじゃ」
「なるほど」
「ともかく経は無用じゃ。剣術を知らねば大将にはなれぬ。それをわれらで教え申そう」
「そうか」
「寺の宵は早い。よって薄暗くなったらここへきていただく。そして毎日とはいわぬが、二、三日置きの荒稽古じゃ。それについてこれぬようでは諦めるしかあるまい」
「わかった。やってみよう」

(三)

六月の風が山巓から降りていた。金紅色の斜陽が濃い杉林を通してくる。

禅林坊の暇をみて、海尊が遮那王を連れ出してくるという。
明王堂の前に立って待っていると、二人の足音が近づいてきた。正親はかつて覚えたこともない鼓動を聞いた。
(どんな御曹司であろうか)
この年になってくれば、若者の見窮めがつく。要は見込みがあるかないかだ。
(なかったら諦めるしかない)
胸の鼓動は、そうした「人」への期待と、「運」に賭けるためだ。
「おう、お連れ申してきたぞ」
海尊の声がして、一人の稚児がやってきた。身の丈五尺には足りぬが、黒々と結い上げた稚児髷に透けるような白の水干、そして水色の袴を膝でくくった涼やかな童児である。
一見して、父義朝の面差しを映し、色の白さと匂い立つものは母常盤似だ。正親は震えるような感動を覚えた。
(やっぱり想像に違わぬ高貴な和子であられた)
正親は膝を折ると、仰ぐようにしながら言った。
「常陸坊の旧友、鎌田正親と申す者にござります」
すると遮那王は一寸怪訝な表情をしたが、

「その名からみると、元、侍であろう」
と開口一番、嬉しいことばを発した。
「はあ、ご明察にござります」
「それでわしに何の用じゃ」
すると正親は一つ大きく息を吐きながら、
「夕陽を浴びて、牛若様は美しゅうござりまするなあ」
と、意想外のことを言ってしまった。
「おかしなことを言うな。何の用かと訊いているのじゃ」
「あっ、これはどうも……」
(どうしたというのじゃ)
遮那王の清らかさに、ふと常盤ノ方の面影を重ね合わせたようだ。
「そちは今、わしを牛若と言うた。よく知っているな」
「はい、私奴は鞍馬の遮那王様にお会いしたくご無理を申し上げたわけではありませぬ。源氏の牛若様をお探し申し上げてきたわけで」
「なに、源氏の牛若じゃと?」
「はい、牛若様のご父君は、元、源氏の棟梁義朝公にござります。そして私は義朝公の元郎党にござります」

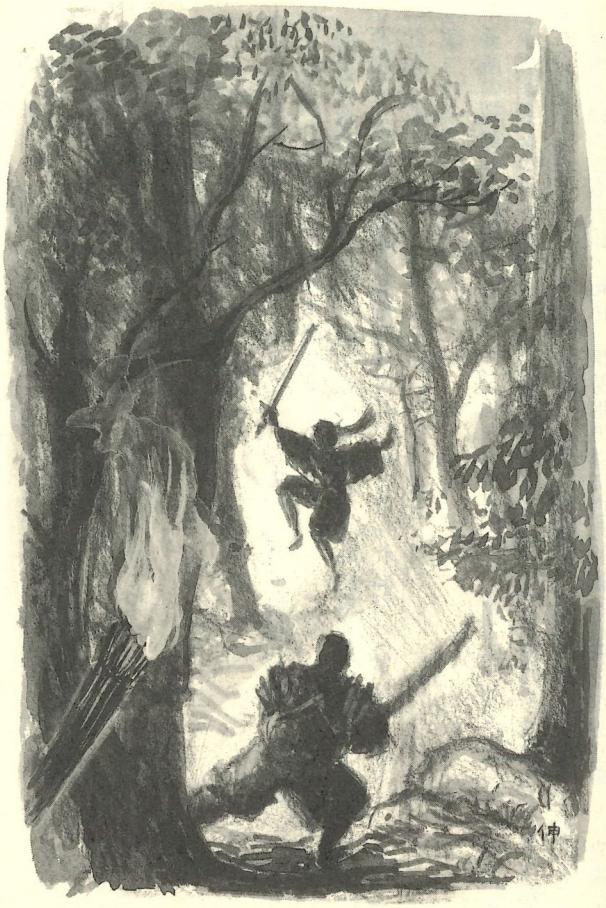
「今、なんと!」
遮那王の方がびっくりした。
「もう一度聞かせよ」
「はは、われらは元、源義朝公が郎党」
「するとわしは藤原大蔵卿の子でないというのじゃな」
「はい、牛若様のお父上は源氏の棟梁」
衝撃といっしょに、これまで父母の家で感じてきた訳のわからぬ違和感が一気に解けた。
(大蔵卿長成は、やっぱりわしの父ではなかった)
弟菊丸が生まれてからの疎外感が、今ようやくにして納得がいった。今日まで母の口からも明かされなかった秘を、こんな所で思いもかけぬ男から明かされたのだ。
茫然と佇立(ちょりつ)した遮那王に、正親は父のような気持ちを抱いた。
「いきなりお驚きになられるようなことを申し上げましたが、もしやして、母君様からお聞きになられたようなことはございませんでしたか」
「なかった。したが」
「したが?」

「弟が生まれた頃であろうか。わしが鞍馬に行かされるというようなことを、それとなく屋敷の者の口から聞いた」
「そうでござりましたか」
「それで牛若様はご坊におなり遊ばすお心で？」
これが肝心である。
「いや、わしは僧にはなりたくない」
遮那王のいる禅林坊には、遮那王とよく似た年頃の童子が二、三人いる。ところが彼等は阿闍梨覚日の覚えがめでたい。というのは彼等の実家から上がる献上金が多いからだ。
それに比して、貧乏公卿の大蔵卿長成の所からはそれが少ない。遮那王は他の童子と差別されていることを感じ取っていたが、それがそういう事情からくるとまではわからない。しかし、疎外感というものは、幼くとも動物的本能でわかるものだ。
「本当でござりまするか。これは大事なことにござりまするゆえ、ゆめゆめいい加減にはお答え下されまするな」
「本当じゃ。わしはここで努力しても、無駄なような気がしている」
「どうしてそのようにお考えか」

「まあ、そこの石段に掛けよう」
遮那王はさっさと石段に腰をおろした。そして、
「早くしないと暗くなってくるぞ」
と親しげに正親に言った。
「宵闇は恐ろしゅうござりまするか」
「いや！」
即座に打ち消した。そして、
「わしはな、面白くなかったり、腹が立つと、坊を脱け出すのじゃ。初めは大騒ぎになったらしいが、そのうちわしのことを心配する者なぞいなくなった。それゆえわしは坊の外へいつでも出る。京の町中（まちなか）辺りまで一人で出かけることもある。そのうちわしは、馬に乗って走ってみたいと思っているのじゃ」
「それはなかなか――。ならばわれらの願いをお聞き届け下されましょうや」
「どんなことじゃ」
疑念を払った少年は、積極的に身を乗り出してくる。
「剣術の稽古にござりまする」
「剣じゃと！」
牛若の育った一条坊門の屋敷には、そんな武器・武具は一本もなかった。だか

ら、牛若は武器を知らず、代わって手に取らされたのは笛や管弦の類であった。
ところが弟が生まれてから屋敷の外へ出てみると、外を走る小童が、手に手に棒を持ち、あたかも刀剣のように振り回す。そして、
「行けえ！」
「進めえ！」
と十余人ほどがつるんで走るのは、どうも戦さごっこの類であった。
そこで初めて棒を握った牛若だが、これが意外に早く術を覚え、近隣の童児たちから「牛若は大将じゃ」とか「大将になれ」とか言われて、有頂天になったものだ。
その頃から漫然とではあるが、武士に憧れるようになった。しかし、それは絶対父母に洩らしてはならぬ仮想であった。
そんな思いを埋めながら、とうとう十一歳になったとき、全く方向違いの山の寺に送られたのである。

あやめもつかぬ闇の中で、松明の赤い炎がゆらゆらと生きもののように泳いでいる。
「力いっぱい打ってこられませい」
正親の顔と木刀だけがわずかな明りの中に浮いて見える。



「ヤーッ」
バシッと強い手応えはあったが、次の瞬間正親の姿が消えた。
「どこじゃ！」
キョロキョロと闇の中を探しても人の気配がない。
「ここにおりまする」
声はしても姿がない。
「どこじゃ。姿を見せよ！」
「ここにおりまする」
なんと声は遮那王の背から聞こえてくる。
「何ゆえ消える」
「消えませぬ。牛若様が私奴の動きについてこられぬだけにござります」
「正親――」
「はっ」
「そちの技をわしに教えろ」
正親が身につけた武技の一つに飛跳がある。父正清から教えられたものではなく、少年時代、父の郎党の一人から仕込まれたものであった。
畿内といっても大和・紀伊・伊勢地方は、古来傀儡（くぐつ）の定着した所である。傀儡とは、奈良朝以前に中国大陸から渡来した特殊技能を備えた人々のことで、音曲・奇術・狩猟・体技に優れ、諸国を遊行しながら独特の技能を村里や市井（しせい）で演じてきた。
跳躍・飛跳も体技の一つで、正親はそれを身につけた。そして牛若にも仕込もうと思ったのである。

それから三年がたっている。
海尊と正親に交互に僧正ケ谷で鍛えられた牛若の剣技と体技は、しっかり身についた。
そして身丈も五尺を越えてきたとき、禅林坊での得度が近づいていた。

第二章　美濃青墓

(一)

「得度されては面倒じゃ。その前に――」
「急がねばなりませぬ」
この年牛若は十六歳になっていた。
かつて源家の祈禱師だったことから牛若を引き取った蓮忍だったが、高齢を理由に弟子の覚日に任せていた。
しかし、いつまでも稚児のままにしておくわけにはいかない。それに平家の目もある。そこで得度を急ぐことになったと聞かされた。
得度されては鞍馬からの脱出が出来なくなる。そうなる前に決行しなければならない。

「どこに脱ける」
「あそこしかあるまい」
「あそこととは？」
海尊は正親に迫った。
「第二の京じゃ」
「第二の京じゃと？」
海尊の目が更に丸くなった。
「遠国じゃがあそこへ行かずばなるまい。なにしろ平家の目の届かぬ所といえば奥州じゃ」
奥州といえば京からみれば異国であろう。何しろ白河から北は「奥の俘囚」と呼ばれる辺陲の地だ。浮囚とは倭に帰順した蝦夷の賤称である。
ところがそこは藤原氏を名乗る豪族が、平泉を都として、都城の規模も京を思わせるものだという。
つまり、都が二つあることになる。即ち桓武帝の定められた都と、もう一つは蝦夷の造った都、つまり平泉である。繁栄の元は黄金の産出にある。
しかし、いかに黄金の都とはいえ、平泉は奥州俘囚の地だ。そんな所に平家や京の商人たちが、幾山河、百里の路を越えて往来するのは難儀である。

それゆえに、源氏の落武者にとっては、蘇生を求めるべき所であった。それにしても手懸り、足懸りが必要である。

（誰かいないか）

真剣に考えつづけた正親の脳裏に一人の男が浮かんできた。「金売り吉次」といわれる商人である。

奥州で産する砂金の粒を、大小の袋に幾つも詰め、蝦夷の作る刀剣や珍しい反物などを百頭の馬に積んでくる。勿論それらの荷駄を運ぶ隊商たち三百人はいずれも武者で、道中の山賊・賊徒を排撃する。

彼らは揃いの侍烏帽子に胴巻姿、それに北国人特有の濃い頭髪に太い眉と口髭を生やした壮漢たちだ。その頭目が吉次である。

吉次の京屋敷は三条にある。幸いなことにいま京にきているはずだ。

そう思ったらためらわずに訪ねることだ。そしてこちらの覚悟と決意を披瀝して頼み込もう。

三条屋敷での吉次は、胸毛を生やした胴に白の晒しを巻いた前開きの恰好で、蝦夷の着る派手な長目の刺し子を羽織っていた。見るからに奥州の匂いが粉粉として、傍らに数人の京女を侍らせている。武将を見るのに馴れてはいるが、この種の

人間は初めてである。些か戸惑ってしまった。

「何がご入用かな」

三十半ばの吉次は商談と思い込んでいるようだ。もの言いから態度、まことに大様である。

「実は商談ではありませぬ。チトこみ入った話なもので、吉次殿お一人にてお願いいたしたい」

「おお、これは慮外な。そうならば」

と吉次は早速女たちを退けた。女たちが消えるのを待ってから、

「何かな？」

吉次は前を掻き合わせた。そして、

「この屋敷ではいつもこうでしてな」

と悪びれない。

「拙僧は正門坊正親と申しまするが」

と名乗ったものの、正親は逡巡した。こんな男に、この大事を洩らしてよいものか……いきなりは言えない。そこでこう切り出した。

「吉次殿のお名は夙に知れておりますが、やはり今をときめく平家とのお商いで……」

そう言うと、

「そりゃあ平家様から寺社などと、いろいろじゃが、商談でないとなると一体何の用じゃ」

とジロリと見据えられた。

「ご覧の通りわしは一介の坊主」

「それはわかる」

大体こんな薄汚れた坊主が素手で三条屋敷に入ってきたためしがない。坊主といえば、香の匂いを沁ませた衣をひらひらさせて、京の産物を提げてくるものだ。それから献上金の話に入るわけである。ところが今日の坊主は様子が違う。

「どこの寺じゃ」

ハタと困った。言っていいものかどうかと——しかし、それでは話は前へ進まない。

「鞍馬でございます」

「鞍馬といえばわしも大方知ってるが」

そりゃ黄金献上となれば、高位の目通りもあろうし、優遇もされていよう。

しかし、寺の話をしにきたわけではない。話を本題に乗せなければならない。

「すると清盛様にもお会いなされることもあるのでしょうが、一体平家の世はいつまでつづきましょうや」

（この坊主、こんなことを言うからは）

吉次の頭にピンとくるものがあった。

「そういうことを訊かれるからは、もしやしてご坊は元、源氏ゆかりの方では？」

と言われてしまった。

黄金を提げてくるだけではない。奥州から京までの遠い道のりを幾度となく旅してくるその度胸と体力。それに、献上のみが仕事ではない。その倍も何倍もの大商いの見返りを手にする目利きの頭脳。こんな男に、その場凌ぎのことを言っても駄目だ。かくなる上はこちらも度胸を据えてかからねばならない。

「名乗るほどの者でもないが、たしかにわしは元、源氏の郎党鎌田正親と申す者。そんな者が罷り出て驚かれましたか」

すると吉次は、

「いや」

と頭を振った。

「そんなお人が、わしの所へこられるということは、余程何かあるようじゃな。何であろう？」

吉次は面白がってはいない。むしろ真面目な眼差しだ。

「お明かしましょう。鞍馬の寺に、一人の稚児がおわします。この稚児を、平泉とやらの都へお移しいたしたいのじゃ」

「ほう。その稚児の名は、もしやして遮那王、元、源氏の棟梁義朝公の忘形見」

すんでのところで正親は声をあげるところであった。

（この吉次までが知っていたとは！）

「どうしてそんな秘事を――誰から？」

正親はうろたえた。

「実はじゃの」

と吉次は、何回か鞍馬寺に足を運んだとき、阿闍梨蓮忍からそれを打ち明けられたという。

「さぞ驚かれましたでしょう」

「いや、常盤ノ方のことは既に知っていたからの。それにお子がたの行方についても関心がなかったと言ったら嘘になろう。ところがわしどころではない、わし以上に関心のあられる方がおられる」

「ほう。それはどこのどなた様で」

正親は躙り寄った。

「実は平泉のお館、藤原秀衡様じゃ」

「秀衡様が！」

「そして、このわしに、牛若殿の器量次第ではひそかに平泉へお連れせよと。つまり引き取ってもいいということなのじゃ。そこでわしは京へくる度、ひそかに鞍馬へ赴き、禅林坊での牛若様を探ってきた」

これは驚いた。

「したがお館様は何ゆえ牛若様を」

「そりゃ秀衡様ともなれば、次の世を考えておられよう」

「次の世をと？」

「ご坊もそのことを考えてこられたのであろう」

そこまで言われては何を隠そう。期するところは奇しくも同じだったようだ。

「実はその牛若様に」

正親は海尊と共に、三年来僧正ケ谷で撃剣と飛跳の技を厳しく仕込んできたことを打ち明けた。

「ほう、剣と体技を」

「したが、御曹司には得度が迫っております。ゆえに急ぎ鞍馬から脱出せねばなりませぬ。そこでいろいろと思案をした挙句、思いついたのが吉次殿でござった。吉次殿の隊列の中に混じらせていただいて、北の京にお移しせんと――それに今

お聞きして驚いたのは、平泉のお館様が、そこまで思いやっていただいていたとは望外の果報。何卒、牛若様を、無事平泉にお送りいただきたく」

と正親は平伏した。

「お頭を上げて下され。もはやわれらの思いと、正親殿の存念は一致した。かくなる上は、早々に牛若様には山を下りられ、われらの中に入っていただこう。そうじゃな、こたびの商いは大方済ませてあるゆえ、三日後の早朝、ここを発つことにしよう。それまでに牛若様をここに。万事お任せあれ。平泉への大事な客人じゃ」

「忝うございまする」

思わず元の侍ことばが喉を衝いた。

「してご坊はどうなさる」

「牛若様が坊から消えると一緒に、わしや海尊殿の姿まで消えたではまずかろうと。よってわれらは、源氏旗上げのときを待って参ずべく、少しずつ味方をふやしておこうと思います。それでは万事よろしくお願いつかまつる」

(二)

三月の鞍馬はまだ朝夕冷えるが、京の町中は暖かい。それでも暁闇は肌寒く、その中を吉次という男の百頭の荷駄隊が三条屋敷を出発した。承安四年（一一七四）である。

吉次という男のことはよくわからないが、牛若は屋敷の前で正親・海尊と別れた。別れしな、

「この男に従いて奥州へ脱けて下され。平泉という所までは遠うござるが、御曹司を大事に迎えて下さる唯一のお味方でござりまする。

われらも供をつかまつりたいところでござりまするが、山で騒ぎを起こすわけにはまいりませぬ。ともかく御曹司の旗上げを、首を長くして待っております。それまでしっかと武技をお鍛え下され」

と涙を浮かべる正親に、牛若は初めて人の情と郎党との絆を意識した。

逢坂山を降りたところで明るくなった。これで京ともいよいよおさらばである。

すると母のことが思い出された。

物心ついた頃から、母を美しいと思った。その母と別れなければならなくなったのは、ひとえに弟が生まれたからだと思い込んでいた。

そして山へくると、自分とよく似た年恰好の稚児がいた。ということは、自分だけではないのだと合点した。

ところが正親の出現によって、驚くべき出自を知り、鞍馬に送られた本当の訳がわかった。のみか、父の元郎党から武技を習った。そこで、生きる道と、背負わさ

れた運命を自覚した。それらを背負って京を離れるのだ。これからは正親、海尊に替わって、吉次とかいう男に従っていかねばならない。

あたりが明るくなってくると、彼方にびっくりするほど美しい水を湛えた世界が広がってきた。

「あれは何じゃ？」

傍らの郎党に訊くと、

「琵琶の湖じゃ」

と教えてくれた。鞍馬山では四分咲きだった桜が、ここでは葉桜である。

それにしても一行の動きの速さには驚かされる。近江へ入ってからは軽塵をあげて進む。そして草津で一服した。湖からは遠ざかっていた。

そこで今宵の旅宿が「鏡の宿」だと聞かされた。宿といってもいわゆる旅籠ではない。土地の長者の屋敷に泊めてもらうのである。

陽が比叡の山に隠れた頃、右手になだらかな三角の山が見えてきた。

「近江富士といわれる三上山じゃ」

と聞かされた。

鏡の宿は「沢殿」と呼ばれる長者屋敷である。湯浴みの後は、熊の毛皮に座して女たちを侍らせた吉次の豪勢な酒宴が始まった。

（吉次とやらは金も力もある男だ）

牛若は酒で顔を火照らせている吉次につくづく畏れを覚えた。そんな中で、誰も牛若の存在など眼中にない。

（わしは鞍馬でもそうじゃったが、ここでもそうじゃ）

日陰者の目立たぬ存在――それをここでも意識した。

ところがそれを覆す事件が起きた。その夜、十数人の盗賊に踏み込まれたのである。ざわざわと人音がして、土塀を越え、雨戸を蹴る音がした。

酒に酔いつぶれた男たちの中で、耳敏く起きたのは牛若だった。素焼の細灯で闇を透かして気配をうかがう。

「盗賊の襲来ですぞー」

大声で喚いたが、誰も起き出す者はない。牛若はとび起きると吉次の部屋を探した。

「お頭、賊でござる。賊でござるぞ、起きて下され」

廊下を行く大声にようやく人々は目醒めたようだ。するとサッと戸が開いた。突っ立ったのは吉次である。

「太刀を、太刀を」

牛若は言うなり吉次の部屋にとび込み、枕元の太刀を取ると走りだした。
既に賊は雨戸を倒し、戸を蹴破って乱入している。雑魚寝の一行は不意討ちを喰って大慌てである。
「ウワーッ」
「ウオーッ」
と喚声があがる。
「起きろ！　太刀を取れえッ！」
吉次の声である。しかし、動きが鈍い。その中で鮮やかな刀技をみせる者がいる。
それこそまるで飛鳥のように、右、左と空を飛びながら太刀をきらめかす。
「ウアーッ」
「ギャーッ」
声をあげるのは賊どもの方である。
「まだ童でねえか」
「なんじゃこれは」
乱入してきた賊どもの、頭を掠めたかと思うと真後ろから刺してくる。
「此奴は鳥か獣か」

賊は右往左往しながら、一人の若者の動きに振り廻された。
「者ども、引けえ！」
一喝が響いて十数人が水のように引いていった。そのとき頭目らしい男が牛若の前に立ちはだかった。
「名を聞かせろ、わしは伊勢ノ三郎じゃ」
見るからに厳い顔の男である。
「牛若丸じゃ」
「牛若丸？」
聞いたこともないといったように、男は首を傾げながら背を向けて消え去った。
ともかく牛若一人の奮戦によって賊徒を追い払ったのである。
「小僧、ぬしは見かけによらぬのう」
「何という流儀じゃ」
起き出してきた男たちにとり巻かれるや、褒めことばを貰った。それにしても吉次一行はだらしがない。
「奴らは何者？」
「鈴鹿の盗賊どもじゃ」
「やっぱり」

「これまでもこんなことがあった。じゃから抜かられぬ」
なら、酔いつぶれなどしないで、気を張っていたらどうだと言いたい。
「頭目らしい男はたしか伊勢ノ三郎とか名乗っておった」
「ほう、おぬしに名前まで名乗ったか」
男たちは腕組みをした。
「奴らは伊勢の者か？」
「そうじゃ。近江から美濃へかけて跳梁する盗賊どもじゃ」
そう答えながら、頭目の顔と名がなぜか義経の心に残った。
そうしたやりとりを部屋の一隅でジッと見つめていたのは吉次である。
（一見おとなしそうな御曹司じゃが、これはなかなか）
僧形の鎌田正親を目に浮かべた。むさい貧乏僧ではあったが、彼の言ったことに間違いはなかった。これだけ仕込んだ牛若を托されたのだ。
（正親の心を無にすることはできぬ）

道はいよいよ美濃へ入ってきた。眼前に美しい伊吹の山容が望まれる。
道中、盗賊談義に花を咲かせたが、次の宿も名にし負う盗賊跋扈の宿場である。
「今宵の宿はどこじゃ」

牛若の問いに連れが答えた。
「山中宿じゃ」
山中宿とは東山道に臨む不破の関に近い宿場である。
この辺りは東国と京畿、北陸道を結ぶ要衝の地で、旅人の数はひきもきらない。その旅人を狙う盗賊の巣窟が伊吹山である。
「今夜あたりまた来襲るかもしれんぞ」
「いや、ここは親爺殿が手なずけてあるから大丈夫じゃ」
というのは、吉次がそれなりの金品を撒いているということだ。
「ほう」
牛若は感心しながら合点した。なにしろ長い道中である。いろいろなことがあろう。
山中宿にくると木戸があった。そこへ吉次の百頭の荷駄隊が入るのだから壮観である。それでも木戸の中の宿場の人々は見知っているからか、驚きもせず笑顔で眺めている。
荷駄の一行が、ざわざわと常宿の門の中へ入ると、まず蔵の前で荷をおろす。それを牛若は離れた所でじっと見つめる。
百頭もの馬の荷をおろすには時間がかかる。それでも牛若は動かない。一時（約

二時間）近くもかかり、はや陽も落ちかけてきた。

郎党たちは馬を繋ぐと、早々に屋敷の方へ入っていく。それを見届けると、牛若は一頭の馬に近づき、鞍を置いてこっそりと屋敷を離れた。馬の扱いや騎乗も僧正ケ谷で覚えた。

木戸口へくると、番人が戸を閉めにかかっている。

「まだ明るいのに、早から閉めてしまうのか」

番人は、都風の稚児が馬に乗ってきたのに驚く。

「ここは山の方から賊が出没しますんで、こうして早目に木戸を閉めます。一体若は今頃からどちらに？」

「『青墓』へ行きたい。青墓とはどちらじゃ」

「ああ、青墓はさして遠くありませぬ。ここから往還を真っ直ぐ東へ走られますと、やがて北へ道が分かれます。そこから直ぐで」

「それではわしが戻ってきたら、ここを開けてくれ」

牛若は袋から金の粒を渡した。金の粒は別れしなに正親から、いざというときにと渡されたものである。木戸を出ると、牛若は風を切って青墓を目ざした。

青墓とは、平治元年（一一五九）十二月、平治ノ乱で平清盛に敗れた義朝が、雪の中を長男義平、二男朝長、三男頼朝、それに数名の従者を伴って美濃に落ちた所である。

途中、「不破の関」あたりで頼朝ははぐれ、青墓に着いたときは、主従わずか七騎、しかも朝長は脚に重傷を負って歩けない状態であった。

義朝が青墓に逃れたのは、この地の豪族大炊氏が源氏の有力御家人で、娘が義朝の妾になっていたこと、それに義平の母もまた大炊氏の一族で、その縁故を頼ったものである。

しかし、平家の追及は日を追って厳しくなり、やむなく義朝は義平を北陸へ、朝長を信濃へ逃がし、自らは東国へ落ちのびようと決した。

ところが朝長は、降る雪の量と、傷の深さに耐えかね、これ以上歩行ができぬと覚悟し、黙って父に手を合わせて念仏を唱えた。

義朝は息子の健気な意志を察し、敵の手にかかるよりはと、涙をのんで朝長を刺した。時に朝長十五歳であった。

長兄義平はその後、京で再起を図ったが捕えられて斬られた。父義朝は家人の長田忠致を頼って尾張の内海まで逃れたが、忠致によって逆に謀殺されてしまった。

そうしたことと、墓があることを、正親から別れの前日聞かされた。

（とにかく青墓へ――）

父と二人の兄が別れた所である。なんとしてもそこへ行ってみたかった。そして

もし、墓らしきものがあるなら、そこで対面したいの一念だ。

逸る心を馬に鞭打って、薄暮の往還を東へ走る。腰には、包みが一つくくられている。

道はすぐわかった。青墓の家並みを過ぎた辺りから、駒脚を小刻みにして林の中を透かしたり、寺の境内の中を探してみた。

しかし、なかなかそれらしいものが見当たらない。さりとて人に尋ねるわけにもいかない。陽が伊吹山に隠れ、翳りだしてきた。苛立ちと哀しみが胸を揺らす。

と、元寺らしい墟の一隅に、小さな三基の五輪塔を見つけた。それはあまりに小さく、うっかりすると叢の中に見落とすほどである。

馬から降りて、引かれるように近づくと、卒塔婆が倒れている。その字も風雨にかすれて薄い。それを引きよせてみると、微かに父と二人の兄の俗名が記されていた。おそらく源氏ゆかりの者が、こっそりと立てたものであろう。

牛若の体に瘧病のような震えがきた。

(父上！　兄上！)

体の奥底から湧き上がってくる慟哭を、抑えることができなかった。

世が世なら、武家の権門として京に在るべき源氏が、このような寂しい寺址の一角に、まるで置き忘れられたように叢に埋もれている。

たとえ見ることの叶わなかった父であり兄であっても、そこに薄く記された銘は、たしかにわが父であり兄である。

(ご無念にござりましょう)

牛若は地に両手をついて、三尺にも足りぬ小さな五輪塔の前で嗚咽した。この感動は、母の家でも、鞍馬でもついぞなかった。生涯初めてのものである。もの言わぬ小さな石ながら、それは生ける父と兄である。

「父上、兄上」

低声で呼ぶと、牛若は腰にくくった包みを解いた。中からとり出したのは、鞍馬を出るとき、ひそかに盗み出した烏帽子と直垂装束である。

(元服を――)

正親にもそれは洩らさなかったが、鞍馬脱出のときそれを決意した。

聞くところによると、元服の式とは大仰なもので、主筋の一門を招いて厳粛かつ盛大に行われる。そのときの加冠の役を「烏帽子親」といい、名乗りも主筋か親の一字をとるという。

しかし、今は東国の隊商の中に紛れこむ鞍馬の脱出者である。そんな者に、晴れがましい元服などありえようがない。

牛若がひそかに考えたのは、荷駄隊が往くという伊吹の山の麓、青墓で、父と兄

の墓前で一人元服することである。

（余人は要らぬ）

包みの中から櫛をとり出して髪をすきあげた。そして短刀を抜くと髪の先を切り、髻（もとどり）を作って紐で結んだ。それから烏帽子を一人で冠した。装束はない。

次は名乗りである。道中、いろいろ考えた。自分が義朝の九男ということは、通称九郎となる。次に名は父の一字をとって「義」、ここまでは難はない。それから先が難しい。いろいろと考えあぐねると、正親の言ったことを思い出した。

そもそも源氏は清和天皇からはじまるという。その子貞純（さだずみ）親王の子が経基（つねもと）で、この経基から臣籍降下して源の姓を賜った。

それを用いれば、義経（よしつね）か義基（よしもと）であろう。問題は「経」か「基」かだ。「経」には、たて、たてのすじというほかに、つね、即ち一定しているとか、道理という意がある。それに経典・経文などである。

鞍馬で経を読み習ったということもあって、ごく自然に「経」をとり、「義経」とした。

木洩れ陽の最後の一箭（せん）が丁度三基の墓石に差した。

「牛若、只今一人で父上・兄上の前で元服いたしました。源九郎義経にございまする。必ずや平家を討ち、父上・兄上のお怨み晴らしておみせいたしますゆえ、義経

をお見守り下さりませ」
まるで生ける人の前で語るように述べると、義経はきりりと唇を結んでもう一度拝礼した。
「稚児の姿が見えませぬが」
郎党の注進である。
一行の中の一人ぐらい脱けようと、どうということはないが、吉次も先ほどから牛若の姿のないことを気にしていた。
「一体どこへ？」
特別扱いはできぬが、正親から頼まれた大事な客人である。
（少々ほったらかし過ぎたかな？）
逃げられたとしたら、人をやって捜さねばならない。まだそう遠くまで行くはずはない。そんなことを思案していると、
「只今、戻ってきました」
と一人が報じてきた。
「それがお頭、馬に乗って」
「馬じゃと？」

ということは、馬に乗れるということだ。
郎党に見つかり、やむなく義経は馬を返して吉次の前にやってきた。すると驚いたことに稚児髷がとれているではないか。人払いした吉次は部屋に入れるなり訊いた。
「どこへ行かれた」
「ぜひとも行きたい所がありきしゆえ」
「それにその頭はどういうことじゃ」
「元服しました」
「元服じゃと？」
吉次は吃驚（きっきょう）として目を剝いた。
「どこで？」
「青墓という所」
「青墓と？」
首を傾げた。
「父義朝、兄義平・朝長の墓があります」
源家三人の墓が青墓にあるとは知らなかった。
「よく知っておられたな」

「正親から教えられました」
「なるほど。それで？」
「父上と兄上に会うてきました。そのために馬をお借りした」
「うーむ」
「そして父上と兄上の墓前で、牛若、一人で元服してきました」
美しいほど爽やかなその顔に、吉次はうっとりした。
（世が世なら、源家の息男として華やかな元服の式があろうものを）
一人脱け出して親兄弟の墓を探し、その墓前でひっそりと己が元服をやろうとは——。
吉次が牛若に強く心を惹かれたのは、このときである。
「して名乗りも自分で？」
「はい」
「なんと言われる」
「源九郎義経。ただし、平泉へ着くまではこれまで同様牛若」
「そうか」
頷きながら吉次は、自分の生涯の幾分かをこの若い御曹司に尽くしてやろうという気になった。

「いい名乗りじゃ」
「そうですか。父や兄の怨みを晴らし、父や兄の分まで生きたいと思うております」
九郎の目が輝いている。
「そうか」
このとき吉次の顔は商人ではなく、男の顔になっていた。

第三章　木曾谷

(一)

生温い風が吹いている。

昨夜は何事もなく明け、屋敷の朝は荷駄隊で蒸せるようだ。準備の整った一行は、吉次の号令を待つばかりだ。

「どちらの道をとられますんで？」

郎党の了之介が訊いた。どちらの道とは、東海道をとるか、それとも大垣から真っ直ぐ東をさして恵那の方、つまり東山道をとるかということだ。

京から奥州への道は、東海道を経て武蔵、下野、白河の関を越えて北上するか、木曾路を越えて信濃、上野から北へ――と二つある。

距離からみれば、東山道がはるかに近い。しかし、こちらは険阻な山路に狭か

れ、盗賊の難に遭う率が高い。ゆえに、急がなければゆっくりと東海道をとった方がよいのだ。それを吉次はなぜか迷っている。迷う理由は元服した九郎義経のことだ。

心配の種は伊豆である。伊豆といっても半島の付け根に蛭ケ小島という所があり、そこに九郎の三兄頼朝がいるからだ。

頼朝といえば、父義朝、長兄義平、次兄朝長らと共に京を逃れて美濃までやってきたが、不破の関辺りではぐれ、遂に平家に捕まって京へ送られた。

そこで斬られるところを、奇しくも一命を拾うことになった。というのは、清盛の継母池ノ禅尼や嫡男重盛の助命嘆願によって、伊豆流罪ということになった。それから数えると、もう二十八歳になっているはずだ。

このことを、元服した九郎が知っているかどうかだ。知らなければ平坦な東海道を往く方がいい。

しかし、知っているとなれば、青墓のようなことをしでかさないとも限らない。つまりこっそりと宿を脱け出して、蛭ケ小島へ行くだろう。

行けば、青墓と違って頼朝は生きている。互いに生きてめぐり会うとなると、若い二人だ、戻ってくるとは限らない。それより何が起こるかわからない。

起きるとなれば、九郎の方だ。頼朝という男は滅多な動きをする人間ではない。

そう考えると、伊豆の近くを往くわけにはいかぬだろう。無事に平泉に送り届けるのが吉次の役目である。平泉のお館様のためにも、そしてあの鎌田正親のためにもだ。そう決すると吉次は了之介を呼んだ。

「こたびは東山道じゃ。急ぎの用を思いついてな」

「ははっ」

了之介は訊き返すことなく外へ出ていった。ほどなく外から、

「戻りは東山道をとる。よいか。出発じゃあー」

了之介の太い声が響いた。

日は長く、旅程は無事に進んでいる。新緑を映す木曾川の水が青く、恵那峡が目を楽しませる。それに「寝覚めの床」の碧い水と白い岩石の調和が美しい。

行進を止めて一休みすると、九郎が岩から岩へ飛び跳ねてみせる技に一行は驚いた。

「軽技じゃのう」

「なんと身の軽い」

「どこで覚えたものかのう」

一行は既に、「鏡の宿」での義経の剣技を見せつけられたが、それを再びここで披露された。

「名はなんと言う?」

「よくは知らぬが牛……牛なんとかじゃ」

「牛若と言うとったぞ」

「ああ、それそれ牛若じゃ」

「牛若にしては身が軽過ぎる。鳥若とでも言い変えたらいい」

「ハハハ、そうじゃのう」

「それから見よ、彼奴の頭はもう稚児ではないぞ」

「いつから変わった?」

「伊吹の麓、山中宿じゃったと思う」

「旅の途中で大人になったというわけか」

「どこで髪を切った?」

「大方、お頭の部屋ではないかの」

「いや、わしはお頭の部屋に出入りしていたが、そんな気配はなかった」

「すると奴、一人でやったのじゃ」

「どういう縁か知らんが、面白い童じゃ」

「いや、もう童じゃねえ」

「それでもああしてひょいひょい飛び跳ねる姿など、童じゃねえか」

と男どもは面白がる。しかし、誰も九郎がどこの、誰の息子かなどと訊き合う者はいない。彼をまだ一人前と思っていないようだ。

そして六日目、木曾福島に着いた。四囲を高い山に囲まれた福島は、まさに美林の里である。馴染みの屋敷に入ると、男たちは部屋に入って四肢を伸ばす。

そして夕餉（ゆうげ）の前のひととき、旅中の雑談に花を咲かす。九郎はその中に入れず、つまりは馬を借りて外へ出た。

鞍馬とよく似て鬱蒼とした杉山と、清澄な空気である。暫く往くと、土塀をめぐらした館が見えてきた。

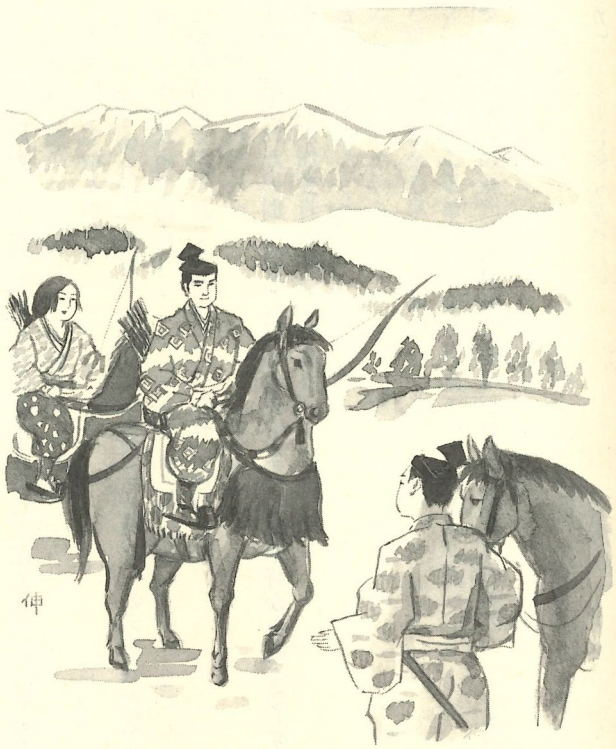
（誰の館であろう）

近づいていくと、門からいきなり騎馬の男が出てきた。つづいて三、四人の騎馬にまじって、目を疑ったのは女人がその中にいたことだ。

黒髪を束ね、男のような野袴をつけた女は一見して十三、四歳に見えた。

つい引き入られるようにして後を尾（つ）けた。すると、止まった所は草の生えた広場である。

こちらから見ていると、四、五人が草地をぐるぐると馬をこなしながら走っている。その中の女人も男に劣らず尾（つ）いていく。



それから降りると、用意してきた矢筒から矢をとり出して彼方の白い的をめがけて弓射の稽古である。

（武士はあのようにしてやるのか）

なにしろ武の修練といえば、深更、闇の中で正親と海尊から教えられた剣と体技、それに馬のこなしだけである。

いわゆる弓矢の稽古をやったことがない。つられて近づくと、

「どちらから？」

と中の一人から訊かれた。別に怪しんでいる風もなく、年恰好からみて親しみを感じられたようだ。いずれも若武者たちである。

京からと言えばまずかろうと、

「美濃じゃ」

と言った。

「美濃じゃと、美濃のどこじゃ？」

とまた訊かれた。母のいる一条門界隈と鞍馬しか知らぬ九郎である。とっさに、

「山中宿」

と答えたら、

「ああ山中か」

と頷いた。それより弓射を見たい。

吉次や、一行の中では三十人ほどが弓矢を携えているが、矢の飛ぶ様はまだ見たことがない。

「毎日稽古しておられるのか」

「そうとも、一日も怠ることはない。武士は武を練らねばならぬ」

羨ましいと思った。自分も早くそれをやってみたい。

「したがおぬしは何をしている？」

「荷駄の警護」

「警護をやっているなら弓矢は一通りできるじゃろう」

と言われてしまった。本来ならその通りだろう。しかし、弓矢の術は全くない。

「それでどこまで行くのじゃ」

「平泉という所じゃ」

「おお、平泉といえば奥州ではないか、ここからでも遥かに遠いわ。一体何人ぐらいじゃ」

「馬百頭に三百人」

「馬百頭？　そんな荷駄が往くとはまるで戦さの兵站じゃな」

そう言ったのは年恰好は二十歳、黒々とした髪を束ねた眉濃い男である。その男

を、皆はなぜか「殿」と言う。
「先ほどから、こちらの方を殿と呼んでおられるが、どちらの殿で」
「ああ、あの館の殿じゃ」
とさきほどの土塀に囲われた屋敷を指した。
「すると木曾の殿ということか？」
「そうじゃ、まさに木曾の殿でおわす」
傍らの若い男が答えた。と、もう一人がこう講釈した。
「おぬしにはわかるまいが、殿は木曾の生え抜きではない。元はといえば源氏の御曹司じゃ」
「源氏のと言われまするか？」
びっくりした。まさかこんな山中で、源氏の御曹司とは腰が抜ける。
「源氏の――とは、どのお方の御曹司で」
「そんなことがおぬしにわかるのか」
と一人から言われた。すると御曹司と言われた男が、
「わしの父は源義賢じゃ。その義賢が源義平に討たれたため、わしは二歳で母方のこの木曾に移った。もう十八年も前のことじゃ。したがわしは、こんな山の中でも源氏の再興を考えている」

「殿、こんな旅の者に、そんなことを饒舌っていいのですか」
と一人が窘めた。
驚いたのは九郎である。まさか木曾の山中で、源氏という名を聞こうとは思わなかった。それも源氏再興とまで言ってのけたのだから――。
「お名を承らせていただけませぬか」
九郎のことばが改まった。
「木曾次郎義仲、正しくは源義仲じゃ」
義仲がそこまで語ったのはやはり血であろうか。
義仲が語ったように、父は帯刀先生義賢と言い、源為義の次男である。義賢が帯刀先生と呼ばれたのは、京で近衛天皇の皇太子時代、その護衛長官をつとめたことによる。
義賢の居住地は武蔵国大蔵で、秩父氏の河越重隆と組んで勢力をのばしつつあった頃、甥の義平（義経の長兄）に襲われ落命した。久寿二年（一一五五）であった。
当時二歳だった駒王丸（義仲）は、後難を避けて母の親戚筋の木曾中原兼遠のところに預けられ、兼遠が養父となった。
仁安元年（一一六六）、十三歳で元服、駒王丸は木曾次郎義仲と名乗った。このとき兼遠は子の今井四郎兼平と樋口次郎兼光を臣従させ、娘の巴を側近とした。義仲

の傍らにいるのはその者たちである。

九郎義経の胸は震えた。そうなると目の前にいる義仲は九郎にとって従兄弟(いとこ)である。奥州への道の途中、それもこんな山中で、まさか血を分けた従兄弟に会おうとは夢にも思わなかった。

(義仲殿!)

その胸にとび付いていきたい衝動にかられた。

自分はこれまであまりに独りであり過ぎた。それが目の前に、血の繋がる従兄弟がいる。それも源氏再興の夢を持っているなどと洩らしてくれた。

この義仲殿に身を寄せ、共に武を練っていくのがめぐり会わせかもしれぬ。青墓の墓前と違って、こちらは現実の人である。

そんな衝動を、すんでのところで抑えたのは、正親と吉次の顔が浮かんだからだ。

「それでおぬしは?」

義仲の目が優しい。何かを感じとってくれているようで、いよいよ心が乱れる。

「訳あって子どもの頃、京の鞍馬に預けられました。そしてこれから奥州の平泉へ行くことになっています」

「平泉で何をするのじゃ」

ということは、奥州への荷駄人足とは見ていないようだ。

「藤原秀衡(ひでひら)様の所で武技を習いたいと思っています」

「武技なら、何もそんなに遠い所へ行かずともよかろうに」

「それでも約束ですから」

「そうか。それなら仕方ないなあ。したがわしを思い出したら、いつでもきてくれ」

もう少しで涙が洩れるところであった。

「有難うございまする。そういうときがきたら、必ず木曾殿の許(もと)に参ります」

しかし運命は皮肉である。十年後、九郎義経が義仲の所へやってくるときは、軍勢を従えて、義仲討伐にくることになろうとは、このとき思いもよらぬ二人であった。

(二)

道の彼方、黒々とした森の中に高々と土居を盛りあげ、巨木で柵を立ててあるのが見えてきた。

「白河の関じゃ」

これからいよいよ奥州である。ということは、平家の手の及ばぬところまできたということだ。門は開いていた。

「よいのか」

訊いてみると、

「その昔、八幡太郎義家殿が征夷大将軍となって奥州を平らげてからこのかた、門はいつも開いているのじゃ」

と郎党の一人が教えてくれた。

（八幡太郎義家殿か）

わが遠祖である。鞍馬でも話は聞かされたが、九郎の遠祖だということを知ったのは正親からである。その英雄の名を、彼等も知っていたとは嬉しい。

弓の名人と賛えられ、その後、陸奥守に任ぜられ、東国における源氏の基礎を築いた。義家はまた、「勿来関（なこそのせき）」で秀逸な和歌を残した雅（みやび）の人としても知られている。

（それからみて今の源氏は――そして自分は）

名も秘して、荷駄隊の中に紛れながら奥州の藤原氏を当てにしていく旅である。

しかし、どんな屈辱にも耐えられるのは、自分がそうした祖や父、つまり源氏の男だという矜持（きょうじ）である。

それにしても道の両側はどこまでも濃い森がつづいている。聚落もなく、馬の蹄の音のみ聞こえ、郎党の饒舌もない。

（一体どこまでつづく）

行けども行けども森の原野である。京と違って森の色が濃く黒い。

「後、何日かかるのじゃ」

「十日はかかる」

京を出てからもう一カ月の余は過ぎている。やはり遠い辺地である。こんな原野の果てに奥州の都があるというのか――信じ難くなってきた。

（それにしても吉次は大した男じゃ）

年に二回とはいえ、この遠路をよく往復するものだ。体力と知力なくして出来る業ではないだろう。

ところが二、三日してから、吉次の姿が見えなくなった。そのせいかどうか、九郎に対する郎党たちの態度が変わった。

村の土豪らしき家に入ると、

「おい、若造、馬を洗え」

と命ぜられた。いきなり豹変されて驚いた。馬など洗ったこともないが、ともかく郎党に付いていくと、川から水を汲んでこなければならないようだ。

二十人ほどが両手に桶を提げて黙々と川の方へ歩いていく。九郎も桶を提げて後

へつづいた。空桶まではよかったが、水の入った桶の重さは何度も何度も手を休めねばならない。それからは馬の体を洗うといっても要領を得ない。

「こうして背からやるんじゃ」

と言われ、命ぜられるままに馬腹から脚へと手を動かす。

「下手にやったら蹴り殺されるぞ」

と怒鳴られ、また驚く。そうして洗い終えれば馬糞の始末と馬糧の用意である。一人でやるわけではないが、妙に惨めで涙が出そうになる。それから飯にありついたのはかなり遅く、倒れるようにして寝入った。

そうして次の日も次の日も、まるで下僕のような扱いとなった。

（どうしてこうなる……）

やはり吉次がいないからだ。ということは、吉次のおかげで特別扱いをされてきたということがわかった。

それにしても吉次はどこへ消えた。平泉の近くまできて、姿を消すとはどういうことだ。

（平泉でもこんな扱いを受けるのでは）

藤原秀衡という人物に不安を覚えてきた。いや、吉次にさえ不信を覚えないわけにはいかなくなった。

だからといって腹を立てるわけにもいかず、戻ることもできない。と、木曾日義村の義仲の顔が浮かんできた。

何もそんなに遠い所へ行かずともよかろう。わしを思い出したらいつでもきてくれと言ったことばが思い出される。

（木曾へ戻ろうか）

そんな衝動にかられる。それを我慢しながら行くと築館（つきたて）宿に入ってきた。

この辺りは杉林が多く、左手の石段を上った所が「杉薬師」と呼ばれる古寺、興福寺だという。杉並木の参道には三十数体の観音像が並び、拝みにくる人々が観音像の足下に小石を積むという。

「お館様もこられる」

ということは、藤原秀衡も参拝されるほど崇敬を集めているということだ。しかし、九郎の気は重く、足の裏から血が滲んでいる。

それでも藤原秀衡に会うための旅である。たとえ道中、どんな目に遭おうと、秀衡殿に見（まみ）えるまでは気を落としてはならない。

そして明くる日、金成（かんなり）という所にやってきた。妙な名前だと思っていると、目を見張るような屋敷がつづいている。

「ここはどういう所じゃ」

「名の通り、金掘りの町じゃよ」
金掘りといえば砂金を掘る所であろうか。なるほどこれまでの村々の佇まいとはガラリと様子が違っている。
奥州は黄金の都と言うが、それが嘘、偽りでないことを証しているようだ。となると平泉の繁栄はどんなものであろう。
町の入口で小休止をすることになった。道の両側に腰をおろして休んでいると、
「若造、よう我慢してきたな。旅もいよいよお仕舞いじゃ」
と一人から声をかけられた。
「終わりじゃと？　するとここが平泉か」
「いや、平泉はまだ先じゃが、吉次様の荷駄はここで終わる」
「ここで？」
「おぬしにゃわかるまいが、吉次様の屋敷と蔵がこの金成にあるのじゃ。それから先のことは吉次様の商いということ。よってわしらもここで、ようようお銭を頂戴できるというわけじゃ」
かぎ鼻の男は胴丸を叩いて笑った。
ということは、消えた吉次が現われるということだ。ほっとした。
「したが若造、吾主は一体何者じゃ？」

とうとう嫌なことを訊かれてしまった。
「何者じゃと？」
九郎は訝るような目をした。
「見かけは女子のような白い顔じゃが、太刀を使い技もある。一体、京で何をしていた」
「寺におった」
「寺じゃと、寺で何を？」
「寺といえば決まっておろう。僧になるのじゃ」
「僧になろうという者が、どうして太刀など取る。しかも仲々の腕前ではないか」
ハハハと九郎は笑った。笑いながら答えを思案した。
「叡山や大きい寺では、僧も薙刀や刀を取るではないか」
「すると吾主は僧兵の卵じゃな」
男は独り合点して、また笑った。叡山の山法師の卵と見られるなら、その方が都合がよい。
すると別の男が後をつづけた。
「したが僧兵の卵がどうしてこんな平泉まで？」
「吉次殿の差配じゃ」

「ほう――」
吉次の名が出るに及んで男は黙った。すると別の一人が、
「お頭の居ぬを幸いと、吾主に酷う当たったを、饒舌るでないぞ」
と言った。
「いや、皆と同じことをしたと思うている」
「そうか」
男らは黙った。ともかく長の道中はここで終わったようだ。
すると彼方から、消えた吉次が悠々と姿を現わしてきた。
「お頭じゃ」
道の脇に腰を落としていた男たちが一斉に立ち上がった。九郎には吉次の顔が懐かしい。
「一体どこへ行ってしまわれたかと……」
その間の酷い仕打ちは言うまい。しかし吉次は、九郎の汚れた着衣と手足の生傷を見て、数日の間に何があったかを一見して悟ったようだ。それにこういう経験も、敢えてやって貰わねばならぬと思っている吉次である。
「ここはわしの在所じゃ。親父は炭焼藤太と言われているが、わしは炭でのうて金掘りをやる。よってこの町は金で栄える金成というわけじゃよ」

「それで先に来ておられたのですか」
「うむ。いろいろ準備があるから」
それで途中から消えた理由もわかったが、これでいよいよ吉次という男の正体が見えてきたようだ。

久しぶりにぐっすりと寝た。それも藁の上ではなく、柔らかい布団の中だ。その上、衣も新しい。
「お目覚めでございますか」
女の声にびっくりして覚醒した。入口に手をついた女を、はじめ母の常盤かと思った。なにしろ女人といえば母以外に接触したことがないからだ。
「そなたは誰じゃ」
「はい、御用を承ることになっている『こよ』にございます」
幾つかはわからない。母よりは若いようだが母のように美しくはない。しかし、京訛だと気がついた。
「ほかの者たちは？」
「道中の人たちは昨夜とっくに帰られました」
「ということは、わし一人か」

「はい」
「ここは吉次殿の屋敷じゃったな」
夕方入ったため、屋敷の中までよくわからなかった。しかし、広い部屋の造りから、縁側を通して映る庭の景色も、養父藤原長成（ながなり）の屋敷と変わらない。いや、むしろ京の屋敷以上だ。
（こんな北の広野に、こんな屋敷）
吉次の財力を見せつけられた。これから何が起こるというのか――。
薫風の吹き抜ける広い部屋で、吉次と二人相向かって朝餉をとった。鞍馬や母の家でも食べたこともない馳走である。
「美味じゃ。したがどうしてこんなに馳走して下さる」
道中とはまるで打って変わった待遇だ。
「いや、これがこの家の暮らしじゃ。格別馳走しているわけではない」
となると、いよいよわからなくなってくる。吉次という男は一体どんな男だろう。
「それで明日からわしはどうすれば……」
「暫くここに滞在してもらおう」
「いつまで」

「お館様の様子を伺ってから」
お館様とは藤原秀衡のことである。秀衡に会うまでに、献上の金品を調（ととの）えなければならないからだ。
「まあ、四、五日というところかな」
「それなら」
ここまできて滞留されてはと案じたからだ。
「それから……」
と吉次は一寸口ごもった。
「何か？」
「九郎殿にはこれまで女人を抱かれたことが……」
「ありませぬ。鞍馬に居たゆえ」
「では今宵、一人心利いた女子を差し向けよう」
九郎はまごついた。
「いや、女子はまだいりませぬ。秀衡様に拝謁もせぬというに」
「それゆえ男たるもの、女子も知らぬようでは話にならぬ」
「そうかもしれませぬが、今のわしには」
九郎は真面目である。

「そうか」
「ほかに心の準備など要りませぬか」
「特にない。ありのままで」
「では、何を言ってもよろしいのですか」
「うーむ」
吉次は一つ唸ると目を庭にやった。眉も毛も濃く、眼窩の深い眼差しから、蝦夷か、それともその血を引く種族だということを改めてわかった。
奥州とはそういう人たちの作った国であり、秀衡殿も多分そうした人であろう。
そんなことを思っていると、
「そうじゃ」
吉次は思いついたように頷いた。
「若のことは、とっくに調べがついている。じゃから、何も隠すことはないが阿ることもない。訊かれたことに、素直にお答えなさるがよかろう。ともかくここへ来たからは、お館様の機嫌を損じるようなことがあってはならぬ」
そうなると若い九郎も言いたいことがもたげてくる。
「それではお訊ねしたい」
「何か？」

「何をお訊ねしてもよろしいですか」
「なんなりと」
「吉次殿は都の平家と、平泉の秀衡様とどちらが大事ですか」
「それはきまっておろう。わしの本拠は奥州じゃ。それに秀衡様はいかんぞ。お館様か御所様じゃ」
「では何ゆえ清盛や、都の寺々に金品や馬を献上なさるのです」
ほう——と思った。そんなことを率直に訊くところは若いというか、世間知らずだ。
「奥州が豊かで、藤原氏が栄えているのは金のお陰じゃ。しかし唯一ないのは位階という権威。これは京の朝廷から戴くことになっているからなあ」
「それで金品や馬を献上なさるのですか」
「そうじゃ。買うといってもよい」
「買う？」
「それほど金の力は大きい」
「清盛はなぜ太政大臣になれたのです」
「それは武力であろう。武力は、金以上の力になるものじゃ」
（父上はそれに負けた）

九郎はじっと吉次を見つめた。寺という隔離された所にいた九郎には、まだ世の中というものがわかっていない。

「吉次殿」

「ん？」

「お館様は、既にわしのことを調べてあると言われたが、わしを必要とされるであろうか？」

「それは九郎殿の器量次第であろう。お館様が九郎殿をどう見られるかによる」

「うーむ」

思わず唸った。

「よおくお考えなされ。若は目下、天涯孤独のお身の上じゃ。いずれ世に立つとしても、天涯孤独では何も出来ぬ。お館様の所にいてこそ力を蓄えることができよう。そのためにはお館様の意に添わねばならぬ」

（そうか）

今は大樹の陰に寄るべき身の上である。

第四章　奥州平泉

(一)

藤原秀衡が奥州藤原氏の三代目を継承したのは保元二年（一一五七）頃である。その秀衡から二百二十年ほど前、京から東国へ下って、「平将門ノ乱」を鎮め、坂東の覇者となったのが藤原秀郷（別名、俵藤太秀郷）といわれている。この秀郷の流れをくむと称したのが、藤原氏初代清衡の父、亘経清である。

下総の住人であった経清は、若い頃父と共に奥州へ下り、奥六郡の豪族、安倍氏に付き、女婿となった。

ところがその後、安倍氏と鎮守府将軍源頼義・義家との間で戦さとなり（前九年ノ役）、経清は厨川で殺された。この経清の子が清衡である。

この戦さで源氏方に加担したのは、出羽山北の豪族、清原武則で、戦さが終わる

と清衡の母は敵方の武則に奪われた。このとき幼い清衡は、母の連れ子となって清原家に養われることになった。

それから後、今度は清原氏の中で内訌が起こり、成長した清衡は清原氏を倒して奥州藤原氏を起こし、初代となった。

こうして俘囚の地に、藤原氏の国を建てた清衡は、常に京を意識して時の関白忠実に献金献馬を行い、第二の京を目ざすべく、中尊寺や大長寿院、中尊寺金色堂を建立した。

それは平和と文化を誇示するもので、中央への叛意など些かもないという証でもあった。

そして今や三代目の秀衡は、鎮守府将軍となって「伽羅御所」に君臨している。伽羅とは香木のことで、それをもって造営した居館は、まさに贅を尽くした寝殿造りである。

それまでは「平泉館」（後に柳之御所）を政庁と居館にしてきたが、秀衡のとき別に伽羅御所を増築した。

その御所へ吉次が参上してきた。既に注文の品々や珍品は献上済みで、今日は都の情報と、九郎義経の引見の日を伺うためである。

青地に銀の刺しをほどこした直衣姿でゆったりとくつろいでいる秀衡はこの年五

十二歳、薄い頭髪におだやかな顔は、頂点を極めたゆとりを表わしている。

「で、都の情勢は……」

都の情勢とは、極階を極めた清盛の専横に対する平氏打倒の陰謀が囁かれるこの頃の様子である。

「すでに法皇（後白河）様の御名まで聞こえております」

「ほう」

「そこで御所様」

吉次は膝をのり出した。

「御所様の仰せに従い、京の鞍馬から牛若丸を連れて参りましたが、いつ面謁叶いましょうか」

「ほう、連れてきたか。したがよくも連れ出せたものじゃな。いかなる手だてじゃった」

吉次はこれまでの次第を語った。すると秀衡は頷きながら言った。

「それほど牛若殿に思いを懸ける源氏の遺臣がいるとは、牛若殿も幸せじゃな。いや、源氏の未来はあるやもしれぬ」

「こたびの道中、『鏡の宿』で盗賊に踏み込まれたときの牛若殿の剣技はまことに鮮やかでござりました。とにかく宙を飛ぶのでござりまするから――あんな技をどう

して会得されたかと、皆々感じ入った次第で。
それに剣技・体技だけではなく、相貌に華があると申しましょうか、男惚れのする佳き若者にござります。それに道中元服され、九郎義経と申されます」
「そうか」
秀衡は鷹揚に肯いた。
「で、いつ拝謁叶いましょうか」
これで二度、吉次はそれを催促した。
「うーむ」
秀衡は頷くものの、肝心の日時を口にしない。
「何か不都合でもござりましょうか」
吉次は秀衡の顔を覗くようにした。
「いや、不都合はないが、ここで会うわけにはいかぬなあ」
「何ゆえにござりまする」
「平泉にも京から潜入してきている者もおろう。余が源氏の遺児に正面切って会うことが、そんな者の口から、京へ聞こえるのは得策でない。それに、基成の目もあるからなあ。基成や範季の口から進言してくれるよう計ってくれぬか」
「ああ、成るほど、そうでござりました」

勢い込んできた吉次だったが、そこまで秀衡が慎重だったとは気がつかなかった。しかし、言われてみればその通りだ。
ここで秀衡が口にした基成とは藤原基成のことである。
この藤原は奥州藤原氏ではなく、歴とした京の藤原一門の出である。即ち、藤原北家道隆の流れをくむ名家で、父忠隆は白河院の近臣であった。
康治二年（一一四三）といえば三十一年前である。鎮守府将軍となって平泉へ下向してきた基成は、当時二十歳そこそこであった。その基成を迎えたのは、藤原氏二代目の基衡だった。
そこで基成は、北の果ての平泉で、第二の京を発見した。即ち、産金による豊かな平泉、そこには毛越寺や中尊寺金色堂など、その華麗と壮厳は京を凌ぐものがある。
それに平泉の王、基衡の好遇が基成を平泉に引きつけた。そういうことから、鎮守府将軍を退任してからも平泉にとどまり、基衡没後は三代目秀衡とも親しく交わり、平泉繁栄の中にいた。
そうして、己が娘を、親子ほども年の違う秀衡の正室にと考えるようになった。
かつて京にいた頃は、「陸奥守」になることさえ嫌った基成である。その基成が変わったのは野心だ。奥州藤原氏の富と権力をものにするためには血で結ぶことが肝

心である。

そうして嫡子泰衡が生まれ、基成は奥州藤原氏の外祖父としての地位と力を手に入れた。

次に範季とは藤原範季のことで、来年あたり、陸奥守となって平泉入りをしてくるという筋書きになっている人物である。

この範季が、九郎の異母兄範頼を密かに養育しているという。その範季が平泉に下向してきた時を見計らってというのが、無理のない会い方ではないかと秀衡は考えている。そしてそれは、範季の方から言わせる方が自然で、九郎のためにもよかろうと思うからだ。

「承知つかまつりました」

と吉次は得心して伽羅御所から退出した。

金成（かんなり）の屋敷に戻ってくると、

「拝謁はいつに？」

吉次を待っていたとばかり九郎が戸口に飛び出してきた。

「ああ、いろいろあってなあ」

吉次は部屋に入るや否や、用人に酒を運ばせた。

「それで御所様は何と」

無邪気な九郎の顔が迫ってくる。

「ああ、今直ぐというわけにはいかないようじゃ」

「何ゆえ」

期待が大きかっただけに、九郎は足許（あしもと）をすくわれたような気がした。

「ま、御曹司（おんぞうし）、そう急（せ）きなさるな。今日、明日ということはなくとも、近いうち、必ずそういう機会がくる」

「まさか慰めごとを言っているのではないでしょうね」

九郎の目が少々怒っている。

「どうして慰めごとなど――わしじゃとて折角御曹司をお連れしたのじゃ。お館様に拝謁させずにおこうや」

「そうか」

どうやら九郎も落ち着いた。

そこへ酒肴が運ばれてきた。

「まず、酒と腹を満たしてからじゃ」

吉次も人心地がついて落ち着いた。そこで秀衡の筋書きの人物に話が及んだ。

「藤原範季という人が来年あたり陸奥守になられて平泉へこられるという。実はこ

の範季殿が、御曹司の兄君、と言っても母君は違うが範頼殿を密かに養育してこられたというのじゃ」

「範頼殿を――ということは、兄上は京におられたということですか」

範頼の母の出が遠江（とおとうみ）の蒲御厨（かばみくりや）だったことから、遠江にいるものと思っていたが、いつ頃京に移ったのであろう。

「ともかく、範季殿がこられてからの方が、御曹司との面謁が自然であろうと言われた」

言われてみればその通りだ。ともかくこの奥州に一人でも味方が出来れば有難い。

「そうですか、ならばそれまで待つことにします。そうすれば範頼殿のこともわかるでしょうから」

九郎の機嫌が直った。そしていきなりまだ見ぬ兄、範頼を身近に感じた。

それから数日して、吉次は九郎を平泉の屋敷へ移そうと、金成を後にした。

その平泉にきてみてびっくりした。想像以上の都である。まず左手、塔山を背景に、堂々とした二重の山門を真ん中に、左右延々と築地塀をめぐらした寺院は「毛越寺」である。嘉祥三年（八五〇）慈覚大師円仁（じかくだいしえんにん）の開山で、長治二年（一一〇五）藤

原二代基衡が勅願を奉じて七堂伽藍を建立、現の秀衡が更に社堂坊舎を造営して、堂塔四十、僧坊五百を数える規模とした。

「ここの伽藍配置や結構も見事じゃが、前面の大泉ケ池と石組みは、『浄土庭園』といわれ、京のどこよりも美しい。いずれご覧なさる時がこよう」

それから右手、こちらは秀衡が京の宇治の平等院鳳凰堂を模して造ったという「無量光院」で、「梵字ケ池」に大小二つの島を築き、小さな島に三棟の建物、西側の島には本堂が建てられている。

思わず感嘆の溜息が出る。更に頭をめぐらすと、右手奥に広々とした淵が広がり、こんもりとした森の中に、美しい甍の反りをきかした大寝殿造りが望見されてきた。

「秀衡様の伽羅御所じゃ」

「ああ、伽羅御所とはさぞ立派でしょうなあ」

香木で造営されているというのだから、館の中はさぞ芳香に満ちているだろう。

「猫間ケ淵」という低湿地が広々とつづく伽羅御所に連なるようにして「平泉館」が見えてきた。ここはいわば平泉の政庁である。

ともかく見るほどに、聞くほどに恐れ入るばかりの平泉である。

(都は京ばかりではなかった)

そんな印象である。無口になってしまった九郎の目に、今度はキラキラとした鱗光のような反射と、川風が匂ってきた。

「おお、川ではないか」

「北上川じゃ」

その手前にこんもりとした小高い森が見えてきた。

「登ってみよう」

馬を降りた九郎は、草を分けてすたすたと一人登っていく。足の速さといったら、もう木の陰に姿が隠れてしまった。

吉次も馬を繋ぐと、後からゆっくりと登りだした。木の葉の動く気配のないところをみると、とっくに先へ登っているようだ。と、樹林の奥から、

「おーい」

と声が響いてきた。つづいて、

「いい眺めですよー。早く登ってこられませー」

と感嘆の声がした。ようよう吉次が登ってくると、

「まるで絵のようです」

と九郎はやや興奮ぎみだ。

「わしもここへ登ったのは初めてじゃが、ほんとにいい眺望じゃ」

「この下の川が北上川ですね」
「その通り。そして北の方で岐(わか)れているのが衣川、それに向こうに見える美しい山が束稲山(たばしねやま)」
手をかざしながら、九郎は動こうとしない。
「そんなに気に入られたか」
「ああ、気に入りました。鞍馬山よりずっといい」
九郎の足と心を釘付けにしたこの小高い丘が、これから十五年後、兄頼朝の命令で泰衡によって攻められ、義経最期の場所になろうとは、神ならぬ身の知るよしもない二人であった。

(二)

それから五カ月がたった。
みちのくの秋は早く、紅葉が山を彩りはじめた。京の紅葉も美しいが、北国の紅葉は燃えるようだ。その紅葉を打つのが秋の驟雨(しゅうう)である。
ところでここ平泉の吉次屋敷にきてから、九郎の行動が摑めなくなってきた。とにかく一日中、一体どこへ行くのか終日馬を駆っていく。はじめのうちはそれでもちゃんと夕方には帰ってきたが、この頃では戻らぬ日がある。
(さては女子(おなご)でも出来たか)
男が野に放たれたからは、どこをどう走り廻ろうと案ずることはないが、どこで何をしているかが気になる。
と、ある日、一人の若者が吉次屋敷の表に立った。
用人は、昼寝から目覚めた吉次の部屋に取り次いできた。
毛皮の襟に、毛皮で作った袖無しを着込んだ吉次が面倒くさそうに戸口に出た。
するとこれは驚いた。
「ああ、太郎様ではござりませぬか」
びっくりしたというより慌てた。まさかこの人物が吉次を訪ねてこようとは――。
(どういう風の吹き廻しであろう)
それに供も連れない一人である。衣を改めると、男を丁重に客間の方へ導いた。
用人や小間使いの女たちがあたふたと廊下を走り、炉に火を起こして部屋を温め、それから酒肴の用意にかかった。
改めて挨拶の口上を述べると、吉次は男の来意を問うた。男の名は西木戸太郎、実は秀衡の長男である。

といっても嫡男ではない。嫡男は藤原基成の娘の産んだ泰衡で、年は二十歳。その兄だから二十五、六にはなっていよう。秀衡が最初に愛した女の息子である。本来なら秀衡の嫡男として遇されるはずが、女の出自が卑しいとされて、親娘ほども年齢の違う藤原基成の娘を正室とし、生まれた泰衡を嫡男とした。

妾となった太郎の母は、太郎と共に、伽羅御所から離れた西木戸に住んでいる。西木戸太郎は通称で、正しくは藤原国衡である。

濃い眉にとがった鼻梁は、秀衡の偏平な顔容とは異なっている。母の出自に蝦夷の血がまじっているからだろう。

こうしたことも、嫡子にはなり得なかった理由の一つでもある。しかし、一見していい男ぶりである。

「国衡様がお出でなさるとは、一体何事でござりましょう」

とにかく吉次は驚き、あやしんだ。

「うむ」

国衡は差し出された盃をとると、まずは吉次と共に盃をあげて干した。

「気になることがあってな」

「ほう、何でござりましょう」

「十五、六歳の若者のことじゃ」

「……」

「牛鞍というらしいが、どんな男じゃ」

「牛鞍？」

「本人はそう言っている」

吉次にはピンときた。牛鞍とは考えたものだ。源義経では穏やかではないとして、牛若の牛に、鞍馬の鞍を重ねたものであろうか。

「変わった名じゃ。ここは馬の国じゃというに、牛の鞍とはどういうものかと」

話の本意がわからぬ以上、余計なことは言えない。

「それがどうかいたしましたか？」

「実は驚いているのじゃ」

「ほう、何を驚かれます」

話の中味はこういうことだ。この夏頃から平泉に見かけぬ若者が単騎、町中を走り廻るようになった。若い男が馬で町中を走り抜けてもおかしくはないが、こうした地方では、どこの誰かということは一見してわかるものだ。

ところが毎日のように走り廻るこの若者、顔容からみてまず東国人でないことは明らかだ。

ここはそもそも蝦夷の国である。だから濃い毛髪や彫りの深い顔、それに大柄な

骨格の人間が多い。

そういう中で、唯一藤原一族だけが偏平な顔である。それはつまり、蝦夷ならぬ和人、もっといえば京の都人の顔である。それはこの北国で珍重され、尊ばれる由縁でもある。

初代藤原清衡の父、経清は前九年の役の終末、厨川で斬られたが、この経清は和人である。だから藤原三代がこの平泉の地で君臨するのには、格別の畏敬をもってみられた。

それとよく似た若者が、それもどこからやってきたかわからぬ男が、疾風（はやて）のように走り抜け、ときには女人にも見まがうような美しさに、平泉の話題となった。

「どこの御曹司？」

「都の匂いがするぞ」

「はて、どこに住もうておられる」

と男も女も気になる。

そこで国衡はじめ何人かが、若者の後を追いかけた。

栗駒山（くりこま）の麓まできたとき、四、五人にとり囲まれた九郎は緊張した。見かけぬ他所（よ）者と、喧嘩を売られるのではなかろうかと覚悟した。体格はいずれも九郎より大きい。

「吾主（わぬし）、どこからきた」

背の高い男が言った。

「西の方じゃ」

「その訛からみると、京辺りであろう」

そう言われては誤魔化すわけにはいかぬ。

「そうじゃ」

「何しにきた」

何しにきたと問われても返すことばがない。

「どういうことはない。平泉見物じゃ」

するともう一人の低い方が言った。

「それにしては吾主、よう馬で駆けるのう」

「ここでは思う存分駆けられる」

「では京で何をしていた」

「寺にいた」

「寺にいたということは坊主になるのじゃろ」

また背の高い男が言った。

「なりたくないからここへきたのじゃ」

途端、男たちは一斉に笑った。しかしその笑いには毒がない。
「それでここで何をする」
「わからぬ」
また笑った。今度の笑いには少々苦味がある。
これが出会いで、それから時々顔を合わすようになった。すると意外だったのは、顔に似合わぬ剣技や体技の持ち主だということだ。
自在に森の中を走り、あっという間に梢の辺りまで駆け上がる。それは恰も森の獣か鳥でさえある。
それにまだある。あるときは薄物を着て木の岐に掛け、渺々と笛を吹くのだ。その音の透き通る清らかさに、暫しうっとりと聞き惚れる。
牛鞍などという名が本名かどうかあやしいが、彼等にとって牛鞍は、決して見下げる相手ではなく、あやしい魅力を持った男だ。
その牛鞍が、どうも吉次の家の客人ではないかと突きとめ、若者たちにかわって国衡がやってきたというわけだ。
「どうじゃ、牛鞍殿がおられよう」
そう言われては嘘もつけない。
「確かに」

「どういう人じゃ」
しかし、その名を明かすわけにはいかぬ。それに、何ゆえここにきたかも明かすことはできない。
「国衡様、あの若の正体は、なんとしてもお明かしすることはできませぬ」
「やはり訳ありの様子じゃなあ」
「はい」
「京の寺にいたというにしては、あの剣さばきや見事な体技を、一体どこで身につけたのであろう。何から何まで不可思議なことばかりじゃ」
「……」
「それで牛鞍殿はいつまでここにおるのじゃ」
「暫くとどまることになりましょう」
「それにしても」
と国衡は箸をおろした。
「わしからみて、彼はどう見ても只者とは思えぬ。これだけわしが頼んでも明かして貰えぬか」
国衡は両手を膝に置いている。
「約束でござりまするから」

「約束と？　一体どなたと」
「本人にござりまするよ」
「ほう、牛鞍殿と。したが京には親御たちもおられように」
「いや、父親は死なれました」
「すると母御は？」
「他家に嫁かれました」
「すると天涯孤独か、いや、兄弟がいよう」
「いや、兄弟もなきに等しく、まさに天涯孤独にござります」
国衡の顔に、微妙な翳がさしてきた。北の国で権勢並びなき藤原秀衡の長男に生まれながら、基成に遠慮して西木戸に母といる国衡である。
「国衡様」
吉次は改まって言った。
「いろいろとお訊ねあるということは、あの若を必ずしも嫌っておられるわけではないと……」
「嫌うどころか、わしは牛鞍殿を面白い、いや、愛い男と思っている。それゆえわざわざ訪ねてきたのじゃ」
「それはまた、なんと有難くも嬉しいことを聞かせていただきましたことか。した

がそれはご本心にござりまするか」
吉次はそれでもまだ心の隅で疑っている。
「本心じゃ。わしも良き友を得たいと思っている。これはわしばかりではない。佐藤継信ら兄弟も、わしと同じことを言っている」
そこまで聞かされたからは、義経にとってまたとない機会である。
「それでは私奴の方から、国衡様にお願いがござります」
吉次は体を固くした。
「何かな？」
国衡は黒く長い睫毛をしばたたいた。
「申し上げます。牛鞍の正体につきましては、御所様に直にお訊ね下さりませ」
「なに、父上にじゃと？　父上が知っていると言うのじゃな」
意外なことを聞くものである。
「全ては御所様がご存知でござります。私奴は御所様の仰せに従い、京からお連れ申してきただけで――したが……」
と吉次は語尾を濁した。
「したが、どうした？」
「折角お連れ申しましたが、今もってご引見叶いませぬ。いずれとは仰せ下さって

はおりますが、できたら国衡様の方からお申し出で下さりませぬか」
「そうじゃったのか。それはまた何と気を揉ませたことよなあ」
「そのうち京から陸奥守がこられましたら、引見という風には仰せられましたが、国衡様が仰せ下さりましたらあるいは直ぐにも叶いましょうかと」
「そうか、わかったぞ。近いうちに必ず父上に申し上げよう」

(三)

「そうか」
秀衡は頷いた。奇しくもこの国衡の口から九郎義経のことを聞こうとは思わなかった。それにしても、この愛き息子が、既に義経と接触を持ち、剣技・体技と不思議な魅力にとりつかれているとは——。
(そんなに秀れた牛若、いや義経殿か)
国衡や、佐藤兄弟の心を動かしているというなら、余程の御曹司であろう。
それにしても既に若者たちと出会うていたとは、不可思議なめぐりあわせである。
一方、国衡は国衡で、父から打ち明けられた牛鞍の身の上に驚いた。

(源氏の頭梁。左馬頭義朝殿の御曹司とは)
奥州では見かけぬほどの品の良さ、時には美しくさえある。只者ではないと思ったがこれで謎はとけた。
「したが、鞍馬の寺におられた稚児が、いつ、どのようにして剣技を習われたのでござりましょう」
「詳しいことはわからぬ。近いうちに会うてみよう。そこでわかるであろう」
「それにしても父上はどうしてそこまで九郎殿を」
世は平家の時代である。にもかかわらず、平家と敵対した源氏の遺児に心を捉われるとは。
「そなたにどうしてそれだけの読みがないとは」
「ということは、奢る平家の行く末が長くはないとでも」
「そうじゃ。現に京では平家打倒の陰謀がなされているというではないか。平家を討てるのは源氏じゃ。いずれその時がこよう。そのためにも源氏のお子は必要じゃ。したがこれは目立ってはならぬ」
そのとき国衡の脳裏に、基成の老獪な顔が掠めた。
「したが何もそういうことのためだけではない。平泉のためにも源氏の男は必要じゃ」

「そうでござりまするなあ」
父の遠謀深慮がよくわかる。
「泰衡が娘であった方が……」
「ん、今、なんと？」
秀衡のそれは小さく呟くような声であった。
「いや、なんでもない」
秀衡は打ち消した。
「それではもし九郎殿が父上の鑑識に叶うようでしたら、どこかに屋敷をお与えになった方がよろしいのでは――でないと、只の風来坊になってしまいまする」
「そうじゃな」
「九郎殿に、平泉での使命をお与えになるべきでは」
「わしもそう思っている」
「私も弟たち（忠衡・隆衡）にそう言い聞かそうと思っております」
「頼むぞ」
「承知いたしました」
と退出していった国衡の後ろ姿を見送りながら、
（これが嫡男であったら）

と重い息を吐いた秀衡である。

国衡を通して、微行で引見という報せが吉次の所へ入ってきた。所は中尊寺本堂の客殿ということだ。

関山中尊寺も、嘉祥三年（八五〇）天台宗の高僧慈覚大師円仁によって開山されたもので、初代藤原清衡が二十一年かけて建立した寺である。前九年ノ役・後三年ノ役という長い戦乱で亡くなった人々の霊を弔い、仏国土を建設せんと志したものだ。

さて秀衡は、秋の中尊寺詣でにあわせ、そこでこっそりと義経を引見しようと考えた。伽羅御所では人目に立つ。

吉次は親代わりとなって、狩衣などの衣装一切を用意した。そして早めに中尊寺の本堂に入り、客殿の控えの間で待機した。

待つこと半時（約一時間）、牛車の音と行列の動きが伝わってきた。

「お出でになられました」

それから更に半時、ようやく控えの間の戸が開いて、侍者が義経と吉次を招いた。

客殿の上段から三間ほど下座で控えていると、上段の方で人の動く気配がしてやあり、

「義経殿であるか。近う近う」
と声があがった。顔を上げると、狩衣に立烏帽子姿の秀衡が、ゆったりと座している。
「源九郎義経にござります。このたびは鎮守府将軍に拝謁の栄を賜り、恐悦にござります」
と吉次から教えられた通りの口上を述べた。
「おお、よう参られた」
どちらかといえば小柄の清々しい若者である。平泉では見かけぬ男映えだ。
「鞍馬で苦労されたようじゃが、何年おられた」
「丸五年にござります」
「聞くところによると、剣技や体技が達者とか、一体誰に習われた？」
「元、源氏の郎党にござります」
「元、源氏の郎党が鞍馬で剣術などお教えする機会があったのか」
「はっ、稽古は夜陰にまぎれ、僧正ケ谷という所で」
「つまり人目を盗んでということじゃな」
「はい」
「苦労されたな」

そんなふうに言われると張りつめていた気が弱くなる。父の顔も知らず、再嫁した母の家で育ち、十一歳の頃鞍馬へ送られた。今も心の奥底で孤独感を蓄えている義経である。
「ところで平泉はどうじゃ」
秀衡は話題を変えた。
「京に劣らぬ都にござります」
「それでは平泉で生きなさるか」
「有難いおことばにござりまするが、私が平泉を目ざしたのは、平泉で生きるためではござりませぬ」
「ほう」
秀衡は内心驚いた。そこまではっきり言ってのける九郎である。
「では何ゆえ平泉に」
「秀衡様にお会いするため」
「わしに……」
「はい。京からここまでは遠うございました」
九郎の声が震えた。そんな弱気になったのは、穏やかな秀衡に父に似たものを感じたからであろうか。

それは秀衡も同じであった。父を亡い、母とも別れ、天涯孤独の身が京から逃げてきた。まさに窮鳥、懐に入るである。

と、九郎は決したように顔をあげた。

「私を暫く匿って下さりませぬか」

「匿うとな？　匿う必要はない」

「と仰せられますと？」

「ここは奥州じゃ。平氏の及ぶ所ではない。遠慮なく過ごされよ。住まいも用意しよう」

「有難うございます。したが私はいつまでもここにご厄介になるわけにはまいりませぬ」

「ということは、どういうことかな？」

秀衡は目を細めるようにして九郎を見た。

「私にはやらねばならぬことがあります」

九郎はキッと眼尻をあげた。

「何をおやりなさる」

「父や兄の仇を討たねばなりませぬ」

「――――」

「おわかり下されましょうか」

「わからいでか」

「そのときがくるまで、平泉に置いて下さりませ」

（この御曹司はやっぱりそれを……）

血で血を洗う怨念の戦さは、いつの世までも限りがない。

わが初代清衡の父は源頼義父子に殺された。そして母は仇敵清原に拉致され妾となった。その清原を討ってこの奥州に藤原王国を建てた清衡である。復讐という情熱と意志の然らしめた結果である。

この源氏の御曹司も、同じことを言うではないか。怨念は怨念を呼び、復讐の戦さは果てしなくくり返す。それを収めるべく、平泉は三代をかけて仏殿、仏塔を建立し、平和楽土を実現してきた。

そこへ、戦さの種を孕んだ若者が、秀衡を頼ってやってきた。しかしこの種は、平泉や奥州を冒す胞子ではない。父の仇、平家を討たんとする胞子である。いや、それのみか、藤原王国を守る強力な軍備の胞子となるやもしれぬではないか。

「ところで九郎殿は元服をなされたようじゃが、いつ、どこで」

秀衡は上段からのぞくようにした。

「はっ。吉次殿の荷駄の列に混じって、こちらにくる途中でござります」

「はて、途中とな？」
「美濃の国、青墓という所に、父と兄の墓があると聞いておりました。よって山中宿で投宿した折、一人こっそりと脱け出し、青墓まで行き、あちこちと探し廻り、叢の中で見つけた墓の前で一人髪を切りましてございます」
「そして名乗りもか」
「はい。自分一人で考えた名乗りにございます」
（源家の御曹司が何たる哀れ）
それに比べて、平泉の息子たちは、いずれも平泉館で華やかな元服の式を挙げた。
世が世なら、この若者もそうであった。それが継父の許から鞍馬に送られ、子としての幸せから遠ざけられた。
（養父になってやらねば）
惻隠の情は、父性の情に変わっていた。
（愛しい和子よ）
「安心召され。平泉で心ゆくまで武技と学に精出されよ」
そう言うと秀衡は、侍者の一人に目配せした。侍者はやがて錦の鞘袋に入った一振りの太刀を捧げてきた。

それを取ると秀衡は、上段の座から少し躙るようにして九郎を見つめながら言った。
「源九郎義経殿、余が御曹司のために用意した太刀じゃ。受け取られよ」
秀衡は言い終わるや否や、ゆっくりと錦の鞘袋の紐を解いた。するとやおら現われた太刀は、目も眩ゆい黄金の太刀ではないか。
（おお！）
九郎は一瞬呆然とし、それから恍然と見とれた。
「受け取られよ。余の贈りものじゃ」
「はっ」
上段の縁まで膝行した九郎は、両腕を差し延べた。その両腕にずっしりと重く、眩ゆい黄金の太刀が渡された。
（夢のようじゃ）
この感動を、九郎は生涯忘れることはなかった。黄金の太刀は、そのまま秀衡の愛の証であった。
「忝うござりまする」
声が震え、滂沱と落ちる涙を拭いもやらぬ九郎を、慈眼をもって見入る秀衡であった。

第五章　五条大橋

(一)

「おーい、九郎殿――こっちじゃ、こっちじゃ」

はしゃいでいるのは三郎忠衡らである。所は中尊寺の西北、泉ケ城の下を流れる衣川。その衣川で、九郎義経はこの夏の初めから泳ぎの練習を始めた。

とにかく鞍馬の山で剣技・体技はやってきても、水には全く覚えのない九郎である。

「武将は馬の上だけでは駄目じゃ。いざとなったら水の中も泳げねば」

と言われ、忠衡の側には佐藤継信（三郎兵衛尉）佐藤忠信（四郎兵衛尉）らが混じっている。共に二十代の若者である。

秀衡が九郎に与えた住まいは、三男忠衡の住む泉ケ城の一角である。そんな関係から、忠衡と接触する機会が多くなった。

忠衡は、嫡兄泰衡の同母弟だが、平泉館や伽羅御所から離れているため、伸び伸びとした所があり、九郎にも好意的だ。

はじめの頃は水に浮かぶ術すらなく、そのまま水中に沈んでいくのを、手取り足取りしてくれたのは継信・忠信兄弟である。しかし、

「こっちじゃ、こっちじゃ」

と面白がるのは忠衡で、そう言う彼が果たして泳げるかどうかわからない。なぜなら裸にすらならないからだ。つまりは九郎に泳ぎを奨めたものの、一緒に泳ごうとはしない。

そうして浮きの術や、泳ぎの術を覚えるとそこは九郎、すいすいと向こう岸に泳いで上がり、

「おーい。三郎殿。こっちじゃ、こっちじゃ」

と手を叩いて忠衡を招く。その忠衡に代わって抜き手を切るのは、継信・忠信である。

黒髪から水を垂らし、裸身に水滴を浮かせている九郎を、継信兄弟は眩しそうに見る。

「九郎殿は何事にも熱心でござるな」

「そりゃそうじゃ。一角の武将たらんと思ったら、そんなことぐらいは身につけねばなあ」

何しろ、いつかは京へ上り、平家を倒して父や兄の仇を討ちたいと考えている九郎である。

「北上川はどうかな」

「いやあ、本流はおやめなされ。川の流れが速うござる。昔から北上川を対岸に泳ぎ切ったという話は聞いたことがない」

そう言われるとやってみたいのが九郎である。そしてとうとうある日、衣川へ馬を乗り入れ、北上川の流れに入った。

すると馬は泳ぐどころか、足掻きながらずるずると流されていく。びっくりして手綱を取り、あれこれと扱いてみるが、馬もろとも水の流れに引き込まれていく。手をバタつかせ、岸に向かって、

「おーい。助けてくれえー。助けてくれえー」

と叫ぶや、川を往来する舟が早速手鉤を出してくれた。しかし、九郎は助けられても、流されていく馬を引き止めることはできない。

「おーい。馬が流されていくぞー」

どうやら舟の縁につかまり、引きあげてくれたものの、馬は遠ざかっていく。

「どこの若か知らんが、こんな大川で泳ぐ者などおりゃせん」

と船頭から大小言を喰った。

それから暫くして、馬は平泉館の近くの舟渡（舟の発着所）で、何艘かの舟で囲むようにして救いあげた。

「じゃから言わんことではない」

継信兄弟から大目玉の小言を喰った。

それから更に一年たった。ということはこれで三年目になる。この頃は忠衡を駆り出して甲冑に身を固め、吉次の郎党三百騎をも出させて、金鶏山や桜山に陣を布き、時には昼夜もとわぬ合戦をやってのけるという戦さ稽古だ。

「おーっ」

「わあーっ」

と鬨をつくる声に、平泉の人々ははじめ、さては戦さか——とびっくりした。それが泉ケ城の若殿輩の合戦稽古だと知り、

「戦さの備えとはのう。平和なときでも戦さのことは忘れぬことじゃ」

と合点したが、本当のところは、都から下ってきたという若殿のせいだと気がついている。

「それにお前、金鶏山の懸崖を逆落としに馬を落とし、十頭も死んだということじゃ」

「ほう――そりゃ無茶じゃ。そんなことをした侍は誰もおらんわい。大体、その若殿というのは気が荒いんじゃ」

「そうじゃ、普通じゃないのう。相当の悪かもしれんぞ」

そんな噂は当然、秀衡の耳にも入ってくる。

「どうなさる御所様」

と言うのは藤原基成である。どうなさる――というのは、もういい加減に京へ追い返してはということだ。

「よいではないか」

秀衡の答えは涼しいものだ。自分の前で、美濃青墓のことを語ってくれたとき、危うく涙を催しそうになった秀衡だ。

そんな若者だからこそ、復讐の一念に燃えて無謀な冒険もやれるのだ。秀衡の息子たちに拝ませてやりたいくらいである。

「都に聞こえたら何となされまする」

「ハハハ……平家がこのみちのくに攻めてくるとでも思われるのか。平家の兵に、そんな力はないであろう」

「何をもって？」

「贅を覚えた者にはそんな遠征などできるはずがない。それに九郎はまだ若造じゃ」

秀衡は即座に否定した。

そこで基成は考えた。大体、九郎がそんなに荒い戦さ稽古をやるのは、女がいないからだ。そう思った基成は、心利いた側近に平泉での美女、といっても藤原一族や重臣たちの娘ではなく、遊女辺りを見つけて近づけることを指示した。

九郎の部屋に女が侍るのは何も今夜だけではない。これまでに十数人はいる。しかし、なぜか女と同衾した形跡がない。

短い夏が逝き、薄の穂が靡くようになったその日の夕、いつもながら女が食膳を運んできた。

見るといつもの女と違う。着物も格別美しいが、艶やかな女の色香を発散させている。年は義経とほぼ似たものであろうか。

「小笹にござります」

と名乗ってから、盃を渡し、ゆっくりと注ぎながら時々上目使いに九郎を見る。男に馴れた仕草である。それからは食事の間も、中尊寺や毛越寺の話をしながら気

を引こうとする。そんな女の下心は察しがついている。そこで、
「もう退がってよい」
と言うと途端、女は顔を伏せ、袂で覆った。
「どうした、何が悲しい」
すると小笹はいきなり九郎の膝にとりつき、
「今宵、殿との共寝を命ぜられております」
と身を揉む。
「命ぜられておるとは一体誰からじゃ」
小笹は一寸考えた風であったが、囁くようにして言った。
「基成様から」
「そうか。したがわしは誓うところあってそなたのみではなく、一切女人は近づけぬことにしている。基成様にそう伝えよ」
そう言い捨てると九郎は座を立ってしまった。後には女の啜り泣きが残った。
九郎の禁欲には幾つか訳がある。一番の理由は、奥州で子をつくってはならないという自戒だ。
自分は奥州人になるわけではない。ここは時機待ちの所である。そこで女や子ができては足手まといであり、悪くしたら動けなくなる虞れがある。ゆえに、たとえ

藤原一族の女であっても情を交わすことはできない。
（それに――）
九郎の女性観である。一条坊門にいた牛若の頃から、なぜか年上の女人から声をかけられた。
「まあ、清げな童子じゃこと」
その呼びかけが、何を意味しているかはわからなかったが、孤独な心を癒してくれた。
また鞍馬でも、僧たちの隠微な世界をのぞくこともあったし、町中で女に声をかけられたことも一度や二度ではない。
しかし、九郎の脳裏には美しい女人像が定着している。それは母、常盤である。
幼時から女人といえば母であった。母は京で見る女の誰よりも美しかった。そして深い慈愛を受けた。その慈愛を断ち切らされた。ゆえに、あの母を超えるほどの女でなければ――という思いがある。
（夢かもしれぬ）
しかし、この潔癖が、平泉で信頼を得るようになった。

(二)

四年ぶりの京である。懐かしさと怨念が交錯する。

今度の上洛は、九郎の方から秀衡に頼みこんで実現した。もっとも吉次の隊商は毎年出ているが、今度は海路だと聞いてその気になった。

(海を見たい。そして海を渡ってみたい)

二十歳の好奇心は旺盛である。その申し出でを秀衡は、

「早から無理をして京へなぞ行かずとも」

と案じてくれた。それを許してくれたのは、

「海を――」

と言ったことばであった。

四年目の春、九郎は塩釜から船に乗った。船は藤原氏の商船である。

初めて見る渺々たる海。大船も海へ出れば木の葉の如きもので、船を運ぶのは滔々たる海流の速さである。

後年彼が、海流を利用して勝利に導いた「壇ノ浦」の戦いには、あるいはこのときの経験が脳裏に刻まれていたかもしれない。

ともかく船は大物ケ浦（尼ケ崎港）に入り、そこから荷駄の陸送をして京の吉次屋敷の蔵に収まる。それからいよいよ吉次お得意の外交と商売が始まる。

「気をつけて下されよ。若が源氏の忘形見と知れたら若のみか、われらにも迷惑がかかる。御所様のご厚意を無にされるようなことがあってはならぬ」

と言われても、京へきたからは無為に過ごすわけにはいかない。なんといっても平家の現況と、反平家の動きを探らなければならない。

とはいっても京に知り人はいない。鎌田正親や海尊を訪ねるといっても、鞍馬に行くわけにはいかないだろう。

とにかく動くのは日暮れどきである。それまで日中は、吉次の郎党や雑人にまじって、馬の手入れや、荷の整理などを手伝う。そして辺りに夕靄が立ちこめるようになると、こっそりと脱け出して町中を歩く。

六波羅とは、東山山麓、鴨川の東、五条から七条へかけて、平家の政庁と邸宅が連なる地域である。さすがに今を時めく権勢一門だけに、檜皮葺きの屋根が延々と連なり、築地がそれに沿って居宅の占有を誇示している。しかし、平泉と違うのは、明るさがないことだ。

管弦や舞踊、歌の道に明け暮れる藤原貴族に比肩しながらも、そこは武家、公卿屋敷とは趣きが違う。その六波羅界隈を何遍歩いても何も得られない。要は人から

訊き出さねばならない。となると、茶屋や呑み屋である。

川縁の暖簾を分けて中へ入ると、飯盛り女がきびきびと動き、男たちが臭い息を吐きながら猪口を傾けている。店の中を見廻して威勢よく饒舌っている男の側に腰をおろした。男たちは九郎をチラと眺めただけで、話に夢中だ。

「おい。法住寺殿の今様（歌）の師匠は、なんと美濃の青墓からやってきた女の傀儡じゃそうな」

京のまん中で、美濃の青墓と聞いて驚いた。あんな所の田舎者が、法住寺殿（後白河法皇）の歌舞の師匠とは……。

「そりゃあお前、白拍子より、傀儡の方がうまいというからなあ」

その中の女が、今や法皇の前で演ずるというのだから大したことだ。

「それにお前、相国（清盛）に寵愛された祇王・祇女にかわって仏（御前）が現われたものの、この仏も秋風と一緒にお払い箱じゃったそうな」

「ほう、秋にはまだ早いがの」

「それがなんと、祇王・祇女の隠棲した嵯峨へ仏も仲間入りしたというのじゃから」

「哀れな話じゃなあ。大体相国の女癖は回転が早いからのう」

男たちはチビリチビリと酒を舐めるようにしながらつづける。すると横合いから

四十がらみの男が、

「女子の哀れはそんなところじゃが、男の哀れはもっと凄まじいぞ」

と口を入れた。

「おう、誰のことじゃ」

「例のほれ、『鹿ケ谷』の事よ。わしはな、西光法師が口を引き裂かれて嬲り殺され、五条の朱雀大路で晒されとったのを見たが、ありゃ鬼というより化け物じゃった。あんな酷い仕置きはするもんやない。わしは今でもあの形相が忘れられんわい」

その一言に皆は一瞬シンとなった。

「西光法師ばかりでないぞ。（藤原）成親卿の一族は官を解かれ、俊寛僧都と平康頼殿は鬼界ケ島とやらへ流されたということじゃ」

「そうじゃ、わしもそんなことを聞いたわな。したがその鬼界ケ島とはどの辺りじゃ」

「ようは知らんが、薩摩より南の方じゃと聞いた」

「鹿ケ谷事件」とは、東山の山麓にある俊寛僧都の山荘へ、後白河法皇が御幸された。そのとき侍ったのが、大納言藤原成親、平判官康頼に西光法師らで、法皇の退出された後、彼等は額を寄せて平家討伐の密議を語り合った。

この陰謀を、成親は源行綱に打ち明け、一方の大将としての参加を求めた。行綱は事の重大さにかんがみ、思案苦慮した挙句、逆にこれを西八条の平家に密告してしまった。

それと知った清盛は、ここぞとばかりに、鹿ケ谷山荘に集まった面々と、関係者五人を西八条に引っ張った。

そこで厳しい問責の果てに、西光法師を虐殺。ほか、流罪死罪となまなましい一年前の事件である。

「それでおんしらは平家をどう思うているのじゃ」

盗み聞いていたつもりの九郎は、ついに口を挟んだ。

「おお、若いの。今の平家を恐れる者はおっても、よしと思う者はおらんじゃろ。そう言うわぬしはどうじゃ」

と逆に訊き返された。

「わしは田舎者じゃからようわからん。ひと月ばかり前に奥州からやってきたばかりじゃ」

「ほう、奥州のう。そんな遠い所から何しにきた?」

「京見物じゃ」

「京見物とは呑気なもんじゃな。したがわぬし、京訛りではないか」

「子どもの頃、ここにおったからじゃろ。そんなことより平家はどうなる?」

三十半ばの男たちは、いずれも引きつめた束髪に半袴の京人である。日暮れどきの茶屋で一杯というところだ。

「まあ、若いの。お天道様はいつまでも高うはないからな、いずれ西に傾くものよ。ということは、平家の世もそういつまでも続くものではないということじゃ。じゃから現に、討伐の企みが起こる。たとえ厳罰をもってしてもじゃ。またぞろ次の企みが起こらんとは限らぬ。それは平家の政に徳がないからじゃ。一門の栄耀栄華のみ図るような権勢はいずれ倒れる。わしはそう思うちょる」

すると先の四十男がまた口を利いた。

「平家が倒れるっちゅうことは、源氏が起こるっちゅうことやぞ」

「まあ、大かい声では言えんがの」

もう一人も同調する。

「したが京にいる源氏はありゃ腰抜けじゃ」

先の男は吐き捨てるように言った。

「そんな源氏が京にいるのか」

九郎はびっくりした。

「おお、おるとも、おるとも。でかい面して恥知らずの」

「恥知らずの？」
「知らぬか。源三位頼政じゃ」
その名なら知っている。源氏で三位にまでなった男は頼政だけである。
「何が恥知らずなのじゃ」
男は侮蔑を顔に浮かべた。
「年はもう七十にもなっとるがの、『平治ノ乱』で、奴はどう動いた。初めはよ、頭の殿（源義朝）に付いていたが、源氏が危いとみるや、身を翻して清盛に付いた。よって京では唯一人の源氏の生き残りじゃ。そこで清盛様から三位を貰うたのよ。生き方上手のお人なんじゃ。したがわしらはそんな奴を武家とは思わん。
ま、もう年じゃから、今更悪態はつかんがの、京の人は皆、恥知らずと言うとる」
「そうじゃのう」
周りの男たちも同時に頷いた。
（そんな人とは知らなかった。そんな源氏もいるのだ）
九郎は溜息をついて男から目を離した。
「がっかりしたか、若いの」
「ああ、がっかりした。そんな奴がいるから源氏は敗けた」

「ほう、なかなか言うではないか若いの。もしかしたら源氏贔屓か？」
「いや、どちらでもない。わしは奥州の田舎者じゃから」
そう言って座を立った。
（それにしても源三位頼政は何たる奴！）
平泉でも聞いた名である。だから今度の上洛で、できたらこっそり頼政を訪ねてみたいとさえ思った。しかし、そんな人物だと知ったからは、冗談にでも訪ねることはない。路々、深い溜息が出た。
（父上はそうした裏切り者のために敗れた）
のみか、尾張の内海でもつまりは郎党の裏切りで殺された。そんなことを思いながら行く。
あたりはとっぷりと暮れて、文目もわかぬ薄暗さである。東山の山稜は紫色の闇の中である。気も重いが足も重い。
（だれがわしに味方してくれようか）
平泉の秀衡や吉次、それから国衡や忠衡に佐藤兄弟の顔が浮かんだ。しかし、まだ兄範頼の顔は知らない。
とはいっても彼等が平家打倒の味方になってくれるとは限らない。
（やっぱりわしは一人か――）

鞍馬にいた頃の孤愁が、再び胸のうちに広がってきた。

(三)

秋風が吹いてきた。そろそろ平泉へ帰る日も近づいている。

その日、九郎は白水干に紫の半袴、烏帽子姿で清水坂を下ってきた。秋の日暮れは早く、東山の稜線もぼやけてきた。

この辺りをこれで何遍歩いたことか。六波羅の地域だからということもあるが、もしかしたら、正親に逢えるかもしれぬという微かな期待もあるからだ。

しかし、何遍歩いてみても、反平家の具体的な動きが耳に入るわけではない。そこで今夕は人目につくようにと、生絹の水干に、秀衡から貰った黄金の太刀を佩いてみた。それに笛も差した。

いつもながらの清水坂を下りてくると六波羅である。今夕のような恰好はこの辺りでは珍しくはない。夕靄の彼方から鴨川のせせらぐ音が聞こえてきた。ふと平泉の衣川が重なった。

すると国衡や忠衡の顔が浮かび懐かしくなった。思わず手が笛に触れた。笛を取ると、河原か橋の上で吹いてみたくなった。

京ではここ五条の橋の上で、たまさか笛を吹く人に出会う。九郎の笛は母常盤から教わったものだ。母が褒めてくれたのは、笛の素質だけだった。これという師匠に付いたわけではないから、母の教えてくれた曲のみだ。それでも平泉ではなかなかうまいと言ってくれた。

九郎の唯一の手すさびであり、母を懐う調べである。それを今、手にして、九郎は橋の上から山の彼方に向けて吹いた。

その音に映るのは、母の面影であり平泉の衣川である。われながら陶然としていると、背後に人の気配があった。さっと笛をおろして振り返った。するとそこに身の丈六尺もあろうかと思われる大男が立っていた。

一見して僧とわかった。しかし、顔を白麻の五条袈裟で包み、素絹の下には黒糸縅の腹巻を着け、四尺あまりの太刀を佩き、大薙刀を持っている。

「何か？」

九郎は訝しく思って尋ねた。

「笛もいいが、その黄金の太刀に魅入られたぞ」

（なるほど、そういうことか）

おそらく因縁をつけて、この太刀を狙ってきたものだろう。

「どこで手に入れた」

いきなり訊かれた。
「遠い北の都じゃ」
「遠い北の都？」
荒法師は首を傾げた。遠い北の都という意がわからないこともさることながら、この自分に対し、些かも気おくれしない度胸である。
「わからぬか」
（小癪な！）
荒法師の目が光った。
「奥州の平泉じゃ」
「ほう、奥州とな」
そう言えば奥州は黄金の故郷である。
「それで若いの、奥州からか」
「そうじゃ」
「何しにきた？」
「京見物じゃ」
「なら、いつでもそんな太刀を手にできるであろう」
「いや、これは奥州の王から頂戴した。よって命の次に大事なものじゃ」

「奥州の王とな？　一体誰じゃ」
「藤原殿じゃ」
「藤原殿じゃと？　そんな北に藤原がいるのか」
「おお、歴とした藤原殿じゃ」
「ともかくその太刀、わしに譲ってくれぬか」
「命の次に大事なものを、どうして人に譲れよう。欲しくば力ずくで奪ってみよ」
この一言が荒法師を怒らせた。
「わしを誰じゃと思っとる！」
「知らぬ。わしは奥州の人間じゃ」
「女子のような顔をして、そんな偉そうなことを言うてよいのか。後で泣きを見ても知らんぞ」
荒法師はいきなり薙刀を右手に持ちかえると、八尺の円を描いて唸らせ、九郎の胴を薙ごうとした。ところが薙刀は空を切っただけで、女身のような若者の姿がない。
（はて？）
法師は思わず身の周りを見廻した。すると若者は涼しい顔で鴨川の夕霧を見ている。

（小癪な）

法師の沽券に触れた。たかが童と思って高をくくったが、これでは本気でやらねばならぬ。

「小僧、わしを何と心得る」

法師は真顔になった。そして薙刀を抛り出すと、刃渡り四尺の太刀を抜いて大上段に振りかざしてみせた。

振りかざしながら、この若者が地べたにひれ伏して命乞いをする様を描いた。われながらいい年をしてやり過ぎじゃ、とも思いながら。

ところがである。振りかぶった太刀は、またしても空を泳いだだけで、目の前にいたはずの若者の姿がない。

（これはどうした！）

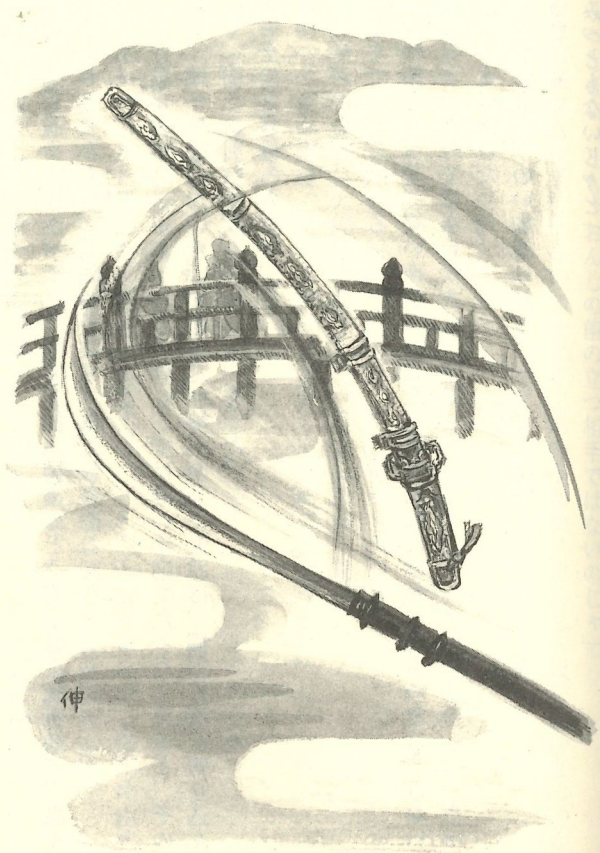
法師は慌てた。と、三間ほど離れた五条の欄干の擬宝珠に身をもたせてこちらを見ている。なぜかその顔がこちらを嘲笑っているようにさえ見える。

「糞！　ぬしは人か鳥か――」

法師は吼えた。

「見た通りじゃ」

完全に舐められたと思った。



「よおし」
法師は遂に腹をたてた。そして太刀を持ち換えると、高下駄を脱ぎ捨て、高々と太刀を振り廻しながら、九郎めがけて本気で振りおろした。
「ヤアーッ」
太刀に強かな手応えがあった。それにしては硬い手応えだったと見ると、その手応えは、欄干に喰いついた刃であった。勢い余った太刀は、欄干に深く切り込んだだけで、引くに引けず立ち往生してしまった。
と、そのとき後ろの方で、
「ハハハハ……」
と笑う声がした。
(どこまでわしを舐める気か)
法師は顔を怒らせて笑い声の方を見た。橋の上にはほかに誰もいるはずはない。
「なんじゃ。海尊ではないか」
笑いの主は海尊だった。
「おいおい弁慶、いい加減にしろ。みっともないぞ」
海尊は窘めた。
「みっともないじゃと」

「みっともないとも。おんしの歯の立つ相手ではないのじゃ」
「なに、わしの相手ではないじゃと――あの小僧が。おんし、奴を知っとるのか」
「おお、知らいでか」
「何者じゃ」
「ともかく今日のところは大人しく平伏するんじゃな。大体喧嘩を吹っかけたのはおんしの方からであろう。わしはおんしらを見つけてびっくりしたわ」
「……」
そう言うと海尊は九郎を手招きした。見覚えのある男だ。
「ああ、これは海尊、懐かしや。まさかこんな所で会おうとは」
海尊とは常陸坊のことである。
「なに、おんし此奴を知っとるのか」
「ああ、かつてのわしの主の御曹司じゃ」
「おんしのかつての主とは――もしやして」
「そうじゃ、こなた様は左馬頭殿の御曹司じゃ。わしと御曹司とは、鞍馬の山で出会うた。そこでもう一人、鎌田正親と一緒に御曹司に剣と体技を伝授した。おんしのような腕力だけでは、御曹司には敵わぬ。今日はしかと謝られよ」
親友の海尊からそう言われては返すことばもない。弁慶は素直に橋の上に両手を

ついて、九郎の足元に頭を垂れた。

このような出会いではあったが、不思議なもので、この弁慶が、九郎の股肱の臣として、平泉での最期まで付き従う運命を荷負うとは、このとき二人は知るよしもない。

「して弁慶とやら、おぬしはどこの法師じゃ」

素直になった弁慶は、己が出自と来歴を次のように語った。

父は紀州熊野の別当職、弁正の子で幼名を鬼若。幼時、比叡山延暦寺に入ったが、十八歳ごろ、あまりの乱暴に追放され、叡山の西麓の僧坊に暫くとどまり、武蔵坊弁慶と称した。そして同じ頃三井寺（園城寺）の僧であった常陸坊海尊と知友となった。

ところが西ノ坊を飛び出した弁慶は、その後、播磨の書写山（円教寺）に入った。しかし、ここでも所行はおさまらず、遂に喧嘩の果て、堂に火を付け、丸焼けに焼いて逐電した。そして暫く大和に身を潜めたが、またぞろ京に現われ、叡山や鞍馬に足を伸ばしているという。

「それだけの壮身でありながら惜しいことじゃ。わしなど小身ながら志はあるぞ」

こんな若造から、そんなことを聞かされようとは思わなかった。

そういえばこれまで、ただ体力に任せて大言壮語と暴力を振るっていただけだった。

（見ればこの小さな体で、わしを凌ぐ体技を身につけている。恐らく真剣で向かったら、わしの負けかもしれぬ。三十半ばにして初めて思い知らされた）

「お名を。お名を聞かせて下され」

弁慶は海尊に訊ねた。すると海尊は九郎に向いて言った。

「いかがいたしましょう」

「そちに任せる。それより鎌田正親殿はお達者か」

「はい。若の旗上げを心待ちにいたしております」

「旗上げじゃと？」

弁慶はびっくりして眼尻をあげた。

「そうじゃ。委細は海尊殿から聞いてくれ。そのときは弁慶殿、わしの力になってくれぬか。おぬしの強力は、わしにとって千人力じゃ。そのときこそ、わしが黄金の太刀を作っておぬしに進ぜよう」

それを聞いて弁慶の、心の中で何かが動いた。それが何であったかを明かすのは、これから数年後である。

第六章　伊　豆

(一)

ここは伊豆の蛭ケ小島。

伊豆の北部、いわば半島のくびれた付け根の辺りにあたる。

蛭ケ小島とはいってもいわゆる島ではなく、狩野川流域の低湿地で、蛭が多いことからその名がおこった。

森や林、一面に広がる葭原の中の小高い丘、そこの雑木林に囲まれた中の一つの小さな屋敷。実は配所である。

配所の住人は源頼朝。父は「平治ノ乱」で敗れた義朝であり、九郎義経の異母兄である。

平治ノ乱で敗れ、父と共に逃走中、美濃で捕えられ、一命が危うくなったところを、清盛の母、池ノ禅尼に救われ、この地に流されてきた。以来二十年が経ち、頼朝はもう三十四歳になっている。

十四歳で流されてきたとき、彼の生活の面倒をみたのは、武蔵比企の比企掃部允の妻で、頼朝の乳母だった。彼女はこっそりと米を送り、身の回りの世話をする中年の女を付けた。

監視は伊豆の大地主、伊東祐親と北条時政である。祐親は最初源氏に与していたが、その後平家に鞍替えした。

十四歳の少年の風貌は、武家の子より、公達を思わせるものがあり、挙措振る舞いもおとなしい。性来がおとなしく真面目なのか、外で木刀を振ることも、荒々しく馬をこなすこともなく、終日読経や読書に専念する。

「心配あるまい」

ということで十年が経った。そうなると、

「女を――」

祐親はそれを考えた。本来なら源氏嫡流の頼朝に、わが方の娘をと考えたいところだが、平家の世に、下手なことはできない。

それに様子を見ると、比企の方で、いろいろと面倒をみているようだ。となればこれ以上何の心配もないわけだ。そして更に十年が過ぎた。

その間、平家の隆盛はすさまじく、清盛は人臣位を極めて相国に。更に娘徳子を入内させて親王を産げるという勢いだ。

それに比して四散した源氏が、どこでどう逼塞し、息をひそめているのかわからない。

ところが二、三年前から妙な噂が入ってきた。「鹿ケ谷の陰謀」などという反平家の動きや後白河法皇の幽閉事件である。そんな情報を頼朝に京から伝えてくるのは一条能保である。能保の父は丹波守通重で、能保の妻は頼朝の妹である。そんな関係から、頼朝の義弟として心配りをしてくれるようだ。

法皇の幽閉事件とは、鹿ケ谷の陰謀に、法皇が噛んでいたとして、反平家の黒幕とみなされた。

そこで清盛は一大粛清を行った。即ち、関白藤原基房をはじめとして、四十一人もの高官の追放につづいて、法皇を、法住寺殿から鳥羽の離宮に幽閉した。

そうした世の動きや移ろいが、この配所にもひしひしと感じられる。だからといって孤立無援の頼朝が動けるものではない。

そんなとき弟の存在を思い出した。遠江国蒲御厨（静岡県浜松市）にいることから、蒲冠者と呼ばれているすぐ下の異母弟である。

それから常盤の産んだ三人の弟たち。即ち「平治ノ乱」の当時、今若丸と言った

弟は、醍醐寺で出家、阿野全成と言う。数えて二十七歳になっている。

次の弟乙若丸は叡山に。その後、八条宮円恵法親王の坊官となったと聞いている。いずれも出家の身であれば、弓矢の力にはならない。

残る一人は牛若丸。聞くところによると鞍馬寺から出奔し、奥州平泉の藤原秀衡の許に身を寄せているという。出奔したということは、僧を嫌ったということだ。

（したがどうして平泉なのじゃ。それに一体誰が手引きをした）

十二歳年下ということは、今、二十二歳になっているはずだ。

（藤原秀衡か）

出奔するとなれば、どうして東国の源氏を頼らぬ。清和源氏は四代目から近畿と東国に分かれ、頼朝の家祖頼信は東国に勢力を扶植した。ゆえに、「平治ノ乱」で敗れたとはいえ、東国は源氏の地盤である。それをどうして奥州へなぞ――。

鞍馬に育った稚児には、源氏の出自や郎党の勢力地図など教える者もなかったのか。まして奥州なぞ思案の外だ。それが平泉だったということは、誰かが手引きをしたということだ。

（一体誰か？）

それに平泉まで逃げれば、平家の追っ手もこないだろう。そういうことより、奥州は宝の国だ。無尽蔵の黄金と名馬の産地という。その富を背景に藤原王国は栄

え、京の平家に次ぐ財力と兵力を保持している。
（牛若はそこでどうしようというのだ）
一番気になる弟である。

蛭ケ小島の流人が貴公子で、なかなかの美男だということが、伊東の庄や北条の庄で語られ、夙に噂になってきた。
そんなことから、どこの誰やらが忍んで行ったとか、薄暗がりに木立の中を歩く男女の影を見たなどという噂が流れるようになった。
「それはどこの女子じゃ」
「さあ、そんなことの出来る女子は、伊東様か、北条様の姫御前ではないかの」
「うーむ。それでは親父様が許すまい」
「それでも人の恋路は分別の外というではないか」
「そりゃそうじゃが、いくら男ぶりがいいと言うても、源家の流人じゃ。平家の天下に、源氏の男に近づく女子がいようとは……ま、伊東や北条の姫御前でないことは確かじゃろ」
というのは、頼朝の監視役が、伊東氏と北条氏だからだ。
とはいってもこちらは生身の青年、下半身の疼きをもてあましている。そういうことはいってもこちらは生身の青年、下半身の疼きをもてあましている。そういう

頼朝を手引きする者がいて、これで三度夜這いをした。すると女が身籠ったという。そうなると女の名と身元を知らねばならぬ。それを聞いてびっくりした。
「伊東祐親殿の姫じゃと！」
（これでは斬られるやもしれぬ）
頼朝はそれから夜な夜な、屋敷の外の足音に耳をそばだてた。しかし、二カ月の余がたっても、荒い足音もなければ、詰責の使臣がくることもない。
しかし、今から思ってみても、闇夜のことゆえ、女の顔にも覚えがない。覚えがあるのは女の肌と秘所の匂い、そしてまるで餓鬼が武者振りついたように女体を攻めたことだけである。
その覚えを、もう一度やってみたい。それは誰でもよいのだ。そんなことを思っていると、ある雨の夜、妻戸が開いてひっそりと一人の影が立った。
（すわっ、伊東の刺客か！）
手許の刀を取って立つと、なんと女ではないか。
（さては祐親殿の姫か？）
訊こうにも、名を知らない。
「誰じゃ？」
と手許の燭をあげると、そこには凛とした女が一人立っていた。

「名乗られよ」
　すると女は意外な名を語った。
「北条の政子です」
「北条じゃと!?」
（伊東ではないのか）
　それにしてもこれは意外なことよ。夜這い、妻問いは男のやること、それを女子がこうして一人居の男の屋敷に忍んでくるとは――。
（いや、これはもしかしたら、このわしに何かの難癖を言いにきたのか）
「夜じゃというに、見れば女子一人でわしに何の用か。用がござれば日中、用人を差し遣わされたい」
　と頼朝は言い放った。すると女は、
「何ゆえ殿は伊東の姫にゆかれまする。北条のわたくしを措いて」
　この答えほど頼朝を驚かしたことはない。それはつまり北条の姫の恋の告白だったのだ。
「政子どのと言われたかな」
「はい」
　それから頼朝は政子を部屋に入れた。薄暗い手燭の光の中に、くっきりとした目鼻立ちの女の顔が映った。

「北条家の姫が、わしのような流人の所にこられてよろしいのかな」
「流人といわれても、殿は歴とした源氏の嫡流ではござりませぬか」
「とは言ってもこれで二十年、これから先があるかどうか……」
「二十年もお待ちになったのです。これからではありませぬか」
　これはまるで女子の台詞ではない。
「一体、姫は何ゆえここに？」
「女子が夜、一人で忍んできたことを、何ゆえと訊かれるは何たる不粋。わたくしをお抱きくだされ」
　そう言うなり政子は着物を脱いだ。情事は男の方から――という常識と、これでは正反対である。
「その前に」
　と頼朝は言った。
「そなたはわしの監視役たる平家側の北条氏。その姫が源氏の流人と承知の上でござるか」
「そんな難しげなことを言われまするな。わたくしは殿を前から恋しゅう思うておりました」

「このわしを、一体どこで」

頼朝は驚いた。

「子どもの頃から……」

政子にとってはこれを恋というべきだろう。物心ついた頃、館から少し離れた丘の上の屋敷に住む頼朝を見知っていたのだ。

「それより」

と政子はいきなり頼朝の袖を引き寄せた。

「三日後、わたくしは平家の目代、山木兼隆と婚礼をあげることになっているのです。あんな兼隆の所へなぞ嫁きたくないのです。よってわたくしは今宵、捨て身で殿の所にきました」

頼朝は震えた。男女の恋とは、春宵酔月の如くたおやかなものと思っていた。ところが目の前の女は、いきなり雨夜を忍んで自ら衣を剝ぎ、男に迫ってきた。

（これではまるで遊女のような）

一度はそう思ったが、相手は北条の姫であり、しかも、山木兼隆を嫌っての勇断であるとなれば受けとめなければならぬ。

そしてその夜は、貪り合うような激しい情交を行った。

これで二人の唐突な約束は交わされた。後は父時政の承諾を得るばかりだ。

都の大番から戻ってきた北条時政は、一の姫政子の言い条にびっくりした。

（女だてらに）

それも流人頼朝の屋敷に忍び入り、既に体を交わし合ったというのだ。

「われらは平家ぞ。それがどうして源氏の頼朝なのじゃ。色恋の話ではないぞ」

時政は怒った。怒りながらも、かくなったからは娘のため、北条氏のため、一時政子をどこかへ移さなければならぬと考えた。

でなければ、これが表沙汰になったら、山木や伊東から逆に攻めたてられることになるだろう。

「ともかくそなたは病を理由に、表へ出ることはならぬ。このことを確と守れ」

時政、苦肉の策である。と、政子は意外なことを口走った。

「父上様、源氏の世がくるやもしれませぬよ」

「なんじゃと!?　誰がそんなことを」

濃い眉と髭面の時政は目を怒らせた。

「頼朝様です」

「なに、頼朝じゃと――奴にそんなことがわかるはずも、できるはずもないではないか。二十年来、ここから動かぬ者に、どうしてそんなことが。そなたを惑わす譫言じゃ。まさかそなた、本気で聞いたつもりはなかろう」

「いいえ、頼朝様は都の事情にとてもお詳しい。鹿ケ谷の事件や、法皇様の幽閉などいろいろお話しなされます、まるで都人のように。これは父上、平家の凋落の兆しではありませぬか」

「そんなことを頼朝殿がそなたに」

驚いた。一体誰がそんな情報を送ってくるのか――ということは、頼朝に京の連絡網があるということだ。

それに物怖じしない政子は、父の留守に、流人の許へ通うことが暴れても一向に恥じようとしない。

（此奴が男であったら）

とさえ思う。それにしても気になることがある。

「したが、そなたまさか妊ってはおるまいな」

すると政子は、

「わかりませぬ」

と涼しげに言う。そして更に、

「もし妊っていたら、後々、北条のためになりましょう」

とも言う。

（可愛げのないことを）

しかし、そういう事態にならないとは限らない。

切れ長に勝気な瞳、時政は政子の面差しに亡き妻の面影を浮かべた。時政が惚れた最初の女であり、政子はますます似てきた。

己が恋の結実が政子の母であったことを思えば、政子の初恋を実らせてやるのも父の情でなくてはならぬだろう。たとえ不義の恋であっても――。

そんなことを思っていると、政子はびっくりするようなことを言い出した。

「父上様、これは秘中の秘ですが、以仁王の令旨が、東国の源氏に伝えられるようです。近々、頼朝様の所へもくるでしょう。そうなったら頼朝様は源氏の旗頭に立たねばなりませぬ。そしてわれらは頼朝様の最大与力に」

時政は一瞬呆気にとられた。そのような一大事を、頼朝が政子に打ち明けているということだ。

（源氏決起の令旨か――）

時政は地下の水脈の音を聴いた。

（二）

平家討伐の気運は確かに動いている。

頼朝は京からもう一人の男、三善康信からも内密の手紙を使者から受け取っていた。康信は中宮太夫付きで、頼朝の乳母の妹の息子である。

開いていくと、頼朝の顔色が変わった。以仁王が「平家討伐の令旨」を諸国の源氏に発したというのだ。焦眉の急である。

（何ゆえ以仁王）

以仁王は後白河法皇の第二子である。ところがこの皇子はまことに不遇である。というのは、兄が七十八代二条天皇に即位した後の帝位をと考えていたところ、平家一門の娘（清盛の妻の妹・滋子）建春門院の皇子に帝位を奪われてしまった。高倉天皇である。

のみか、三十歳を越えながら今もって法皇から親王の宣下さえも受けていないのだ。

（清盛憎し）

は骨の髄まで沁み通っている。

その以仁王に目をつけた男がいる。思わぬ所の源氏だった。名は新宮十郎義盛。紀州熊野の源氏である。

そんな所が何ゆえ源氏かというと、これには訳がある。源氏の九代目源為義は頼

朝や義経の祖父である。為義は、かつて法皇に供奉して熊野に至り、海と温暖な気候に惚れ、熊野に滞在して多くの子女を儲けた。

その後、京へ戻り、かの「保元ノ乱」で敗れた。その為義には、熊野に残した血族がいる。その中の一人が新宮十郎義盛である。彼の夢は源氏再興である。

そして熊野から京へ出てきた。三十後半の元気盛んな男である。京へ出てきた義盛が真っ先に目を付けたのは源三位頼政であった。

世渡り上手、保身の頼政と聞いて落胆はしたものの、平家討伐の点火先をほかに求めることはできなかった。

会ってみると、なんと七十半ばの白髪白髯の老爺である。しかし、仲綱という息子がいた。元気盛んな男である。

「このままでは一生梲が上がりませぬぞ」

そう言われては黙っているわけにはいかぬ。

「父上、そろそろ機は熟してきているかと思いますが」

「そうかな？」

七十七歳の頼政は大儀である。このまま平穏に余生を送ろうと思っているのに、熊野辺りの源氏とやらが、熱に浮かされたように平家討ちを口にする。

しかし、今や平家は、娘徳子の産んだ皇子わずか二歳を践祚させて皇位に就かせ、日宋貿易の拠点福原（神戸市）に遷都を企図し、準備が着々と進行しているときである。そんなときに、源氏討ちなど頭になかろう。強いて翳を指摘するとすれば、平家の嫡男重盛が亡くなったぐらいだ。

それでも頼政はその気になれない。しかし、仲綱は違う。

「父上は年じゃ。あんな父上に言ったところで埒は明かぬ」

そう言う仲綱の元気が頼みである。

「で、いかがなさる」

「かくなる上は、以仁王にお会いするまでじゃ。ぬしも同道されよ」

ということで二人は以仁王の第に入った。

以仁王ははじめ消極的だったが、源氏が勝てば親王になれる——ということばに引かれた。

父、法皇でさえ法住寺殿を追われたくらいだから、自分の出番が塞がれたことは仕方がない。しかし、いつまでも諦めていてはこのまま老いてゆくだけである。

（この者らがその気になってくれるのも、機であろう）

どこを向いても、以仁王の出る幕はなかったのだ。

「頼政をここへ呼べ」

その一言で、二人は以仁王加担が実現することを悟った。

（遂にわしの運命も極まるか）

頼政は覚悟をきめた。本来なら「平治ノ乱」で散るべき命であった。それが二十年も生き長らえた。

老いを理由に断ることはいくらもできよう。しかし、今度は息子仲綱からの誘いとあってはやめるわけにもいかない。

どっちみち息子と運命を共にすることになるのだ。そう合点した頼政は、重い足どりで以仁王に伺候した。

「頼政、起つのじゃ。頼もしき仲綱ではないか」

以仁王はやる気である。

「は、はあ」

と頭を垂れたものの、もはや進退は窮まった。

わが人生も、いずれはこういうことになる——という覚悟がなかったわけではないが、それにしても老い過ぎた。

「で、戦略はどのように？」

と訊かれ、頼政は白髪頭をあげた。ここへくる道々、そのことは思案してきた。この年で、息子に追われて出てくるようでは、源三位頼政の面目がない。

「まずご令旨をいただき、東国の源氏に撒きまする。そして彼等を蜂起させ——」

「なるほど」

以仁王はのり出す。そして仲綱、義盛も頼政の顔を見入る。

「すれば平家は軍を立てて、直ちに京を発しましょう」

「いかにも」

「すれば京はガラ空きになりましょう。その留守を狙うがわが策。まず摂津・河内の源氏は起ち上がりましょう。そして京を完全制圧」

「おーう」

三人は期せずして声をあげた。

「頼もしい限りじゃ、頼政殿。さすがは京で聞こえた三位殿」

そう持ち上げられては次のことばがない。ややあってから頼政はおもむろに言った。

「したがこれも空に描いた絵にならんとも限りませぬ」

「なんと、空に描いた絵じゃと——これは父殿、どういうことじゃ」

仲綱は不審の目を投げた。

「全てが遺漏なく運んだときのことじゃ」

「遺漏なくとはどういう？」

「まず令旨を誰が運び配るかということ。それが途中で漏れたり、暴れようものなら、全ては水の泡じゃ」

すると義盛が口を挟んだ。

「わしが運びまする。お任せを」

こうして義盛は引き受けた。この後、義盛は以仁王の計らいで八条院の蔵人に取りたてられた。そして名乗りも「新宮蔵人行家」、義盛ではいかにも源氏らしいため、義盛改め行家となった。

新宮蔵人行家が、美濃、尾張、駿河、甲斐など、源氏ゆかりの場所を後まわしにして、ひたすら伊豆を目ざしているということが、三善康信からの飛脚でわかった。

「殿、かくなるうえはわが館へお移りなされて」

と健気にも動座を勧めたのは政子である。それは行家に、このようなみすぼらしい屋敷の頼朝を見せたくなかったことと、妻政子の存在、そして北条の後ろ楯を見せつける必要もあったからだ。

覚悟した時政はこれを機に、頼朝を北条家の離れ家に移した。

山伏姿の行家は、ひたすら伊豆を目ざした。蛭ケ小島と聞いて、おおよその見当をつけながら狩野川沿いに歩いた。

見渡す湿地帯の葭原に、こんもりとした雑木林の丘が見える。聞いてきた通りだ。そして目ざす屋敷に辿り着くと、

「主様は北条館に入られました」

と老女から告げられた。

（なるほど北条か）

いよいよ北条もその気になったかと、行家は内心北叟笑んだ。

それにしても、この塵煙にくたびれた姿で行くのも憚られ、配所でその夜を過ごすことにした。

二部屋に水屋だけの粗末な屋敷である。見廻すと建具は燻み、壁も所々雨漏りで傷んでいる。

（よくこんな所で二十年も……）

頼朝のしぶとさと忍従が窺われた。それからみれば行家の熊野は明る過ぎる。彼の陽性は、そんな南国新宮の風土のせいだろう。

明くる日、新しい白足袋を用意して屋敷を出た。ここから北条館は指呼の間だ。

そして遂に北条時政館の門をくぐった。治承四年（一一八〇）四月二十七日であ

る。

以仁王からの使者ということで、行家は丁重に迎えられ広間の上座に着座した。

「以仁王からの令旨を持参いたした新宮蔵人行家でござる」

白い山伏装束がよく似合う。身の丈もあり、陽焼けした壮漢である。

「手前、北条の名主、時政にござる」

五十近い堂々とした体軀だ。

「今は亡き左馬頭源義朝が嫡男頼朝にござる」

いかにも日陰者らしく、顔色は冴えないが面立ちは端正である。

(こんな御仁か)

南国の陽焼けした行家には、青白い貴公子が心もとなく見えた。

(こんな御仁に果たして決起ができようか)

一抹の不安が過った。その頼朝が行家に訊いた。

「令旨をわざわざ京から運んでこられ、大儀にござる。したがその前に、行家殿のご出自を伺いたい」

声は顔に似ず響きのある声である。

「ああ、拙者の出自は紀州熊野源氏。父は源為義にござる。かつて『保元ノ乱』で敗れ、十男のわしは紀州新宮に流され申した。よって新宮十郎、名乗りは元、義盛なれど、以仁王より『行家』をと、特に名を戴き改め申した」

「ということは、行家殿は叔父上ということでござりまするな。これはお懐かしゅうござりまする。何しろ十四歳でここに流されてきてからというもの、一切外界のことは知らず、ご無礼いたしております」

偽令旨の横行も考えられる世の中である。

それでは——と令旨の入った筐を受け取ったが、頼朝はそれを先に時政に渡した。

(どういうことじゃ)

行家と時政は同時に訝った。時政は一瞬面喰らった。どうすべきか……。

令旨の受け取り人は頼朝である。その頼朝が令旨を先に時政に渡したということは、時政に決起の鍵を渡したようなものだ。

「頼朝殿でござるよ」

時政が小声で囁くと、

「わしには兵の一人もおりませぬ」

とこれまた低声で答えた。時政は躱されたと思った。しかしこのとき、この青白い婿に賭けなければならぬと覚悟した。

時政は筐を両手で高く掲げ、押し戴くようにしながらやおら蓋を取り、令旨をと

り出し押し戴いた。文言は簡潔で清盛の非を弾じ、源氏の奮起を促すものであった。

そして末尾に令旨の取次者として「前伊豆守正五位下源朝臣仲綱」という名が記してあった。

時政はそれを頼朝に渡した。頼朝も、

「確かに拝受いたした」

と両手を高くあげて拝受した。そして読み下した後、仲綱の記名に目が止まった。時政同様、今回の源氏旗上げの旗頭が源仲綱だということがわかった。

（さもあろう）

現にこうして行家が以仁王からの令旨を携えてきた背景には、仲綱との動きなくして出来ることではない。

こちらはただ座していただけである。行家はことばを継いだ。

「それで決起はいつ頃であろう」

「それはまだ、いろいろ考え、用意もあれば」

行家は膝を進めた。

「考えるのはよろしいが、考えてだけいるものではあるまい。京では、こちらの旗上げに合わせ、頼政殿が近畿勢を集めて一気に攻め入る算段である。よっていつまでも愚図愚図している余裕はない。そのためにこうしてはるばる参ったのじゃ」

「まことに大儀でござる。早速用意にかかろう」

と答えたのは時政であった。

「ところで行家殿は、わしの弟義経をご存知であろうか」

「義経殿じゃと？」

行家は首を傾げた。

「幼時、京の鞍馬山に送られた牛若でござるが」

「牛若殿とはもしやして常盤殿の……」

「そうじゃ、常盤の子じゃ」

「ああ、『平治ノ乱』の後、三人の子らを連れて、雪の中を大和辺りまで逃げ廻ったが、後に捕えられたという……」

「その乙子じゃ。鞍馬山に送られたその弟のことじゃが」

「さあ、その君のことは存ぜぬ」

「そうか」

話はそこまでだった。

その夜、頼朝は何度も寝返りをうった。

決起といってもどれほど人数が集まるだろうか。これは残念ながら時政頼みである。次に弟といっても、範頼と義経だけであろうか。ほかの弟二人は僧籍である。

（平泉へ使者を出さねば）

まだ見ぬ末弟、義経のことが頭に浮かんだ。

第七章　黄瀬川

(一)

治承四年（一一八〇）四月、平泉に遅い春がやってくると、泉ケ城の桜も綻び、衣川の水も温んできた。

すると、不遇の皇子以仁王が、平家打倒の令旨を東国の源氏に密かに撒いたという情報が九郎の耳にも入ってきた。

（伊豆の兄上の所にも届いていよう）

すれば頼朝殿はどう出るか――九郎はジッとしていられなくなった。それを打ち明けられるのはやはり吉次である。

「かくなったからは、わしはここでのうのうとしてはおれぬぞ。兄上の許に馳せ参じねば」

心情としてはそうであろう。その日のために鞍馬時代から刀剣、体技を練ってきた九郎である。それに、馬術や弓術、戦さの仕方もここ平泉で身につけた。

「したがまだ様子がわからぬときに、軽挙はなりませぬ。それに御曹司一人で駆けつけたところで頼朝殿も喜ばれますまい」

純情、且つ直情的な九郎は、どうかすると一人で空廻りする傾向がある。それを抑えてくれるのは吉次である。

「いずれ動きがわかってきましょう」

吉次のことば使いが変わってきたのはこの頃である。この義経に臣従という気持ちが動いてきたからである。

六月、みちのくの緑が青々としてきた。いたずらに時の過ぎるのを待っていると、一人の男が九郎の屋敷へ現われた。

「京からやってきた源有綱にござる。お取り次ぎを願いたい」

ということで、九郎はびっくりして表口に出た。年は九郎より三つ四つぐらい上であろうか、山伏姿に身をやつした中背の男である。

「有綱殿とは？」

「源三位頼政の孫にござる」

「おお、これは、これは」

遂に頼政の孫が、こんなみちのくまでやってきてくれたかと胸が熱くなった。

早速部屋に招じ入れると、急使を吉次の許へ走らせた。

「遠い所から、お疲れにござりましょう」

九郎は心から労をねぎらい、酒食を用意させた。

そこへ吉次も現われ、三人がくつろいで顔を合わせた。

「で、こたびのご来意はご令旨のことでござりましょう」

そう言いながら座を改めようとすると、

「いや」

と有綱は制した。そして、

「わしはここまで逃げてきたのじゃ」

驚いたことを言うものだ。

「逃げてきたと？　どういうことでござる」

有綱は暫く黙止すると、それからやおらここに至るまでの経緯を語った。

「源氏は敗れました。祖父も父も、それから以仁王も討たれましてござる」

「なんと!?」

以仁王の令旨が伊豆へ届いた頃から、頼政は頼朝の決起を待った。決起を待った

のは、京から東国へ動く平家の後を突いて京を占拠せんとする戦略があったからだ。

ところがその前に、それを覆す事変が起こった。頼政が一番案じ、心配していたことが出来した。令旨が発覚したのである。

「以仁王ご謀叛」

の密報が六波羅に入り、源氏蜂起の前に事が露顕してしまった。

頼政は覚悟した。そこで夜陰、ひそかに郎党を集めて以仁王を落ちさせ、とりあえず近江の園城寺（三井寺）を頼った。園城寺で叡山に働きかけ、僧兵と一緒になって諸国の源氏の決起を待つことにした。

叡山を頼んだのは、叡山が平家を憎んでいることを知っていたからだ。ところがその叡山には、既に平家の手が及び、頼政の願いは拒否された。万事休すである。頼政はやむなく以仁王を戴いて一千騎を率い、宇治の平等院に陣を布いた。そこへ二万八千騎の平家軍が攻め入り、源平の合戦となった。

しかし、多勢に無勢の頼政は宇治川辺りで重傷を負い、頼政・仲綱父子はやむなく平等院に退いて自害して果てた。

一方、以仁王はそれから奈良へと逃れる途中、相楽郡光明山寺の前で捕えられ、無惨にも討たれたという。そして有綱はほうほうの態で逃げてきたというのだ。

暫し三人はことばもなかった。まさか源氏旗挙げの緒戦で、かくも敗れ去ろうとは思いもよらなかった。

「したが伊豆の兄上がござる」

九郎は言い放った。同じ源氏でも、頼朝はいわば八幡太郎義家の嫡流である。

「そうじゃが、問題は頼朝殿の器量にござろう。頼朝殿は二十年の流人暮らしをどのように送ってこられたのであろうか」

つまり、他日の源氏再興を期して、ひそかに弓矢の練磨に励んできたかどうかだ。

「それはわからぬが、兄上の一声で、東国の源氏は立ち上がるのではあるまいか」

「そうは言うても、それは頼朝殿の器量次第じゃ」

水を注されて九郎は庭に目を移した。兄といっても十二歳も違い、一度も見たこともない兄である。

「ところで清盛はこの六月、都を福原（神戸市）に遷した。よって天皇や上皇、法皇をまずお遷しし、公卿の移転も行われている」

「ほう、都を福原に」

「清盛の膨大な財力の元は異国との取引きじゃから、福原の方がてっとり早い。源

氏が土地・田畑を当てにするのと大違いじゃ。平家は即、金じゃからのう」

成る程有綱はさすがに京に住んでいただけあって、政治や物の見方、考え方が違っている。

それから有綱はそのまま九郎の屋敷にとどまり、京へ戻ろうとはしなかった。肉親に恵まれない孤狼の九郎にとって、有綱は身近な存在となった。いずれは有力な郎党の一人となってくれよう。

今はともかく共に敗者の流人である。そうなるとやはり気に懸かるのは伊豆の頼朝の動きだ。

その日、九郎は、気に入りのあの丘に有綱を伴い、北上川の彼方、束稲山を遠望しながら初秋の陽差しを避けて叢に腰をおろした。

「いい眺めじゃのう」

「ここが平泉で一番の眺めじゃ。ところで伊豆の兄上は起たれようか――」

「動く、動かぬなどと言っているどころではござるまい。いずれ東国征伐の平家軍がやってくるのは必定じゃから」

「では起たねばならぬ。したが兵など集まってくれようか」

「聞くところによると、北条の娘御を娶られたというから、北条の呼び声である程

度の兵は集められるであろう」

「ある程度では、平家の云万には勝ち目はないかもしれぬ」

「したが聞くところによると、今年の畿内はえろう米の不作じゃそうな。そこで兵糧が難しいと聞いたぞ」

「そうか。じゃったら大津波のような兵はこぬということじゃな。それにしても平家はいつまで栄える？」

「ま、清盛のいる間はつづこう。それから先は後継の器量次第じゃ。なんというても重盛を亡うしたことは平家の痛手じゃ」

「うーむ」

「これからの戦さは、やはり気力と戦術、数ではなくて精鋭であろう。何しろ相手は贅で肥った軟弱な貴族平家じゃからなあ」

「そうじゃな」

有綱のことばが頼もしい。

秋風に変わった八月半ば、遂に頼朝が伊豆で挙兵、近在の目代（国司の代官）山木判官兼隆を討ったという報せが入ってきた。

「おーっ、九郎殿、頼朝殿旗上げの前哨は上首尾でござるぞ」

外から戻ってきた九郎に、有綱は笑顔で報じた。

「ではわれらも征かねばならぬ」

ところがそれから十日もたたずして頼朝が石橋山での旗上げに、大庭景親率いる平家軍に敗れ逃走、消息を絶ったという。石橋山とは箱根権現の近くである。

「やっぱり駄目か」

焦燥というより、絶望的でさえある。兄が駄目なら、いつの日か自分が起つしかない。そんな思いがいよいよ募ってくる。

「行くぞ」

行くぞとは、荒馬をこなして栗駒山の麓を駆け廻ったり、弓射や剣技の練習である。後日のための武技だが、何はともあれじっとしてなぞいられない。

そうして二カ月がたった。山々の雑木は色づき、鮮やかな錦繡を綴りはじめた。

すると行方知れずになっていた頼朝が、なんと真鶴から舟で安房へ逃れている間に、三浦党や千葉常胤、上総介広常らに擁せられて房総を北上、隅田川を渡って海沿いに南下しているという報が入ってきた。

「兄上は無事じゃった。そしていよいよ平家と」

居ても立ってもいられなくなった。

「わしは征くぞ、兄上の許へ。有綱殿も征かれませ」

九郎は早速身支度にのりだした。

「そうは言われましても、一体何人で駆けつけるのでござる。まさかわれら二人でというわけにはいきますまい。それにお館様に黙って征くわけには」

(二)

早速九郎は伽羅御所に伺いを立て、ようやく御所の門をくぐった。

紅葉の散り敷いた広大な庭園に、秋の陽が穏やかに射している。

「なに、頼朝殿の許へいかれるとな？」

秀衡は冷静に応じた。

「はい、石橋山での旗上げに敗れ、暫く消息不明でござりましたが、どうやら房総の加勢軍を集めて再び相模の方に向かった由、私といたしましては一刻も早く馳せ参じたく、骨肉の情と思し召してお許しいただきとうござりまする」

しかし、秀衡はその話に乗ろうとしない。そして、

「義経殿はここにこられて何年になる」

と故意に話をはぐらかした。

「はは、もう六年になりまする。六年もの長き間、お世話になっておりました」

「早いものじゃ、そんなになるか。そなたと初めて会うたのは中尊寺であったな。

そなたの元服の話、今も覚えているぞ」
「お恥ずかしゅう存じまする」
「いや、そなたをあれから愛しゅう思っておったわ」
「恐れ入り奉ります」
「して、今幾つになられた」
「はあ、二十二歳になりました」
「二十二とはお若いのう、眩しいくらいじゃ。それでお子でもお出来になられたか」
「はあ、実は娘が一人……」
女犯を心に固く戒めていたが、つまりはここへ来て二年目、欲情に耐えかねて一人の女子と交わった。後でわかったことだが、美枝という女子は、やはり秀衡か基成の指図で近づいてきた女であった。
「幾つになる」
「三歳になります」
といっても美里と名づけた娘は、美枝の許で養われている。
しかし、そんな身の上話を訊かれたくて参上してきたわけではない。九郎が何を考え、そして暇乞いにきたことがわからぬ筈もないのに……。

「明日にも兄頼朝の許に参ずべく、御所様にお暇乞いを」
秀衡はわかっている。わかっているだけに九郎の激情をほぐそうとしているのだ。
「義経殿には、頼朝殿がどんなお人かおわかりであろうか」
「と仰せられますと？」
「骨肉の情も大事じゃが、たとえ兄弟といえども人間を見る目も大事じゃ」
「と仰せられますと、御所様には頼朝を？」
「ここからはいろいろな密偵が放ってある。よって、逐一頼朝殿の動きも、人柄も手に取るようにわかるのじゃ」
「それでは兄の許へ行くなと」
「そうじゃ。戦さの目もわからず、それに義経殿が一人で馳せ参じられたところで、果たして頼朝殿や近従たちが喜ばれようか」
「……」
「それより頼朝殿からのご一報がこれまでにあったか？」
それを衝かれてハッとした。九郎が平泉にいることは、手紙で何度か書き送っている。しかし、これまでに一度たりとも返事を送ってくれたことはない。
淋しくないと言えば嘘になろう。それは今でも心の内に密かに巣喰っている。

「よろしいかな、戦さは情緒ではござらぬよ。馳せ参ずるといっても、小人数では話にもならぬ。戦人にとって兵力とは数であろう。いかに弓矢に長けた者でも、歓迎されるわけはない。源三位殿が何ゆえ敗けたか、まさに兵力の差であった」
「仰せの通りにござります」
「そこもとは？」
秀衡は目を細めて九郎の後ろに控えている有綱を見やった。
「源有綱、源三位の孫にござりまする。宇治川の戦さに敗れ、こちらに逃げて参った者でござります」
「さりながら……」
と九郎はことばを挟んだ。
「いちいちご尤もの仰せにはござりまするが、私の心情は勝ち敗けではござりませぬ。兄が苦境なればこそ駆けつけたく存じます」
「しからばもし敗け戦さともなれば、共死にということにもなりかねぬぞ。それでも征くというのか」
「はい。仮初めにも兄の敗死などということを、ここ平泉で聞くことになったら、私はこのままではおれませぬ。それより兄と共に戦うことこそ本望でござりまする」

声涙下らんばかりの九郎である。
（哀しいほど純良な男よ）
もはや諫言なぞ無意味であろう。かくなる上は、この無一物の若者に、幾許かのものを付けてやらねばと思う秀衡である。
「それでいつ出立じゃ」
「明日にでも」
「そんなに性急になされずと、三日後にされよ」
秀衡は精一杯の慈愛の目を注いだ。
（恐らく今生の別れとなろう）
この世間知らずの若者に何と言ってやるべきか――死ぬるなとも言えず、さりとて再び平泉へ戻ってこいとも言えぬではないか。
「待たれよ」
秀衡は立ち上がると暫し奥に消えた。それから再び現われると、二袋に分けたずしりと重い袋を提げていた。
「黄金じゃ。いざという時のためになる。持っていかれよ」
「いや、私は以前、お館様から黄金造りの太刀を頂戴いたしております。それを大事に持っていきますから」

「それとこれとは別じゃ。黄金さえあれば、馬を買うことも食糧を求めることもできよう。それに、人を買うこともできる。いや人の心を買うことものう。武器と思うて持っていかれよ」

「これではまるで父親のようなお情けにござりまする」

九郎は思わず涙した。

「そうじゃ、そう思うてもらってもよい」

「有難き幸せにござりまする」

「それでは目立たぬように。して何騎ぐらいじゃ」

「私とこの有綱、そして吉次の三騎」

(たったの三騎か――)

「なんと、あの吉次奴が。義経殿が請われたのか」

「いえ、吉次の方から」

「そうじゃったか」

人の心も世の中も、金で動くと信じてきた男である。そんな吉次が、金や財を抛(なげう)って孤狼に尾(つ)いていくとは――。

それほどこの九郎には、人の心を魅了するものがあるようだ。

(天性の無邪気)

これは人を動かすこともあるが、堕とされることもある。

(不思議な男よ)

降霜の平泉はまだ夜明けの微睡(まどろ)みから醒めてはいない。白い息を吐きながら、三騎が表通りを避けて風のように駆け抜けた。

(いつ戻ってこられるか)

などと思うのは吉次だけであろう。黄金はしっかと馬の背に括(くく)りつけてある。いずれ頼朝の陣屋がわかったとき、新しい大鎧を着けることにして、今は野武士の恰好である。

阿武隈川沿いに南へ下り、数日を経て白河を過ぎた。すると後方から一団の騎馬武者が近づいてきた。

(何かな?)

警戒心が起こった。すると中から二騎が近づいてきて声をかけた。

「もしや九郎殿ではござらぬか」

ゾクリとしながら振り返った。聞き覚えのある声である。

(継信(つくのぶ)殿のような)

「佐藤継信に忠信じゃ」

まさかと思いながら馬を止めた。横に馬を並べてきたのは紛れもない二人であった。

「おお、これは継信殿、一体いずれに」

「いずれにとは慮外な。九郎殿をずっと追いかけて参った」

「わしに、何ゆえ？」

「お館様の命令じゃ。平泉では目立たぬように距離をおいてきた」

「したがお館様は何をもって」

「ああ、九郎義経殿の郎党として働けと」

「あのお館様が」

胸の奥(かたじけの)が震えた。

「忝(かたじけの)うござる」

「いや、われらも穏やかな平泉には飽(う)んでいた。よってこうして九郎殿と共に、平家討伐に出たい。ま、二十騎ばかりで数は足りぬが、いずれも九郎殿の初陣(ういじん)にふさわしいみちのくの精鋭たちじゃ」

思いもかけぬ天恵である。いや、秀衡殿の情が身にしみる。

（わしにとって心の父上――）

(三)

十月半ば、関東に入り南下してくると、いろんな情報が入ってきた。それによると頼朝は鎌倉に入り、関八州の本営を定めたというのである。

それも驚きだが、更に驚いたのは、駿河の富士川で対峙していた平家の大軍が、なぜか一斉に逃げ出したというのだ。

「何が起こったのじゃ」

「さあ、わかりませぬ」

「して頼朝殿はどこにおられる」

それが気になる。富士川の前線に出ているのか、それとも鎌倉にいるのだろうか。

伊豆に入ると、先発していた佐藤継信兄弟が戻ってくるや、意外なことを告げてきた。

「平家の大軍が一挙に逃げ出した訳がわかりましたぞ」

その顔が妙に若気(にやけ)ている。

「何があった？」

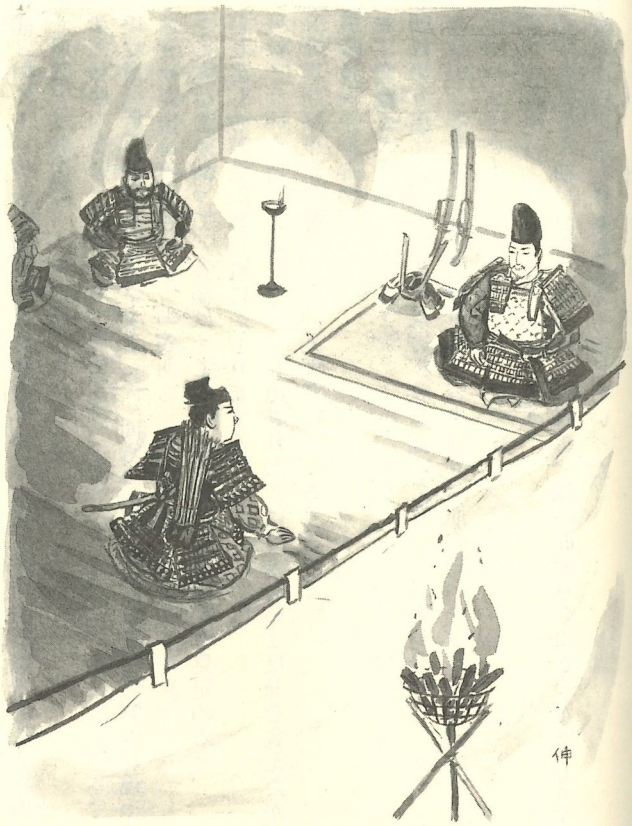
「平家の腰抜けというか、頼朝軍の僥倖というか、ハハハハ」
と二人は大笑いした。
「何？　僥倖とな、いかなる僥倖じゃ」
二十日の暁闇、富士川東岸に滞陣していた甲斐源氏の一部に、抜け駆けをする者があり、夜陰こっそりと川を渉った。対岸には沼が多い。その沼には丁度幾千という水鳥が羽を休めていた。その水鳥が、人の気配におどろいて一斉に翔び立ったという。その羽音の凄まじさは、まるで人馬の襲来の如き音であった。
それが富士川西岸から蒲原一帯にかけて宿営していた平家軍の耳には、源氏軍の夜襲ととれたようだ。
平家軍は寝込みを襲われたと勘違いし、夜着のままほうほうの態で逃げ散ったという。
「ハハハ」
「ハハハ」
一行は互いに顔を見合って笑った。
「そんなことがあるものかなあ」
「鳥の羽音を馬蹄の音に聞き違えるとは愚かなことよ」
「いやあ、寝込みじゃからのう」

「して、頼朝殿はいずれに」
「黄瀬川まで引きあげられ、今宵はそこで宿営されると」
となると宿営は多分、寺であろう。それに戦勝の宿営辺りは、今頃源氏軍でごった返しているだろう。そんなことを考慮して三島神社の境内で一服しながら時を過ごした。そしていよいよ腰をあげた。
「九郎殿、いざ」
吉次が促すと、
「これよりは九郎はやめよ、義経じゃ。兄上の兵にまでそう呼ばれてはならぬ」
と義経は言下に言い放った。
「ご尤も」
佐藤兄弟が応じた。
頼朝の宿営となっている山門に近づくと、辺りは人の群でごった返している。何しろ戦勝の源氏軍であり、その御大将の宿営とあって、近隣の男たちも集まってきている。
夕暮れとなり、山門の前には赤々と篝火が焚かれている。義経は馬から下りると、

「誰かある」
と大声で呼ばわった。出てきたのは髭の濃い厳い顔の男である。
「どなたじゃ」
「わしは源家の九郎義経、佐殿の舎弟にござる。只今奥州平泉より駆けつけて参った。お取り次ぎ下され」
厳い顔の男は土肥実平、相模平氏の一党首で足柄郡土肥郷の住人、今度の合戦に千騎を率いてやってきた男である。実平は細身の義経をじろじろ見ながら、
「待たれませ」
と奥へ消えた。
いよいよ長兄に会えるかと、義経は溢れんばかりの思いである。
(どんなお顔立ちか、開口一番何を言われるであろうか……)
あれこれと、まるで想い女に会うような期待と懐かしさである。
ところが陽は海の彼方に没し、茜色の空が紫に変じ、いよいよ暗くなってきたが、あの土肥実平と名乗った男の姿が現われない。
「殿、いかがなされます」
継信が囁くように言った。
「待つしかなかろう」

「したがもう半時(約一時間)にもなりまする」
「いろいろお忙しいのやもしれぬ」
そうは言いながらも、義経の中の沸き立つような想いは少しずつ冷え、代わって疑心暗鬼になりつつあった。
(実平殿が伝えやらぬのかもしれぬ)
そんなことも疑う。それにしても弟がきたというを、取り次がぬ筈はない。
(ならば何を考えておられる)
山門の石段に腰を落として考えこんでしまった。
あたりは漆黒の闇となり、篝火の灯がやけに赤い火むらをあげている。
そういえば、何度こちらから便りを出しても、一度も便りをくれなかった頼朝である。
(そんなに弟というものが疎ましいのか)
懐かしさが悲しみに変わってきた。
(朝まで待つか)
頼朝がこの石段にくるまで待ってみよう。こうなったからは根比べである。
暗い石段に腰を落として、ジッと篝火の火を見つめている義経の姿が淋しそうだ。

「われらもこうしているしかないか」
吉次も大きく溜息を吐いた。
「いや、かくなったからは、われらもどこかに宿を見つけて、翌朝ここに参ってはいかがじゃ」
有綱が提言した。
「そうじゃな。それがよろしかろう」
佐藤兄弟も頷き、義経に伝えようとしたとき、山門の上の方から、
「ご舎弟殿、上がられませえ」
という声がした。かれこれ一時の余（約二時間以上）がたっていた。
義経は黙って立ち上がった。無言が義経の心情を表わしている。義経はなお無言である。その後に尾いて一行は重い足どりで石段を登った。
境内に入ると赤々と四囲を照らす篝火に映えて、白い幔幕が張りめぐらされている。
それを横目に見ながら燭の案内で廊下を歩いた。と、
「供方はそこまで」
と実平が言った。この日のために新調した赤糸縅の大鎧を着けた義経が、兜を手にゆっくりと板敷の広間に足を入れた。



広間といっても寺の広間は、二間を抜いた二十畳ぐらいの部屋である。その上座の方を見ると、敷皮に一人男が座している。

（兄上じゃ）

即座に直感した。それにしても、長い間胸の内に温めてきた風貌とは違っていた。なぜか距離を感じさせるものがある。

下手に丸茣蓙があって、義経はそこに腰をおろした。それを見定めると、

「お召し出しの源九郎義経殿にござりまする」

実平はそういう言い方をした。召し出されたわけではないと反発を覚えたが、

「只今、奥州平泉より参着した源九郎義経にござりまする」

と義経は両手をついた。

「おお、義経か」

頼朝はのり出すようにした。双方、膝を進めて互いに目を見合った。そして顔の中に、父の、それから己と共通する顔容を探り、血の匂いを嗅ごうとした。

「兄上」

「義経」

息詰まるような初対面のこの一時、これまで長い間便りのなかった空しさや、先刻まで石の階で待たされた怨みも消えていった。

「お懐かしゅうござりまする」

ことばが震えた。

「鞍馬から奥州と、苦労したであろうなあ」

苦労したというより、淋しかったと言った方が当たっている。

「兄上こそご苦労なされました」

二人は暫し万感の思いで互いを見合った。

しかし、邂逅の感動もそこまでだった。次のことばが義経を驚かした。

「して義経、一体何騎で来た」

「十余騎にござります」

「なにっ、たったの十余騎か。平泉の大事な客分だったと聞いていたが……」

（そういうことを言われるか）

初めて会う弟に対し、兄が数の不足を口に出されるとは思わなかった。

「平泉の客分とはいえ、こたびの戦さは藤原の戦さではござりませぬ」

頼朝は黙った。頼朝も孤独である。その頼朝にとって身内は必要であった。これまでに異母弟の範頼（本拠は遠江国蒲御厨）も参じてくれたが、やはり郎党らしき者もない弟であった。

それにつけて、平泉の藤原秀衡の客分となっている義経には、それにふさわしい

郎党の数を期待していた。それが十余騎とは淋しく、関東武者への面子の立たないことを慮ったからだ。

（いずれにしてもわれらは敗者の子であったわ）

改めて思い知る頼朝であった。

それから二人は互いに盃を交わし合ったが、義経の心の内には、隙間風のようなものが吹きはじめた。その隙間風を感じながら座を辞した。

短い対面であった。義経はそれから佐藤兄弟らと共に石段を降りてきた。するといやに篝火の周りが騒々しく、何事かと怪しむと、中から二人の男が近寄ってきた。

「某（それがし）は武蔵国畠山庄の重忠と申す者でござる」

「某も同じく武蔵国熊谷郷の直実（なおざね）にござる」

と口々にわが名と本拠を名乗ってくるではないか。

この石段を上る前は、誰も近づいてくる者はなかった。ところが一旦、頼朝の舎弟として面謁が叶えば、源氏の一族として処遇されるであろうと、近づいてくる。そして数も次々とふえてくる。

「某は何国何郡何邑の住人にて、何某に候」

と口々に挨拶する。それにしても腹が減ってきた。

「今宵はここまでじゃ」

有綱がそう言うと、

「お宿所はいずれでござろう」

となおもつづける。

「いや、宿所など当てはない。奥州から今夕、馳せ参じたゆえ。どうじゃ、吾主（わぬし）らで宿所を見つけてくれえ」

「それならばわれらの方へ」

「いや、わしらの方へ」

と口々に己が宿所に引き連れようとする。

「それでは畠山殿の所へ」

その一言で黙ったところをみると、畠山氏には一歩も二歩も譲らねばならぬところがあるようだ。

そうして義経一行は、黄瀬川の畔（ほとり）、畠山重忠の宿所に旅塵を落とした。

第八章　宇治川

(一)

義経は気鬱である。

黄瀬川の対面の後、頼朝は常陸の佐竹征伐に出陣した。しかし、義経には声をかけてくれなかった。それは兵数を持たないからか、それとも、

「佐竹氏は源氏ではござりませぬか。その源氏を討つとは」

と頼朝に反論したからだろうか。しかし、今もってわからないのは、源氏が源氏を討つということだ。

「兄上の気が知れぬわ」

と腹を立てる義経に、吉次は、

「鎌倉殿は、関東で源氏の棟梁を目ざしておられ、そのために平氏をも利用なされるお方でござります」

と言う。

平氏を利用しているというのは、妻政子の父北条時政の家系が平氏であり、石橋山以来最大の与力である上総介広常や、畠山重忠も同じ平氏である。つまり頼朝は皮肉にも関東平氏によって担がれているようなものだ。

(兄上はわからぬお人だ)

源氏の棟梁となるべく、関東平氏を利用するなら、勢力のある佐竹源氏を討つことはあるまい。

次の不満は、義経に屋敷も与えず、頼朝の大蔵谷館の曹司部屋に起居させていることだ。

奥州から駆けつけたとはいえ、頼朝の戦さに参じ、戦功をあげたわけではないが、頼朝の実弟である。その弟に、屋敷の一つも用意しないとは淋し過ぎるではないか。

「吉次、この金で兄上がびっくりするような屋敷を造ってくれ」

義経は秀衡から貰った袋を取り出した。

「何を言われます。この金はもっと大事な時にお使いなさるべきです。屋敷ごときに使うものではござりませぬ」

と押し返す吉次ではあったが、義経の寂寥はわかっている。

頼朝は、義経の武技や行動力については認めている。それに鎌倉へきてからの義経の人気というか、不思議な魅力が御家人たちの間で評判になっていることも耳にしている。

そういう身内がいることは悪くはないが、兄を凌駕するようなことになっては邪魔である。そんな感情があるなど、まだわからぬ義経である。

「それに殿、平泉の御所様が朝廷に頼朝追討の請文を出されたという噂にござりまする。これも殿への疑心暗鬼の材料となっているやもしれませぬ」

「まさか？　どうして御所様が」

「それは御所様にとっては京の方が大事にござりましょう。御所様は近々、陸奥守になられるということですから」

「それで兄上はわしを疑っておられるのか」

「あるいは……。鎌倉殿は長い流人暮らしをなされた方ですから、人一倍猜疑心の強い方かもしれませぬ。殿が自由に平泉で生きられたのとは全く違います。その辺をもよく考えてお接しにならないと」

そういえば秀衡から、骨肉の情もわかるが、人を見る目を持たねば——と忠告されたことばを思い出す。

（わしはあまりに直情的であり過ぎるか）

年が改まり養和元年（一一八一）となった。昨年末、清盛が狂気を発したとか、熱病に罹ったとか聞こえてきたが、二月、とうとう身罷ったという報せである。

清盛の福原（神戸市）遷都は、いわゆる南都北京といわれる藤原氏の奈良に倣って、福原を聖地にしようとしたものだ。しかし、以仁王と源三位頼政の謀叛によってそれは瓦解した。

そこで腹癒せに奈良攻めを強行し、昨十二月末、興福寺と東大寺を焼いた。するとその厄災に当てられたように、年が明けると高倉天皇が二十一歳の若さで薨去され、二十日後、当の清盛も業火に焼かれるような熱病で六十四年の生涯を終えた。

「天罰じゃ。自業自得じゃ。これでいよいよ源氏の時代が始まるというもの」

鎌倉はじめ諸国の源氏は、この報せに沸いた。

「いよいよじゃな。われらの出番がきたぞ」

義経は若い体をもて余すように毎日的場に出て弓を鳴らし、佐藤兄弟を引き連れて由比ケ浜から街道筋へと馬を熟した。

その間、頼朝は鶴岡に、源氏の氏神・八幡宮を造営し、若宮宝殿の棟上げが七月二十日と決まった。

その日、八幡宮若宮宝殿前の東の仮屋に頼朝と義経が入った。御家人たちの席は仮屋の南と北である。

儀式がすすんで、普請を命ぜられた工匠の頭に馬を下賜することになった。ところがこのときまでに馬の曳き手が決まっていなかった。すると突如、頼朝の口から意外な名が発せられた。

「九郎義経、馬、曳けー」

頼朝の背後に在った義経は一瞬耳を疑った。それは当の義経のみか、居流れた御家人たちも一様に驚いた。

義経は動かなかった。頼朝は動かぬ気配に、

「何をしている」

と促した。義経としては、工匠のために馬を曳くような役を、源家の連枝がやることではないと思ったからだ。すると、

「早く、曳くのじゃ」

頼朝の声に怒気がこもった。

「恐れながら……馬を曳く役は」

そう言い返すと、

「頼朝の命令じゃ」

と言われ、立たざるを得なくなった。そこでやむなく庭に降り、社頭の隅に繋がれている馬の側に歩み寄った。そして馬飼いの下人から手綱を受け取った。義経の介添えは土肥実平、工藤景光、新田忠常らである。

義経は二度馬を曳いて、工匠の側まで歩み、手綱を手渡した。

これを御家人たち衆目の前で見せたということは、義経はたとえ弟であっても、御家人だということを自他ともに自覚させたということだ。頼朝は既に侍所を設けて、家人の統制と軍事・裁判の政庁を設置している。

（わしは兄上を懐かしく思ってきたが……）

それはこちらの一方的な思いこみだけで、頼朝は義経を弟として遇しはしない。庭に照りつける夏の強い陽差しを眺めながら義経は重い鉛を呑みこむ思いだ。

「今日はご苦労様にござりました」

吉次が冷茶を用意してきた。義経は無言である。われながらよく我慢できたと思っているくらいだ。

「兄上の魂胆は何だ」

感情的に言った。

「弟といえども御家人という、いわばけじめを殿と御家人一統に示したのではござ

りませぬか。私にはそのように思われまする」

「なるほど」

ならば何も急いで馳せ参ずることもなかった。またも秀衡のことばを思い出した。

（義経殿には、頼朝殿がどんなお人かおわかりであろうか）

と言ったことばである。更に、たとえ兄弟といえども、人間を見る目も大事じゃとも言われた。

（御所様には全てお見通しであった）

それを斥け、ひたすらやってきたのは、やはり骨肉に飢えていたからだった。

「鎌倉殿は、源氏の棟梁を目ざしておられまする。そのために、関東平氏を利用されるくらいですから、骨肉の情にほだされるお方ではありませぬ。そこのところは、殿もお気持ちを切り替えることが肝要かと」

「うーむ」

生返事である。

「要は殿が合戦で力を発揮なさることでござりましょう。すれば、鎌倉殿はじめ、皆を承服させることができまする」

「そうじゃな」

今度は素直にことばを返せたが、それは当り前のことである。しかし、義経が求めていたのは、屋敷とか連枝の処遇ではなく、骨肉の温味であった。

それがチラと見えたのは、黄瀬川河畔での対面の一っときだけで、鎌倉へきてからは全く変わった。

（わしは甘えていたか）

甘えといえばもう一人、それを求めようとした人物が鎌倉に転がり込んできた。同母の次兄、幼名乙若、僧籍となった円成（後、義円）である。

義経が鞍馬に送られる前に、乙若は叡山に、後、八条宮円恵法親王の坊官となっていたが、兄頼朝の旗上げで関東に下向してきた。

母を同じくするというだけで血が騒ぎ、頼朝と対面した後、早速ここで会ったが、この兄もまた情に溺れる男ではなかった。

兄頼朝のためにと、名も円成から義円（源氏の義を一字取る）と改めて、早々に鎌倉を後にしてしまった。行く先は叔父新宮蔵人行家の許であった。

叔父の行家（一年前、以仁王の令旨を頼朝に伝えにきた人物）はあれから鎌倉を出て三月、三河・尾張で兵を集め、墨俣川を挟んで平家と対陣した。

このときの平家軍は、富士川の戦いとは違い、亡き清盛の遺令を受けて士気は高い。この戦さに参ぜんと、僧の身も顧みずに駆け去ってしまった。

しかし、このときも頼朝はなぜか義経を動かさず、刀剣を取ったこともない義円に千騎を付けてやった。義円の後を追おうと、

「義経も義円の後に付いて」

と頼朝に懇願したが、なぜか今度も首を振らなかった。

「いよいよ兄上の魂胆が知れぬわ」

怒りと悲しみを綯いまぜる義経に、

「もっと大戦さをお考えになっておられるのでござりましょう」

と吉次は言う。

そうして夏が過ぎ、秋から冬へと季節が移った頃、義円の戦死の報と、行家が一敗地に塗れて鎌倉へ戻ってきたことがわかった。

「叔父上」

次兄義円の死と、敗戦の状況を詳しく訊こうとする義経に、

「お慎み下され。これからは行家殿にお近づきになられぬよう」

と佐藤兄弟までが言う。

「何ゆえじゃ。兄上の死と、叔父上の敗戦を詳しく訊くことはこれからの戦術に必要であろう」

「その通りにござりますが、殿が行家殿にお会いなされることは、ここでは得策ではありませぬ」

「そんなに兄上は度量が狭いのか」

「何はともあれ、鎌倉殿の機嫌を損じぬことにござります」

(兄の機嫌を損ずるなと?)

叔父に会おうとすることがそんなに頼朝の機嫌を損ずるのか——。

(二)

新宮行家が卒然、鎌倉を去った。行く先はどうも信濃らしい。

「木曾殿の所では」

「あの義仲殿」

鞍馬から脱出して吉次の商隊に混じって東山道をくるとき、木曾で義仲と出会った。あのとき義仲が従兄弟だということがわかったが、その胸に飛びついて名を明かすことさえ出来なかった。かれこれ七年前である。

「木曾殿は以仁王の令旨によって、昨年起たれました」

以来、信濃はこれに応じ、治承四年(一一八〇)、亡父義賢の根拠地、上野多胡庄に入った。

そして翌年、横田河原の戦いで信濃を掌握、更に越後も征圧して北陸へ南下する勢いである。

（叔父上が木曾へ発たれるのも当然じゃ）

自分も木曾へ走りたいくらいだ。それにしても頼朝は木曾の動きをどう見ているのだろうか。

源家の棟梁は嫡流たる頼朝であり、庶流の義仲がたとえ信濃や越後で暴れようと、いずれ頼朝の足下に礼を取ってくるだろう。

そのためには威嚇する必要があるとして、鎌倉軍を信濃へ繰り出した。すると義仲はおとなしく長子義高十一歳を人質として差し出してきた。

ということは、義仲も頼朝の幕下に在る源家だという姿勢を見せたのである。

（そういうことか……）

あの義仲にしても、その道をとらざるを得なかったのだ。自分にはまだ嗣子はないが、嗣子まで頼朝に入質させねばならない武家の掟を知らされた。

寿永二年（一一八三）五月、越中礪波山で義仲軍は平教盛率いる数万騎と激突、倶利伽羅峠の夜襲で平家軍を壊滅させた。

そして七月、余勢を駆って北陸路を南下、京に迫った。行家もまた別働隊として

宇治道から伏見を経て京に入った。

（兄上の心中やいかに）

嗣子義高を入質させたとはいえ、義仲が平家の大軍を制して京に入ったということは、まさに本丸の先取りである。

頼朝はじめ重臣たちの会議が日夜持たれた。そこで何がどう話し合われているかは義経の耳には入らない。

ただ洩れ聞こえてくるところによると、畿内は大変な凶作だという。そんな京に入ったところで、まず食糧に困窮することが見えている。

となるとどういうことが起こるか――まず高家から民家への略奪が行われるだろう。それに、山猿にも等しい彼等が、都の美しさと贅に胆を潰して、戦さどころではないだろうという予見もある。

そういう話を聞けば、いちいち尤もである。自分はこれまで弓矢の技しか考えなかったが、戦さとは集団戦であり、数が多くなればなるほど食糧や兵站の知識がなければならない。

のみか、山国や地方に育った兵が、町や、都に入ったとき、どんな驚異を覚えるか。そこで人間がどう変わるかなどということを、これまで考えたこともなかった。

（兄上は武将というより、政（まつりごと）の人物）

案の定、京での義仲軍の狼藉（ろうぜき）が伝えられてきた。既に平家軍は幼帝を戴いて西海に走り、洛中は義仲軍の横行思いのままという。

白昼、路上のあちこちで引き倒された女たちが、衣を剝がれ、兵たちの獣欲の餌食となる。そして次は高家や商家への狼藉である。厨（くりや）に入って腹を満たすと、次は高価な衣や小調度を略奪する。古今、これほど無惨で卑しい占領軍はかつてなかったという。

義仲に、そんな無法を鎮制する力がないのがおかしい。それほど義仲軍は飢えていたのか、それとも「山猿」といわれるほど無規律な田舎侍でしかなかったのか。

（あの義仲殿が）

木曾谷で出会った義仲には、そんな卑しさは微塵もなかった。精悍な顔には、人間的な温情さえ湛（たた）えていた。

いつかは必ず再会したいと願った人物である。それも志を同じくする源氏の血族として、晴れて顔を合わせ、上洛の連携をとりたいと希（ねが）ったものだ。

それが最低の情況を伝えてくるとなると、義仲に見えることができなくなった。

（自分に義仲討ちの命令などなければよいが……）

するとある日、頼朝から呼ばれた。当然義仲攻めに京へ上れの指令だと覚悟した。しかし、それなら土肥実平辺りが伝えてくるはずだ。

（なにか面倒なことでも起きたか）

部屋に通ると上段に珍しく頼朝と政子が座していた。

近々と政子を見るのは初めてだ。濃い眉に強い眼差し。噂には聞いていたが、男の顔に女の衣装を着けたような――そうした印象だ。

（兄上はこういう女性に惹かれたのか）

最初そう思ったが、北条氏の必要から――とすぐ合点した。辞儀を述べると、

「縁組みじゃ」

といきなり言われた。

「縁組みでござると？」

「そうじゃ。いつまでも曹司のままでおくわけにはいかぬ」

「――――」

「どうじゃ、誰ぞ気に入りの女でもいるか」

頼朝の表情が一寸砕けたが、すぐ元の硬さに戻った。

「ま、たとえ居ったとしてもじゃ、今から申す女を娶（めと）って貰わねばならぬ」

幸か不幸か、このとき義経に想う女はいなかった。平泉に一人、娘を産ませた女はいたが、女も義経の境遇を知ってか、無理を言うことはなかった。女はそのまま平泉に置いている。

「河越太郎を知っておるな。彼の娘じゃ。器量の程はわからぬが、十六、七と聞いた。太郎の妻はわしの乳母じゃった比企の娘で、今の度生まれたわしの嫡子（後の頼家）の乳母でもある。よってその乳母の娘と縁組みさせたい。異議あるまいな」

有無を言わさぬ口ぶりだ。つまり政略結婚である。

「義経殿のためによかろうと思うてじゃ」

政子が口を添えた。

「はっ、承知いたしました」

「そうか。そなたも全く身寄りがない。よって、こちらへきたからは、関東の有力御家人の縁者とならねばのう。そなたの先行きのためばかりではない。わしのためにも必要じゃ」

通称、太郎こと重頼は、坂東八平氏、秩父氏の一族で武蔵国河越荘の住人である。

治承四年（一一八〇）頼朝の挙兵の時は平氏方に属し敵対したが、その後、頼朝に従い信頼を得ている。

武家の縁組みはこうして己が郎党を作るためのものでもある。

「挙式は直ぐというわけではないが、婚約だけは双方、確と守らねばならぬ」

「心得ております。して、私の出征はいつ頃？」

と話の先を変えた。すると頼朝の目が急に険しくなった。そして、

「そなた、平泉と連絡などしておらぬか」

と意外なことを言い出した。

「いえ、平泉はいわば私にとっての仮の宿。私は源氏にござりまする」

「ならば言うが、平泉の秀衡殿が、義仲と謀って鎌倉を攻めるという注進が入った。どういうことじゃ」

頼朝の目が探りを入れてきた。

「わかりませぬ」

「わからぬでは済むまい」

「そうとも、お答えなされ」

政子まで執拗だ。

いきなりなことで、義経は思案にあまった。

「木曾殿が兄上に叛くとは考えられませぬ。その証に嫡男義高殿を質とされました。それに、平泉とて何をもって鎌倉まで兵を遣わすことがありましょう。平泉は

北の都、何も今更、兵に辛い思いをさせて関東へ下ることがありましょうや。それに、京へ攻め上る理由など全くござりませぬ」

「そう思うか」

「はい。お館様はもう高齢、そんなことを考えるお人ではありませぬ」

「したが秀衡にその気がなくとも、息子たちがおるではないか」

「お館様がおられるうちは、子息たちも動けませぬ」

「よく存じておるな」

「六年もおりましたゆえ」

「居心地はどうであった」

そんなことを今頃になってどうして訊くのか——。

「それよりいつ頃京への進発をお命じ下さりまするか」

義経は話題を元へ戻した。

「もう少し先になろう。これは内緒じゃが、実は（後白河）法皇様と密計をとっている」

「法皇様と密計を⁉」

「声が大きいぞ。法皇様も木曾勢には困却されておられる。よっぽど平家の方がよかったとな。そうなったからは、源氏の面目にかけて源氏が源氏を討たねばならぬ。そうであろう」

またしても源氏が源氏を討つと言う。義経にとっての源氏は、血族であり同胞である。ゆえに、仮初にも討ち、討たれるという論理はない。

ところが頼朝は、源氏の棟梁たるべく、源氏すらも統制しなければならぬという姿勢である。

わからないわけではないが、息子まで質に差し出している義仲を、「討つ」ということばだけは聞きたくない。

(三)

寿永二年（一一八三）十二月、頼朝から庶兄の範頼と共に義仲追討を命ぜられた。

追討の理由は、後白河法皇からの密命である。即ち、義仲軍の狼藉、次に義仲が備中で大敗したため平家軍が挽回してくる様相となってきたこと等で、法皇は義仲に京退去を命じた。

すると腹を立てた義仲が、十一月十九日、法皇の住まい、法住寺殿を襲って火をつけ、法皇を監禁するという挙に出た。

かくなる上はと、頼朝は、遂に範頼・義経を名代として京へ上らせ、義仲討伐を

命じた。

大将軍の範頼軍三千、つづいて副将格の義経軍一千が、鶴岡八幡宮から堂々の行進である。

そうした軍列を見送る沿道の市民は、二軍目の将義経の勇姿に目を奪われ息をのんだ。つややかな栗毛の馬に跨った義経は、金色鍬形の兜をつけ、紺錦地の大袖に鮮やかな赤糸縅の大鎧をつけている。

「おーっ、見事じゃ」

「まあ、なんと美しい」

男も女も義経の騎馬姿に見惚れる。こうして人々の喚声を浴びながら鎌倉を離れた。

尾張の熱田で範頼と分かれ、伊勢から近江路をとったのは、いわば鎌倉源氏軍の宣揚である。そして紫香楽へ出てきたとき、後ろから別の騎馬隊の追いかけてくる馬蹄を聞いた。

「何者じゃ？」

吉次や佐藤兄弟、源有綱らは怪しんで後方を振り返った。すると、

「殿。源氏の殿――」

と呼びかけてくるところをみると義仲軍ではなさそうだ。そして追いつくと頭目らしい男が、

「お覚えござろうか」

と妙に懐かしそうな声をかけてきた。

「はて、どなたであったか？」

義経は首を傾げた。

「この顔でござるが」

男は兜を脱いだが覚えがない。

「さりとは残念。では申そう。今から九年前になろうか。殿が鞍馬から奥州へ下られしとき、近江の『鏡の宿』に泊まられたことがござった。その夜のことでござるよ」

「――」

「あのとき何がござった」

「アアッ！」

義経は喉の奥で声をあげた。

「するとそちはもしかして、あのときの盗賊――」

見ればその顔に覚えがあった。

「もしかしておぬしは、伊勢ノ三郎とは言わなかったか」
「よう覚えていて下された。その通り、わしは伊勢ノ三郎義盛にござる。今は『野盗の伊勢ノ三郎』などと言われておるが、これでも元は伊勢国司の裔でござる」
「そうか、したが何用で参った」
「たかが十数人ではござるが、殿の郎党にお加え願いたいと」
「本気か、それは」
「九年前に惚れ申した」
「したが、あの牛若が、この源義経ということをよくわかったな」
「それは鎌倉の風聞は、もう京のみか、この辺りまで聞こえております」
「ほう、早いもんじゃなあ」
「そりゃあ武士といえば、平家と源氏しかござりませぬ」
「で、そなたは源氏を選んだというのか」
「私奴のような者は、貴族化した平家には向きませぬ。武士たらんとするなら、やっぱり源氏ではござらぬか。それに殿が今は亡き左馬頭義朝殿の忘形見じゃったということは、あれからすぐわかり申した」
「早耳じゃ、それに敏いのう」
こうして伊勢ノ三郎義盛が途中から郎党に加わった。

行軍中、年が改まり元暦元年（一一八四）となった。すると義仲が「征夷大将軍」になったという報せである。
「征夷大将軍じゃと？　追放ではなかったのか」
御所を焼いた男が将軍とは――朝廷の沙汰ほどいい加減なものはない。しかしこれは多分、義仲の脅しか、それとも法皇の懐柔策かもしれない。
（義仲殿よ、征夷大将軍など捨てられよ）
そういうことが、ますます鎌倉を煽り、源氏が源氏を討つことになるのだ。
頼朝が動かないのもそういうことだ。即ち法皇の二枚舌や魔の手をよく知っているからだ。
（兄上は京を知っている唯一の武家かもしれぬ）

一月二十日、平等院の甍が望見されてきた。宇治である。宇治といえば宇治川を越えねばならない。
橋の近くまでくると、橋板は既に義仲軍によってはずされ、橋桁だけが対岸にかかっている。
一行が佇立し困惑したのは、橋桁だけになっているからではない。その滔々たる水流の勢いにである。関東からこちらにきたとき、幾つもの川を渡った。橋はなく

とも洲から洲へと難なく越せた。しかし、この水の色と速さは容易ではない。既に対岸には義仲軍の矢倉や垣楯（かきだて）、それに白旗がなびいている。

（往（い）けるか）

昨夜来の霙（みぞれ）まじりの雨で、水量も増している。北上川を想い出した。すると、

「拙者が戦陣を承ろう」

高声を発したのは、鎌倉でその名を謳われている梶原源太景季（かげすえ）である。と、もう一人、

「拙者こそ承ろう」

負けずに大声をあげたのは佐々木四郎高綱であった。

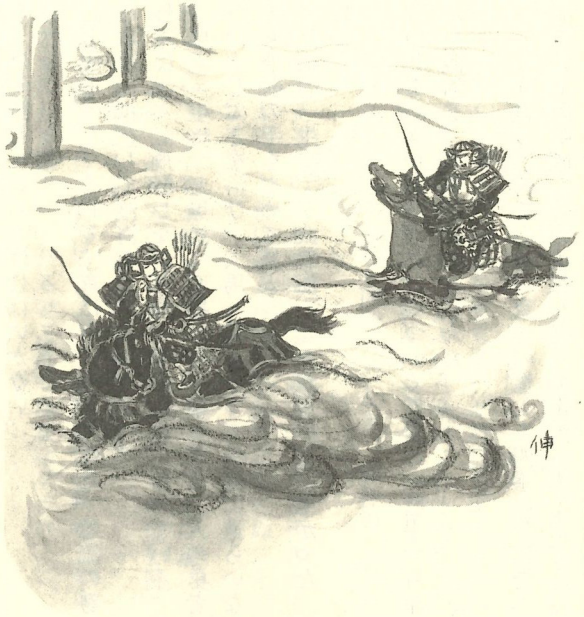
この二人が宇治川の先陣を争おうというのには訳がある。二人は鎌倉を出るとき、頼朝からそれぞれ名馬を拝領した。即ち景季には「磨墨（するすみ）」を、高綱は「生唼（いけずき）」である。二人はこのとき、共に宇治川での先陣を表明した。

「いや、いや。このような川に乗り入れるは蛮勇というもの。人馬もろとも流されては名誉も糞もない」

畠山重忠が引き止めたが、

「いや、渡河の経験は十分じゃ。よって先ず拙者がやり申そう」

と有無をいわさず川に乗り入れた。すると遅れじと高綱も「生唼」の手綱を取っ



た。かくなる上は傍観しているわけにはいかない。

「往くぞ――」

義経は采配を振るった。そして一斉に川に乗り入れた。急流の勢いを、五百騎が固まりながら水流に抵抗して渡河しようというのだ。

対岸の義仲軍は次々と飛射しながらも、その勇猛に驚いている。そして彼我固唾をのむのは、栗毛「生唼」と黒馬「磨墨」の手綱を取る二人の勇者である。

全身雪溶けの水しぶきを浴び、人馬一体となって急流に逆らいながら渡河する二体に、義仲軍も飛射の手をやめて見入った。

そして遂に高綱の「生唼」が武者振いしながら岸辺に上がった。と同時に敵味方から期せずして、

「オーッ」

という賞賛のどよめきがあがった。つづいて景季の「磨墨」も岸に上がり、全員見事に宇治川を渡河し、木曾軍に突っ込んだ。

翌朝は薄雪の舞う厳しい朝である。京への進入を四手に分けた。義経は第四隊の小幡から醍醐を経て阿弥陀ケ峰の東麓を越えて市内へ入る道である。

義経直属の直臣は吉次、源有綱、佐藤兄弟に伊勢ノ三郎義盛、江田源三、熊井太

郎らである。

（義仲殿はどこにいる）

義経の心はこのとき郎党たちの気勢とは裏腹に、複雑に揺れていた。

わが軍は義仲を討ちにきた。心ならずも源氏が源氏を討つという皮肉な戦さである。これに対して、平家が平家を討ったという話はこれまで聞かない。

（それにしても義仲殿はわしを覚えておられようか）

いや、その前にこのわしが、面と向かったとき、義仲殿にわかってもらえようか。

そんなことまで考える。いずれにしても、双方、会えば懐かしく、涙をこぼすのではなかろうか。しかし、これは余人に気取られてはならぬことだ。

その頃義仲は、いよいよ京を捨てる気になっていた。その前に、いっそ法皇を御所から拉致して、北陸へ連れ去ろうとまで考えていた。法皇を楯に、これからは平家と提携して源氏と戦うという、新たな戦略である。

そのために六条御所へ行かねばならない。既に陽は高い。ところが六条へくると、周辺はものものしく御所へ上れるどころではない。

「殿、九郎義経軍が近づいてきております」

「九郎義経じゃと？」
蒲ノ冠者こと範頼の名は知っていたが、義経の名は知らない。
「どういう男じゃ」
「さあ、詳しいことはわかりませぬが、なんでも幼少の折、鞍馬に送られ、十五、六の頃奥州平泉へこっそり脱けたとか」
「奥州平泉じゃと？」
義仲の脳裏から、一つの記憶が蘇った。
十年前であろうか。清げな若者が一人近づいてきた。たしかあの者は子どもの頃、鞍馬に養われ、荷駄隊に混じって、奥州平泉の藤原氏を訪ねていくと言っていた。
（もしやしてあの若者が、九郎殿では）
義仲の体が微かに震えた。
（もし、そうなら）
何たる運命、因果であろう。敵対意識を払拭して、あのときの若者に会ってみたいものだ。
六条河原にくると、皮肉にも鎌倉軍の白旗の波である。明らかにこちらは劣勢である。

（源氏が源氏にやられるか――）
滑稽なほど哀しい運命である。
（あの義経殿はいずこに）
義仲はなおも十年前の旅の若者を捜そうとした。と、そこへ、
「兼平の所へ伝騎をやりまするか」
供から急遽進言された。今井兼平は木曾の養父中原兼遠の息子で、少年時代を共にした義仲側近の忠臣である。
この兼平を、実は範頼軍に備えるべく瀬田に送っていた。それに樋口兼光もまた河内に三百騎を付けて送りこんでいる。ために皮肉にも義仲の手元は現在三十騎足らずでしかなかった。
最後の賭、法皇を拉致して北陸で再起を――と考えたのも今は空しい。かくなるうえは、最後の死場所を探すだけだ。
（最期の華は義経殿との一騎討ち）
互いに名乗り合い、奇しき運命の久闊を述べてから討ち合おうと希いながらも、義仲の馬はそれと裏腹に六条を後にした。それは義仲の無意識の絆、今井兼平を求める疾走だった。

二人は琵琶湖畔で出会った。粟津ケ浜である。陽は傾き、寄せる小波と鳥の声が聞こえる。

「殿――」

「おお、兼平」

相寄った二人は、共に運命の窮みを感じていた。源氏再興、平家征伐は幻想でしかなかった。しかし、空しかったとは言うまい。木曾からここまで、実に苛烈に、熾烈に生きた。命の燃焼があった。

「兼平」

「殿」

二人は互いに引き合い、見合って脇差しを取った。

第九章　鵯越え・一ノ谷

(一)

六条堀川の北を占める広大な屋敷は堀川館である。源氏累代の館といわれるのは、遠い昔、八幡太郎義家が住み、義経の祖父為義や亡父義朝の居館でもあったからだ。

そこへ義経は入った。本来なら頼朝が入るところを、鎌倉から動かぬ頼朝に代わって入ったというわけだ。

（何たることじゃ）

気に入らぬのは義経の軍監目付としてやってきた梶原景時である。景時はかつて頼朝の敵側であった。即ち石橋山挙兵のときのことだが、敗れて逃走する頼朝を、他日のことを慮って助けた。

以来頼朝の恩寵を受け、鎌倉御家人の中で優位に立った。そして今度の義仲征伐に当たり、義経の目付となった。しかし、彼は義経の天衣無縫の無邪気を嫌った。

（思い上がりおって）

兄範頼の存在を弁えもしないで――と口を入れたいところだが、今度の戦さでは確かに義経の方が勝っていた。それに、京が初めての範頼や景時にとって、多少なりとも京に人脈を持つ義経に遠慮するところがある。

その日、堀川館は戦塵を払って酒席の宴を催した。広間一杯の武者である。そうなると話題は武辺話となる。

「こたびの戦さの華は、やっぱり高綱の宇治川の先陣争いであろう。青い水に、栗毛の『生唼』の美しかったこと、高綱の勇姿は絵のようじゃった」

「そうじゃ、まこと美しい」

と皆々口を合わせて佐々木高綱を賛嘆する。

「いやあ」

と照れる高綱の傍らで少々淋しげなのは梶原景季である。それを見てとった義経の、

「絵とは一騎でのうて、二騎によって美しいのじゃ。高綱の後ろに景季あってこその宇治川じゃった」

この一声が更に皆を唸らせた。

（たまには味なことを言うわい）

義経の側で景時は、このときばかりは息子のために義経のことばを汲んだ。

それからは木曾軍の狼藉譚や、しまいには粟津ケ浜の討死の話に及ぶ。

「なんでも馬が深田に脚をとられ、そこへ相模の石田為久の郎党の矢を受け、首を取られるという為体じゃ」

「おお、その通りの為体じゃ。山猿なんてものは所詮そんなもんじゃよ」

途端、

「止めよっ！」

と切り裂くような声があがった。

「ううむ、今の声は誰じゃ。折角の酔いに水を差す奴は」

男たちは酔眼をあげた。

「殿じゃ」

「殿じゃと？」

「こりゃまたなんと無粋なことを。わしらの働きによっていい酒を呑ませて貰っているというのに」

男の宴に戦さ話はつきものだが、それでも義経は義仲を腐す話は聞きたくない。

「木曾殿はわれらと同じ源氏じゃった。よってわれらの目的は平家討ちにあった」
「おお、そう言われればその通りじゃ」
と皆はまた頷き合う。しかし景時は口こそ出さねど喉の奥で反駁する。
（何を若造が――鎌倉殿に逆らう奴は皆敵じゃ。たとえ源氏であろうと）
その通り、頼朝は常陸源氏の佐竹を倒して、更にまた頼朝の旗上げに功のあった鎌倉の要人、上総介広常まで謀殺した。
そんな酷薄なまでの権勢欲にとりつかれている頼朝だが、景時はそういう男でなければ平家を討ち、天下を統べることはできないと思っている。しかし兵たちは、
「そう言われれば木曾討ちはたしかに同士討ちじゃ。するてえと、これからも同士討ちはあるということか。したがそれでは源氏は細るばかりよ」
そういう兵らの声が、義経・景時の耳に入ってくる。二人二様のとり方で二人は盃を取り、肴を口にする。
やがて宴も酣を過ぎると、話はぐっと人間臭くなる。
「なんでも義仲の側に、美しい武者が一人、いつも離れずに付いとったとか」
「ほう。それは衆道（男色）であろう」
男が色めきたつ。
「いや、それが本ものの女じゃったということよ」

「ええっ!?　本ものの女じゃったと！」
皆は一斉に目を剝き合う。
「じゃとすれば、えらい男勝りの女子じゃのう」
「巴という名の女武者じゃった」
「ほう。したがどうしてそんな女武者が」
「敗け戦さを承知で付き従ったとしたら、大した女じゃ」
「よっぽど義仲に惚れとったか、それとも義仲が離さなかったか。これは語り草じゃ」
「したが粟津ケ浜では、女武者らしい屍はなかったぞ」
「するとその前に、因果を含めて解放した」
「なるほど」
「古来、一寸無い話じゃのうそれは。義仲も義仲なれば、女も女じゃ」
「羨ましいではないか」
「わしらにそこまで惚れてくる女はいないからなあ」
「木曾じゃからかもしれんぞ」
「木曾がなんじゃ」
「山国じゃから、人情が濃いんじゃ」

「ワアー、わしゃもう眠いぞ――」
哀憐と賛嘆が酔いと一緒になって、武者たちは酒に酔い、話に酔いつぶれていった。

京にきて、義経が気になっている男が三人いる。一人は鎌田正親であり、もう一人は常陸坊海尊、そして武蔵坊弁慶と名乗った大男である。
「吉次よ、鞍馬の正親はどうしていよう。わしが京に上ってきていることぐらいわかっていように」
「いかにも。一度鞍馬へ行ってみまするか」
そう言って吉次は四年ぶりに行き馴れた鞍馬路を辿った。鞍馬口で馬を繋ぎ、それから僧兵の聚落に足を入れた。見覚えのある路をいくと、質素な僧坊が軒を連ね、相変わらず木刀や薙刀を道で扱き出している。
「正親坊はどこの坊でござろうか」
「正親坊じゃと？」
四十がらみの僧は不審な眼差しをした。
「ご存知ないか」
「拙僧は三年前にきたゆえ、皆の名を確とはまだ存じておらぬゆえ」

と遠慮がちに答えた。それから次の僧を捉えて訊いても首を横に振られる。
（おかしい）
もう数年にもなれば、名も通っているだろうに――そしてどうやら古株らしい坊主を捉えた。
「正親坊はいずれに？」
すると坊主は意外なことを言った。
「正親坊はたしかにここにおった。したが四年ほど前になろうか、ここをこっそり脱けられたわ」
「どうして山を降りられたか、何ぞ思い出されることなどござろうか」
坊主は遠目に何かの記憶を辿ろうとしている。
「ま、確とはわからぬが、そうじゃ以仁王の源氏決起の呼びかけに興奮しておった。ああ、思い出したわ、源三位頼政殿とか言っておったところをみると、源三位殿の所へ行かれたのではなかろうか。正親坊は元源氏の郎党だったというからの」
ありそうなことである。
「以来どうなったか、ここへはいまだ戻ってこられぬ」
「忝い」
そう言って山を降りてきた吉次の心は重かった。

ということは、つまりは頼政の決起に参じ、もしかしたら宇治で果てられたのではなかろうか。でなければ、元鞍馬、そして奥州下りの義経のことはもう都人まで知っているのだ。

あの正親が健在なら、直ぐにも駆けつけてこようものを。今尚消息がわからぬということは――。

堀川館に戻ってそれを告げると、

「早まったぞ、正親」

義経は涙ぐんだ。鞍馬ではとかく除け者の孤独な少年だった。その遮那王に父の名を明かし、剣戟と体技を教え、生きる目標を与えてくれた男だった。

それが姿を現わさないということは、頼政殿と共に果てたということだ。

一番最初に当てにした人物を失ったようだ。次に常陸坊海尊と、もう一人五条大橋で出会った大坊主にも会いたいものだ。

その大坊主こと武蔵坊弁慶がふらりと堀川館に現われた。あの時と同じように、白い袈裟で頭を包んだ黒衣の大坊主である。

「おお、あのときの武蔵坊」

懐かしくさえある。

「よう忘れずにきたな」

「はあ、殿のことは」

「それで黄金の太刀を取りにきたのか」

「いや」

弁慶は手で遮った。

「拙者も主取りをいたしたく」

「主取りなどと――ご坊は僧籍ではないか」

「それがどうも拙者には坊主が相応でないとわかり申した。そこで考えてみたらば、あのとき拙者はその気になっており申した」

「あのとき？」

「つまり五条の橋でお会いしたときでござるよ」

「まさか、ハハハ」

義経は思わず笑った。

「わしはあのとき、すんでのところでそちに殺られるところであったぞ」

「いやいやどうして――手に負えなかったのは拙者の方で」

しかしあのとき、二人は共に運命の糸を感じ合ったようだ。

「それでご坊はわしの郎党になってくれると」

「弁慶一人で足りなければ、叡山や鞍馬から腕に覚えの仲間を幾人でも」

「おお、何と心強いことを言うてくれるものか」

範頼軍三千、義経軍一千とは言うものの、その中で心ある郎党は平泉の連中のみである。それが今や京で弁慶の力を得るということは、三千の味方を得たに等しい。

(二)

比叡の嶺の雪も少しずつ禿げ、庭の梅が綻び始めてきた。

既に鎌倉へは戦勝を報じ、中原親能と共に法皇にも謁見し、直ちに平家追討の院宣を賜るよう奏上した。

中原親能の父は参議藤原光能で、弟大江広元は鎌倉の中枢にあって政権作りの地位にある。そして親能はこのたび、頼朝の代官として義経と共に京へ派遣された人物である。

根っからの坂東武者梶原景時と違い、立ち居振る舞いから京ことばが義経には懐かしく、共に親近感を寄せ合う間柄である。

ところで平家討伐の院宣が直ちに下されるかと思いきや、これで丸二日が無為に終わった。そこで親能に迫って督促すると、意外なことを聞かされた。

「院（法皇）は平家との和睦を思案なされておわします。それに鎌倉殿も」

「なに、和睦じゃと？」

寝耳に水とはこのことだ。今や義仲を倒し、いよいよ平家追討に入らんとするときである。こんなときに、和睦などこちらが口にすることではない。

「兄上の真意は何じゃ！」

思わず己が膝を叩いた。

「鎌倉殿は、木曾を倒し、平家を放逐したらば、京に強力な鎌倉の代官所を設置するというお考えで」

「ということは、京に進出せぬということか」

「はい。鎌倉殿は武家の政権を考えておられます。そのためには京に在っては必ずや朝廷と対立を来すと。ですから鎌倉殿が自ら兵馬を進めることはありませぬ」

（兄上はやはり政治家であったわ）

父や兄の仇など全く頭にないのだ。

「しかし、和睦などおかしいではないか。平家にはそんなつもりは毛頭なかろう。現に西国で力を得た平家がもり返し、福原（神戸市）目ざして近づいてきているというに。

戦さというものは、現地にいる者にこそわかるものじゃ。鎌倉などで、机上の空

論をしている者に何がわかろう。幻想じゃ」

義経は腹が立ってきた。

（父上や兄上は何ゆえ死んだ）

「保元・平治ノ乱」がそれを証（あか）しているではないか。

兄上は動かずともよかろう。しかし、平家は必ず戻ってくる。その平家を討たずしてどうして鎌倉政権など打ち立てられよう。

「わしはのう」

義経の声が少し震えた。

「わしは兄上が懐かしくて鎌倉にやってきた。そして共に父や兄上の仇を討ちたいと思っていた。しかし、兄上にその気がなく、それにわしが鎌倉にいることも疎（うと）まれるなら、わしはわしの心情で生きるしかない。こんなことは他人に言うべきことではないかもしれぬ。ま、未熟者の呟（つぶや）きとお忘れ下され」

「義経殿のご心情、私にはよく解ります。したが、決して余人にはお洩らしなく」

「承知している」

気がついたら四辺は薄暗くなっていた。寒気も床下や戸から這い上ってくる。

「人を呼びまするか」

親能が立とうとすると、

「いや、その前にもう一つお訊きせねばならぬことがあった」

「と申されますると？」

「院のご真意じゃ」

「院の？」

「和睦のご真意じゃ」

「実はまことに畏れ多きことながら、神璽（じんぎ）（三種の神器）は禁中になく、平家の許にあります」

平家は西国に逃れるとき、安徳天皇と共に神璽を奉持していったのである。

「それを取り戻すためには、平家を京へ戻さねばなりませぬ。和睦はそのための手だて」

「なるほど」

わからぬではない。しかし、平家とてそれくらいのことはわかりきっていよう。となれば、福原辺りで長いこと焦（じ）らすのではなかろうか。

「そのような見え透いた和睦などあり得ようはずがないわ。そんなことを考えるのは、戦さを知らぬ者の戯言（たわごと）じゃ。灯（あかり）じゃ、灯を持て」

義経は不機嫌に手を叩いた。

「ハ、ハア」

と近侍が慌てて走り去ると、入れかわるようにして廊下から声があった。
「只今鎌倉からの伝騎にござりまする」
「おお、鎌倉からとな。さてはいよいよか」
待っていたとばかりに膝を立てようとした。
「川口三郎定高にござりまする」
戸の外で若い声が聞こえた。
「入れ」
命ずると、頭から白い埃をかむった男が手をついていた。
「大儀じゃ。して鎌倉殿からか」
「はっ」
いよいよ進発せよと言ってきたのであろう。
「書状か、それとも口上か」
「口上にござりまする」
「うむ。何とじゃ」
「はっ、河越太郎重頼殿の息女佐登殿、この月の終わり頃、こちらに参着なされます。よって祝言のこと、よしなにとのことでござりまする」
「何、祝言じゃと？」

「はっ」
「いい加減な戯れを言うな！　平家追討の命令であろうが」
「いや、私が承ってきたのはその事のみにござりまする」
「殿、次の使者が参るやもしれませぬ」
親能の声が入らなかったら、もう少しで使者を怒鳴るところであった。
「こんなときに兄上は一体何を考えておられるのじゃ。現地のことを知らぬ者は、いい加減なことを言い寄越す」
義経は声を荒げた。
「わしはな、兄上の縁組みにも乗り気ではないのじゃ。それに今から西国へ発たねばならぬときではないか。河越の姫など相手にしているときではない」
「殿」
親能がそっと近づいた。
「和睦の前哨やもしれませぬよ」
「まさか！」
逸る義経を釘付けにするための策ではないか。
「親能殿、明日、早々にもう一度院に上がって、追討の院宣を請うてきて下され。和睦どころか、平家の東上侮り難しと。今度は院に焼き打ちをかけましょうと脅す

のでござる」

義経は興奮している。いや、腹がおさまらない。こちらが命を張って平家追討を考えているとき、心にも染まぬ女をさし向けてくる兄の魂胆にである。その怒りが弁慶に向けられた。

「弁慶よ、わしは明日とはいわぬ。今からでも発ちたいくらいじゃ。たとえ院宣が出ぬとも、征かねばならぬ」

「なぜそのように急かれまするか」

急遽呼び出された弁慶は、義経のただならぬ興奮に少々驚いた。

「院や鎌倉は平家の動きをわかっておらぬ。それに思うてもみよ。義仲軍が崩れたのは京におったからじゃ。そりゃ京は荒れたりとはいえ、都じゃ。よって、木曾のみか、われらの兵も坂東の田舎武者なれば、時間がたてばなにを仕出かすかわからぬ」

「いかにも」

「それに物見によると急がねばならぬ」

平家は義仲に追われて都落ちし、備前児島から九州に入ったが、その後、長門から讃岐の屋島に根拠地を置き、瀬戸内海の制海権を握った。

そして今や、京を奪回すべく、前線基地を摂津の福原まで進めてきている。

福原の拠点とは、清盛の築いた大輪田泊にある経ケ島城（一ノ谷城）である。ともかく東は生田ノ森から須磨にかけて東西三里、そこに三、四万の平家軍が集結している。

そして海には淡路から四国までつづく数百艘の軍船を浮かべているというのである。

「ともかく敵は海陸あわせて三万。それに対してこちらはその一割。そこをいかにして衝くかじゃが、われらは船を持たぬ。よって、まず経ケ島の本陣を殲滅することじゃ。そのための策を考えねば」

「なるほど」

身丈こそ小さいが、義経の頭には天才的な戦さの閃きがあると弁慶は思った。

「そこでじゃ」

と義経は机上から紙と筆を取りながら、

「詳しいことはわからぬが、ここが生田川、そしてここが湊川、その間が福原じゃ。そして本陣は経ケ島の一ノ谷城。ここに大将宗盛がおる。陸上二万、そこを三千の源氏がいかに攻撃するかじゃ」

と地図を広げて指し示した。

「はあ」
「おぬしはかつて書写山におったのじゃから、その辺の地理にも明るかろう。そこで経ケ島へ出る間道を探るのじゃ」
「丹波路でござりまするな」
「本隊（範頼軍）も平家も、海岸道を東西から進撃しよう。したがわしは、丹波の山中から真南へ向かって奇襲をやろうと考えている」
「ほう、それはまさに意表を衝くもの――して兵の数は」
「千」
「そんな少数で」
「三百ずつに分けて出よう。山路をだらだらと往くは目につく」
そこへあたふたと取り次ぎがやってきた。
「中原殿がお見えで」
現われた親能の顔は上気し、気色ばんでいる。
「何かありましたか？」
「殿、遂に出ましたぞ。院宣が――」
「おお、出たか。いよいよじゃ」
急ぎ軍議が持たれ、軍監梶原景時が範頼に鞍替えし、かわって土肥実平が義経軍に付くことになった。
本隊の範頼軍が海岸の西国街道を西進するのに対して、義経軍がどの経路をとるか、この時点では明らかにしなかった。
いずれにしても、福原の一ノ谷城を攻略する日時が決まった。二月七日の早朝である。

(三)

元暦元年（一一八四）二月四日、暁闇の桂川を渡る。人馬とも白い息を吐きながら黙々と「老ノ坂」を目ざす。
先導は西国の地理事情に明るい伊勢ノ三郎と弁慶。ほかは平泉からの郎党と選りすぐりの騎馬武者たちである。
それに既に先発しているのは多田蔵人行綱、行綱は摂津源氏の頭目で、京に住む源氏である。ために時勢の利害に敏いところがあるが、平家が西国に逃れた今、平家討伐の義経軍に参加してきたというわけだ。
それから軍監土肥実平、実平は七百騎を率いて真夜中に京を発った。
こうして義経軍はいわば搦手の丹波路をいく山間部隊だけに、三段に分けて出発

したというわけだ。

老ノ坂から丹波亀山へ入る。それから保津川沿いに北上、途中から篠山川（ささやま）に沿って篠山を目ざす。その間、十六里、飲まず休まずの黒疾風（つむじ）である。

そしてようやく篠山で、実平、行綱らと合流した。

「速うござりまするなあ、殿」

実平も行綱も驚いた。

「そりゃ駆け通しじゃからなあ、水もとらず休みもせず。で、途中、まかり（伏兵）らしき者に出会わなかったか」

「いや、そのような者は」

それから一行は更に進み、丹波高原の西端にあたる小野原まで進んだ。京からの里程十九里である。

陽は山に落ち、あたりは薄闇に包まれてきた。それに吹きおりる風も一段と冷えてきた。

「殿、人馬を休めねば」

「ここから一ノ谷まではまだ二十里近くござりまするぞ」

ともかく寺院の境内を借り、庫裡（くり）をも借りて夕餉（ゆうげ）の支度にかかった。

それから一時（いっとき）ほどすると、物見の小平（こへい）が戻ってきた。

「殿、この先三里ばかり向こうに、平家軍二千騎ばかりが宿営しておりまする」

「何じゃと、平家がこんな山中にきているとな」

背筋が凍った。

「ということは、われらの動きを既に知っておったということじゃな」

「あるいは……」

「して宿営地はいずれじゃ」

「三草山の麓、三草村一帯の民家に分宿している様子にござりまする」

「よう探ってくれた。大儀じゃった」

かくなる上は、ここに安閑と宿営などしてはいられなくなった。

「実平、いかがする」

軍監としての采配を訊いた。実平としては、休養を優先させたいところだが、義経の意図が手に取るようにわかる。

「殿のお心のままに」

「敵はまさかわしらがここまできていようとは思うまい」

「多分」

「なれば今宵敵に油断はあるはずじゃ」

「たしかに」

「千載一遇、襲撃しかあるまい」

この疲れを知らぬ二十六歳の天才的閃きである。

腹を満たし、暫しの休息だけでこの若い集団は立ち上がった。そして、

「これから夜襲を行う」

という義経の下知が一千の騎兵を興奮させた。

それにしても闇夜の山路は松明の灯をもってしても視界が狭過ぎる。それに天に月はない。

やがて川があり、そこを渡ると登り坂である。登った所が「三草三里」といわれる高原である。遮る樹林はなく、昼なら一望できる所であろう。

一里ばかりいくと、眼下に人家らしき灯がポツポツと見えてきた。

「見えてきたぞーッ」

伊勢ノ三郎の声が聞こえた。やがて下り坂になってくると、暗い視野の中に人家の灯らしいものが入ってきた。前方は摂津平野であろう。

「殿、一足先に見て参りまする」

三郎が飛び出していった。つづいて弁慶、いずれも野盗上がりや僧兵くずれはこういうとき眼先と蛮勇を発揮する。

高原を下りてくると、急に天空の星の数がふえてきた。暫くすると二人がもどってきた。

「たしかにこの下の村一帯に分宿しております」

「白川夜舟でござります」

「そうか、では直ちにその白川夜舟を討とう」

そこで雪崩のように三草村に入った義経軍は、まず草屋根という屋根に火をかけ、戸を蹴破って乱入した。

物音に驚いて目覚めた村人や平家軍は、一瞬、地震か山津波かと思ったようだ。ところが入ってきたのは白刃をかざした男の群である。

「何者じゃあ！」

「どこの夜盗じゃ」

「おお、われらは歴とした源氏軍ぞ。平家軍を蹴散らしてくれるワ」

松明の火の下で首が飛び、鮮血がザザッと音をたてて走る。周章狼狽、恐慌をきたした平家軍は、寝着のまま裸足で逃げる者あり、応戦する者ありで阿鼻叫喚が村に谺した。それもやがて燃えさかる炎の波に呑み込まれていった。大した時間はかからなかった。何しろ敵は抵抗するどころか、逃げの一手だった。

「殿、お見事でござる」

実平や重忠、行綱らが感嘆の声をあげる。小野原であのまま宿営していたら、緒

戦の戦果どころか、この三草で二千の平家軍に難儀させられるところであった。

この三草で陣を布いていたのは新三位中将資盛（清盛の嫡子、重盛の子）であり、ほかに小松少将有盛、備中守師盛らが従っていたが、いずれもいちはやく逃げ去ったという。

それでも多数の落武者を生け捕り、その夜のうちに椅鹿谷まで歩かせて主だった者を斬り捨てた。そのとき義経は一人の男を見つけ出した。平家軍に混じっていた土地の男で、三十歳代、実直そうで名は管六。

素姓を訊けば、播磨安田庄の下司、多賀管六久利と言う者で、伝来の所領を理由もなく平家の侍、越中前司盛俊に押領され、やむなく三草山の手に加わったという。

「命は預かる。よってわしの命令を聞くか」

「はっ、忝うございまする。してどのような……」

篝火に映るその顔はまだ若い。

「そちもわかっておろうが、われら源氏は平家を討つためにきておる。よって一ノ谷へ出る路を案内せよ。ただしここからではない。明朝三木へ発ってからじゃ。わしの側を離れぬな」

「はっ、したが三木では遠回りにございまするが」

「よいのじゃ」

三木に着いたのは五日の夕刻であった。休息の後、直ちに軍議に入った。軍議早早義経は、なにゆえこんな遠い三木まで行軍してきたかを詰られた。

「ならば言う。目眩ましじゃ」

「目眩ましでござると？」

「敵にわれらが山の手にあることを悟られた。したがわれらの任務が西木戸の攻略にあることを知らしめねばならぬ。そのために三木まで迂回したのじゃ。すれば敵は安心しよう」

「なるほど」

「つまり範頼軍は東の木戸攻め、義経軍は西の木戸と、平家は東西の固めを考えていよう。そこでわしは意表を衝くのじゃ」

「意表を衝くと？」

「東でもなく西でもない真ん中を衝くのじゃ」

それから義経は地図を広げた。

「実平は七百騎をもって明石の海岸へ出られよ。そして海岸沿いに西木戸を攻めるのじゃ。これはわが主力軍。そして七日早朝には一ノ谷へ出ねばならぬ」

「それで意表とは？」
「つまり一ノ谷の背面、真後ろから衝くということじゃが、それはこの管六から聞かせて貰わねばならぬ」
「は、はあ」
と管六は広げられた図面をまじまじと見つめながら指した。
「一ノ谷城の山の手を窺う道は幾つかあります。即ち東寄りの上野越え、それから夢野に出る鵯越え、明泉寺谷に出る古道越え、ほか中一里山中にある幾つかの杣道がございまする」
「その中で最も容易な道はどれじゃ」
「古道越えと、中一里山から入る道でございましょう。これは古からの街道で、兵馬も容易でございまする」
「では最も険しい道は？」
「藍那からの鵯越えでございましょう。何しろ馬も人も通れぬ難所がございます」
「ならばその藍那じゃ」
「したがそこは難しゅうございます」
管六は手で遮りながら阻止しようとした。
「よいのじゃ管六。戦さとはそういうものぞ。人の考えぬことをやらねばならぬ。でなければ少数では勝てぬ。意表を衝くとはこのことじゃ」

(四)

三木を出たのは六日の早朝であった。
まず土肥実平七百騎、これは義経軍本隊の陽動作戦でゆっくりと南下し、塩屋を目ざす。
つづいて義経軍数十騎が間合いを置きながら志染川を渡って御坂へと動く。
いずれ多田行綱とは藍那辺りで出会うことになっている。
陽はようやく昇り、樹林の梢が光り出してきた。白い息を吐きながら馬は時々鼻を鳴らす。いずれも栗毛の艶やかな色だ。
三津田・丹生山麓・坂本を過ぎて山田川を渡る。人気のない村道に、ときたま動く人の気配は平家の物見でもあろうか。
午の刻は疾うに過ぎていた。亭々とした杉林が天を圧し、昼なお暗い路である。
すると、杉林越しにバラバラと人家が見えてきた。
「藍那でございまする」
「ほう、ここからじゃな鵯越えは」

「はい。十分に気をつけてゆかねばなりませぬ」
「おーっ、皆の者、ここからが鵯越えじゃ。古来、牛馬の往かぬ路とは言うが、聞けば鹿の通る路なれば、馬の通れぬ筈はない。いざ続かれよ」
「おうっー」
従者の声が谺した。
二月六日とはいえ、深山の残雪は溶けやらず枝に咲き、苔生す岩石も氷を尖らせ蹄を危うくする。
「見よ、下は底知れぬ谷ぞーっ」
「脚をとられるなよ。こんな所で倒れては元も子もない」
全神経を尖らせて馬の脚元を気遣う。耳元に聞こえるのは風の音と蹄の音のみである。暫くいくと、やや平坦な所に出た。と、前方から武者が現われた。
「すわっ！」
刀を抜こうとすると、
「お待ちしておりましたぞ御大将」
見れば行綱、岡崎四郎らである。
「おお、よう来た。して兵に損失はなかったか」
「ござりませぬ。われらとて命がけじゃ」

そこで一服することになった。
「ここまでくると、さすがに敵のまかりはおりませぬ」
「それでは」
と義経は図面を広げた。
「わしはここ高尾山から印南野（平家の山の手の陣）を衝く。そこで行綱殿はこの蛙岩から白川へと迂回し、西木戸攻めじゃ。四郎は高取山麓から刈藻川を目ざしてこれまた一気に西木戸へ」
「殿と一緒にというわけには参りませぬか」
岡崎四郎が言った。
「前にも言ったように、これはあくまでも目眩まし戦法じゃ。ここがいかに険難な所とはいえ、一ノ谷のいわば頭上じゃ。そんな所に多勢いては平家の目につく。よって分散し、山の手の陣へのいわば陽動作戦なのじゃ」
「そう言われては詮なし。承知いたしました」
と行綱軍と岡崎軍は動きだした。
陽は早、深山に隠れ、山巓から降りる風が体を刺してきた。足許を気遣い松明を掲げる。黙々といくと、月は中天に上がり、高尾山に着いたようだ。
一行は焚火を焚いて暫し休息をとることにした。何しろ連夜の行軍で疲れてい

る。火の前でしどけなく眠りに落ちる者もいる。義経もいくばくか仮眠をとった。そして目覚めると管六を急かせて展望のきく山頂に登った。

すると遥か眼下に、天の川を見るような火の帯の明滅しているのが視界に入ってきた。のみか、更に火は恰も燎原の火の如く遠く彼方まで広がっているではないか。

「あれは平家軍の火であろう」

「はっ、手前に弓なりになって続いているのが一ノ谷城を守る福原の篝火にござりましょう。そして遠く彼方まで広がっているのは軍船の火――」

「ほう軍船の火か」

初め、海に沿って弓なりにつづく火を見たとき、父や兄の仇を忘れるほど美しいとさえ思った。しかし、彼方まで広がる軍船の火を見ると、それは恐怖に変わった。

今、平家と源氏は逆転しているが、源氏にないのは軍船である。たとえ一ノ谷を制しても、あの海原に広がる軍船を討つ手だては源氏にはない。となれば、まず一ノ谷の平家を徹底殲滅して、あの船を奪わねばならぬ。

そのためには、眼下にある印南野の陣を襲撃することだ。印南野とは湊川の川岸にある館で、かつて平大納言時忠の館のあった所である。

そこを今、一ノ谷の主陣として守るのは平教経である。教経は教盛の次男（清盛の甥）で平家随一の猛将と謳われ、印南野の陣の守将に選ばれたのもそのためである。

その印南野からは、古道越えの守備についている盛俊七百騎、印南野の西岡に弟業盛五百騎、上野越え備えの兄通盛五百騎が全て見渡せる。そして印南野に千余騎を配備した教経は、山の手からの攻撃にも満を持していた。

その最たる理由は、平家の陣容に自信があるということと、後背にある十丈（約三十メートル）にも及ぶ二段の断崖からは絶対人馬が降りられぬという確信があったからだ。

それを眼下に見下ろす所に今、義経は立っている。――鹿の通る路なら馬の通れぬはずはない――と思うものの、一段目の坂はどうにか下りられても、その下はまさに垂直落下の断崖である。

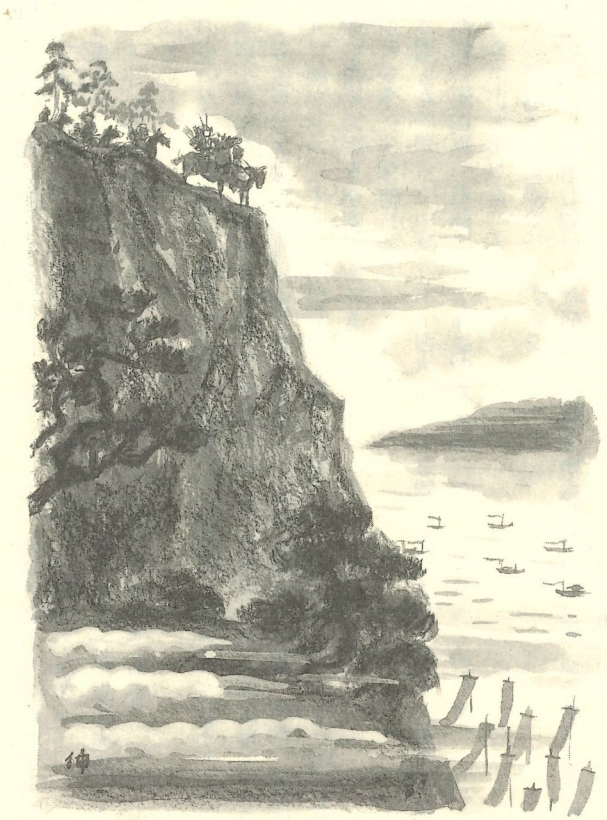
（やはり無理か……）

多くの兵や駿馬をむざむざ奈落の底に突き落とすことはない。

やがて東の空が紅らみはじめ、黒い闇が次第に紫色に変じてきた。その中で煌めく火はいよいよ光を増してきた。

すると遠くの方からウォーッという喚声が聞こえてきた。それは多分、東木戸か

西木戸辺りで、範頼軍と土肥軍が平家軍と激突したのであろう。
喚声はなおもつづいている。その喚声から思うに、どうも源氏軍の劣勢を告げられているような気がする。
そのとき脳裏に、あのときの光景が浮かんできた。
「継信・忠信、あの崖もこうではなかったか」
あの崖とは、義経たちがよく駆けた奥州の栗駒山や焼石岳での崖下りである。
（初めてではない。何度もやってきたではないか）
奥州の馬の健脚と手綱捌きに見惚れ、何度か試みたものだった。すると継信が声を弾ませながら言った。
「殿、こちらに水流の跡がござりまする。ここをいけば何とかなりましょう」
なるほど見れば四尺余の細流の跡が下へつづいている。
「よし、天恵じゃ、ここを伝おう」
「行くぞ、わしにつづけえ！」
手綱を引き、足踏みを蹴った。馬は上体を起こしながらゆっくりと細流の跡を辿りだした。
（焦ることはない。人馬の命がかかっている）
義経は慎重に手綱を捌きながら脚下を見る。間を置いて後ろから馬がつづく。



断崖の中ほどが崖庇になって平たくなっている。細流の跡も馬の蹄で次第に砕け広がってきたようだ。目下のところ人馬が転げ落ちてくる様子はない。

空は東雲を払い、明るくなってきた。その下に、はっきりと平家の赤旗がぎっしりと一ノ谷の山の手を埋めているのがわかった。印南野の陣である。

「続けえッ！」

勢いづいた義経軍は、ここを先途と印南野の陣へ突撃した。

東木戸や西木戸では平家軍優勢という報告に、平教経は悠然と館へ戻ってきた。ここから望見しても、赤旗は押し気味であり、白旗は滞っている。

床几に腰をおろして茶を所望していると、後方から俄に轟音とともに館が揺れ、数十頭もの馬の嘶きが聞こえてきた。

「山崩れか？　一体何じゃ」

いう間もなく、

「お館様、源氏軍の急襲にござりまする」

という声があがった。

「すわ、鵯越えの軍か⁉」

鉄壁の防備を確信していた教経は、鵯越えから逆落としにやってきたことが信じられなかった。しかし、あの轟音と馬の嘶きから、この印南野が奇襲されたことがわかった。

外へ出ると、天から降ってきたような源氏の人馬が目の前に迫っていた。義経に対する恐れに全身の震えがとまらない。

「引けえっー、引けえっー」

印南野の平家軍は旗を巻き、裸馬の尻を叩いて海の方に逃げ散った。

この主力軍の潰走が、東木戸や西木戸での戦闘に影響を与え、源氏軍の決定的勝利へとつながっていった。

「殿、お見事でござりまする」

この戦さで討ち取られた平家の将領は、平通盛、忠度、知章、業盛、経俊、盛俊、師盛、経正。生けどられたのは平重衡である。

ほか千余人が屍を晒し、他はことごとく海上へ逃れた。総大将宗盛もその一人であった。

第十章　堀川館（やかた）

(一)

京はまだ底冷えしている。それでも御所辺りの桜は綻（ほころ）びかけているようだ。

二月九日義経は、華々しく凱旋してからというもの、関東の河越から入輿してきた新妻佐登（さと）の部屋に入り浸りである。

兄頼朝の差金による婚姻に気は進まなかったが、正室としてやってきた佐登を追い返すような義経ではない。直ちに祝言をあげ、奥の棟に入った佐登に、毎夜のように足を運ぶ。

六歳年下の二十歳（はたち）になったばかりの佐登は、いわゆる美人というわけではないが、丸顔の愛らしい目の女である。可もなく不可もないが、強いて言えば東国訛（なま）りが気になるというところぐらいだろうか。

それに対して佐登は、頼朝の実弟であり、このたびの「一ノ谷合戦」での武勲第一の義経に心を躍らせている。

「一ノ谷の合戦のことを、もっと詳しくお話し下さりませ」

戦さのことを聞きたがる佐登を珍しいと思う。それは多分関東の武家の娘だからであろう。

「したが殿、木曾殿には女子（おなご）の兵が付いてきていたとか」

「女子というても木曾殿の奥方じゃった。したがあれから、どうなされたであろうなあ」

感慨深げな眼差しの義経に、

「わたくしも付いて参りましょうか」

と言って驚かせる。

「ならぬ。巴（ともえ）殿は格別の女（おひと）じゃ。大体女子は戦場にいくものではない。酷いものなのじゃ」

その話は一度きりで終わったが、それからも佐登はよく戦さの話を聞きたがった。

ところで義経や側近たちが心待ちにしているのは鎌倉からの沙汰である。「一ノ谷合戦」大勝利の道を開いた義経に対する国司の任官はなく、範頼（のりより）は三河に、景時（かげとき）

は播磨・美作。土肥実平を備前・備中・備後の守護に奏請したという。
（兄上は何ゆえわしを）
一ノ谷奇襲の妬みでもあろうか。
伊豆での旗上げ以来、頼朝は必ずしも戦さ巧者とはいえない。それどころか、常陸源氏の佐竹氏や有力な後援者であった千葉氏までも謀殺してしまった。
（したがわしは弟）
その弟が斥けられるとは思いたくない。まして一ノ谷第一の功労者なのだ。
「梶原景時のざん言やもしれませぬ。景時はとかく殿を悪しく思っているふしがございまする」
「うーむ」
それも否定できない。しかし、戦功は明らかなのだ。それに対する行賞は公正でなければならぬ。それを歪めているものは？
義経はまだ頼朝を人が言うほど疑ってはいない。そうした鬱積もあって、それを紛らすのは妻の体である。
佐登の裸体を貪り、時には狂おしいばかりに、日夜欲情の海に溺れる。佐登はそれを義経の愛と信じ、裸身の全てを情欲の海にまかせる。
「わたしは義経さまなしにはいられぬ」

と河越から付いてきている乳母のこよや侍女頭の美津に惚ける。乳母はよいとしても、美津はまだ男知らずの女なのだ。それに彼女は佐登を通して、義経の言動の一部始終を重頼に報ずる役目を担っている。それは、重頼から直ちに頼朝に通ずるというものだ。
ゆえに美津は、何かと佐登に義経の戦さのことから郎党たちのことを訊きたがる。初めのうちは佐登も戦さ話に興味があったが、この頃は、義経との閨の話に変わった。
「初めは怖かったけれど、今はもう……。それに、わたしを天女の肌じゃなどと……」
戦さの話どころではない。そうなると郎党たちの中から訊き出さねばならない。
はや新緑が戦ぎ、賀茂や桂川で遊ぶ童らの声が聞こえている。
と、その日、郎党の一人が一通の文を弁慶に渡した。
「どこで手に入れた？」
「逢坂山で」
男は伊勢ノ三郎の配下だが、三郎が大騒ぎするのを避けて、敢えて弁慶に渡したようだ。

開いてみると女文字で書かれている。内容は、義経の言動と、側近たちの動きである。宛名は河越太郎重頼、つまり佐登の父である。

娘が父に夫の動静を書き送るなら、佐登の筆跡でなければならない。ところが佐登の筆跡ではない。それに読み下していくと、義経の心中にまで踏み込んだ内容である。

即ち、範頼・景時・実平らの行賞に対して、義経が不満、怨みを持っていること。そこで院への接近ということまで書かれている。こんな文が、重頼から頼朝に届こうものなら一大事である。

「よく追尾したな。して男じゃったか女じゃったか」

「男にござる」

「したがよく睨んだものじゃな」

「これで三度、あの男が鎌倉へ行くのを見てござる。その折、必ず侍女の美津が門まで送って出るのを見ましたが、聞くところによると、美津が郎党たちからいろいろ訊き出していたようで、前から怪しいと睨んでおりました。で、美津をどのように――」

「それは殿の差配じゃ」

この一件で義経の中から潮が引くように佐登への興味と愛が醒めていった。そうなると、奥への渡りも少しずつ日を置き、距離をとるようになった。

（所詮は兄上から遣わされた女）

そう思えば今更腹の立つことではない。それより、気がつかなかったことの方がむしろ悔やまれる。これまで頼朝への怨み言や愚痴を、寝物語りに饒舌ったものだ。それが全て鎌倉に筒抜けになっていたと思うと、佐登を怨むより、己が無知を悟るべきだろう。

（今や京に頼るべき仁はない）

寥々たる思いの義経に、

「平泉第をお訪ねになられては」

と勧めてくれるのは吉次である。

京にある平泉第は、吉次の三条屋敷の近くに在る。そこには早田忠雄がいる。

豪壮な平泉第にきてみると、早田忠雄は待っていたとばかりに義経と吉次を笑顔で迎えた。

四十半ばの忠雄は、奥州平泉藤原氏の京代官といったところで、元来京の官人くずれだけに、京ことばは流暢だ。

京、藤原北家の贅を凌ぐような部屋に通された義経は、過ぎし平泉の伽羅御所を

思い出した。

まずは山海の珍味と美酒でもてなされた後、

「実は平泉の御所様から夙に急かれていることがござりまする」

と言われた。

「ほう、何を急かれておる」

義経は上気した顔をあげた。

「殿の任官のことでござりまする」

「わしの任官じゃと⁉」

「鎌倉の仕打ちに腹を立てられた御所様が、御文をもって法皇様に殿の処遇をご奏請なされました」

「あの御所様が！」

義仲を追い、更に危険を賭して「一ノ谷合戦」を勝利に導いても、京市民の歓迎のほかは、何一つ行賞のないままに過ぎてしまった。

それどころか、却ってそれが頼朝の不興を買っていると聞き、やり場のない憤懣と孤愁に苛まれていた毎日であった。

（わしには郎党のほかに、頼るべき人は一人もない）

そういう心情だった。ところがその裏でこっそりと藤原秀衡が動いていてくれたのである。

（父上のようなお方じゃ）

平泉を出奔したときもそうだったが、今もなお義経を案じてくれておられる。その秀衡が、密かに工作してくれていたのだ。涙が出そうだ。

「して院はどのように……」

「鎌倉はおかしいと。そこで義経殿のための官位を考えるとの仰せでござりました」

（まさか――）

そのまさかが実現したのである。

官位は左衛門少尉に任ぜられ、検非違使を命ずる。つまり宮廷守護の長官と、都の警察権を与えるというものだ。

公卿の位ではないが、武家としては高官である。願ってもないことだ。しかし、頼朝の許可なしに受けてよいものかどうか。そこで暫く時間を――といって鎌倉にその裁可を仰いだが、何度手紙を出しても返事はない。

迷う義経に吉次と弁慶は言った。

「殿、迷われまするな。法皇・天子はわが国最高のお方、そのお方よりの宣旨でござれば、何も兵衛佐の鎌倉殿に遠慮なさることなぞござろうか」

この一言で義経の気持ちが決まった。

「そうじゃな。法皇様はこの国の最高のお方」

こうして八月十七日、左衛門少尉・検非違使に任ぜられ、翌九月十八日には更に従五位下に叙せられ大夫尉に進んだ。

検非違使の大夫尉といえば、通称「判官」といわれるもので、以来義経は、「源判官義経」といわれるようになった。

それに従五位下となると昇殿が許される。昇殿とは、御所清涼殿の南廂に昇ることを許されることで、これをもって「殿上人」と言う。つまり歴とした宮廷人の仲間に入ることである。

その日、義経参上の行列は、新調の小八葉の網代車に、付き添う官人は衛府の者三人、供侍として佐藤継信・忠信兄弟はじめ、弁慶、伊勢ノ三郎以下家の子二十人の騎馬姿である。それが都大路を練って白川金剛勝院の法皇御所に向かった。車中、義経はまさに夢心地であった。

(二)

紅葉を落とした大文字や比叡が、落ちついた青い山容をみせている。

近づく冬の冷気を感じさせてきたとはいえ、ここ堀川館の内からは、鼓や笛の合間に銅鑼、そして女の流行歌謡が嫋嫋と聞こえてくる。

義経の任官、そして昇殿を祝う酒宴が張られているのだ。

今流行の白拍子をということで、数人の舞姫が館に招ばれている。母常盤が白拍子だったことから、かねがね白拍子の舞を見たいと思っていたが、京にきても、義仲攻めや平家討伐で、それこそ舞や酒色を娯しむ間もなかった。

そして「一ノ谷合戦」が終わっても、鎌倉の冷たい仕打ちに、鬱々として心楽しむ日がなかった。それがどうやら任官と昇殿を許され、それこそ生まれて初めて心の余裕と舞曲を楽しむ気になった。

白拍子とは、男舞の妓女のことで、女ながら立烏帽子を頭に頂き、白い水干に白鞘巻の太刀を佩いた男装に、緋の袴をつけて舞い、かつ唄うというものだ。

京には何人もの白拍子がいるが、その白拍子を仕切っているのは磯ノ禅師と呼ばれる妓女である。

その磯ノ禅師に渡りをつけて、夕陽が比叡の頂に沈む頃、五人の白拍子が館の門をくぐってきた。

主殿の上段に義経、その下左右に居流れる重臣郎党の前へ、しずしずと五人の白拍子が現われた。一人ずつ、

「梅にござりまする」
「橘にござりまする」
といずれも花の名を妓名としている。そして最後が、
「静にござりまする」
と名乗った。今宵の主役である。しかし、いずれも同じ姿なため、みな一様に見える。器楽の奏者が右手の座に着き、やおら口上を述べると、前列に二人、後列に三人と、一斉に水干の袖を蝶のようにひろげて唄いながら、曲に合わせて舞いはじめた。
黒立烏帽子に白水干、太刀を佩いた男装なれど、緋の袴にしなやかな体の動きと手さばきに、不思議な男女の交錯を覚える。
そして五人はまるで一つの団となって、あるいは固まり、あるいは開き、といった複数の舞の調和を見せる。
うっとりと見惚れて曲が終わると、妓たちは扇をかざしながら下手にひらひらと蝶のように消えた。
「うーむ、いいもんじゃのう」
「やっぱり都じゃ」
重臣たちは口々に唸る。義経も夢心地だ。

「おーい、酒じゃ、酒じゃ」
郎党たちが呼ぶと、下手から館の女たちが現われた。
「白拍子ではないのか」
「はい。あの女たちは今宵の芸客でござりまする」
彼等は、女とみれば、男に侍るものとのみ思っているようだ。
それから二人ずつ一組になっての舞があり、最後に一人舞である。首座の義経の前に膝を折り、
「静にござりまする」
と丁重な礼をした。それからやおら音曲に合わせて舞に入った。女の舞といえば、平泉の伽羅御所で、五ツ衣、袿袴姿の舞を見たことがあったが、緩慢でやけに衣装の重たさが目に残った。
それからみると、この白拍子の舞の爽やかな艶やかさはどうだろう。女の美しさと哀しさ、時には男の凛気さえ感じさせる。
先ほどの複数の動きはどれも一様に見えたが、こうして見る一人の舞姿には魂の発散が感じられる。それと音曲に乗って聞こえる声の、時には朗々と、時にはまた月光の如き哀調がある。ふと懐かしい女人の面影を重ねた。
（母上を見るようじゃ）

あの母に惚れた男が二人いた。源義朝と平清盛。そして母は義朝を選んだ。
しかし、義朝は「平治ノ乱」で清盛に敗れた。
その清盛は、義朝に恋の恨みを抱いてはいなかったか――。
その後、母は藤原長成と再婚し、二人の兄たちは僧門に入った。そして、牛若といわれた自分も鞍馬に入った。
ただ、今に至るも不明なのは、母の再婚の経緯と、自分たち兄弟がどうして生き延びられたかということだ。それをなぜか吉次からも、頼朝からも聞かされてはいない。
気がつくと、目の前に静が座って頭を垂れていた。舞が終わったようだ。
「おお、見事じゃった。そなたの姿に、ついわが母を憶い出しておったわ」
「そうなれば、有難く、嬉しゅうござりまする」
「そうか。ならば明日もまたこられよ」
と義経は照れながら次の舞を約束させた。

これで何回目になろうか。その日、舞が終わってから、義経は特に静を自室に招いた。静は舞装束から袿姿に変えていた。
鬢削ぎの毛が額から頬へかけて垂れ、妖しげな美しさを誘っている。

「静は舞も名も美しい。どうじゃ一杯付き合わぬか」
義経は盃を渡したが、静は軽く頭を振って遠慮した。
「わしはな、そなたを見ながら、母者を想い出した」
またも同じ台詞を口にした。
「お館様は母上様にお会いなされることが……？」
「いや、一別以来会うたことはない」
「殿方とはそういうものでございましょうか。わたくしなぞ、今もって母と同じ屋根の下に」
「羨ましいことよなあ」
今から十数年前、泣きすがる母の手を振り切って、一条坊門を出てきた義経である。
あれが母との別れである。以来これまで、誰一人として母のことや消息を訊ねてくれる者もなく、訊いたこともなかった。
「静よ、聞かせてくれぬか」
「何をでございましょう」
「母のことじゃ」
「と仰せられても？」

「鎌倉の兄上は、清盛の母、池ノ禅尼の助言で命を拾い、伊豆に流されたとは聞いていたが、われら三人（今若・乙若・牛若）は何ゆえ助命された。そこのところが今もってわからぬ」
「そのようなこと、わたくしも存じませぬ」
「いや、白拍子の間で語られているようなことでよいのじゃ」
「存じませぬ」
静は溜息をついた。
「そうであろうか。京の者たちは皆知っていて、知らぬは義経ばかりなり――とまさか嗤われているのではあるまいな。時折そんなことを思わぬでもないのじゃ」
木曾攻めや一ノ谷の戦さでみせた華々しい戦功の男というのに、会ってみれば信じられぬほど小柄で色白の優男だ。
この男のどこにそれほどの勇と奇略があるのか不思議である。もしかしたらこの人は、猛々しい武将ではなく、一介の孤愁の男ではなかろうか。
静の女心が揺れる。
「母の禅師が語ったことを、お話し申し上げてみましょうか」
決して語るな――と言われた常盤の秘を、妙に語りたくなった。
それで義経の心が癒されるか、あるいは却って痛ぶることになるかもしれぬ。そ

れでも常盤の身の上話を、子の義経に聞かせたい。
「あるいは噂話か、作り話かもしれませぬが……」

(三)

平治二年（一一六〇）正月五日、常盤のもとに、去る三日義朝が尾張の内海で謀殺された報せがもたらされてきた。
「なに！　お館様が亡くなられたと――」
常盤は驚き悲しみ、更に襲ってくるであろうわが身と、三人の子らの身の上を思って暗澹とした。
（ともかくここから逃げ出さねば）
それだけを思って、しっかり者の侍女一人を連れて堀川館を出た。さりとて頼る所はなく、つまるところは母関屋の住む楊梅小路に逃げこんだ。
そこは堀川館から近く、二人の子ども、今若七歳、乙若三歳の足を急きたてた。
それに、常盤の懐には、まだ一歳の牛若が抱えられていた。
事の成りゆきに、母も驚き悲しみ、急場を逃げ込んできた娘と幼児を奥の間に隠し、息を潜めて様子をうかがった。

するとやはり怪しまれたか、ここ一両日、平家の武者が関屋の住まいの周囲を徘徊しだし、今日、明日にも踏み込んできかねない様子となった。
「母さままで追捕の巻き添えにしては、子として申しわけござりませぬ」
と気丈にも常盤は暗くなるのを待って住まいを出る決心をした。
「よいのじゃ。生くるも死ぬるも母娘ではないか。何も出ていくことはない」
と母は止めたが、
「それではわたしの気が済みませぬ。それに、わたしとて義朝様の妻、武将の妻が母を道連れとあっては、世の嗤い者になりましょう。覚悟はできております」
と言って厳冬の町中へさまよい出た。
「母上、どこへ行くのじゃ」
今若が着物の裾を引けば、乙若は、
「寒い、寒い」
と常盤の着物の中へ手を差し込む。
「ああ、もう少し行けば寺じゃ。そしたら温い湯茶にもありつこう」
と急かせながら辿り着いたのは清水寺の師の宿坊であった。粉雪の舞う宿坊の入口に立つと、
「おお、誰かとみれば常盤様」

師の坊はすぐに事情を察し、まず二人の子を招じ入れた。見れば懐にもう一人小さな赤子を抱いている。

「これは難儀じゃ。さあ、入られよ」

と侍女ともども部屋に入れられ、火桶と温い夕飯が運ばれ、苦境を救われた。

しかし、そうして優しくされればされるほど落ちつかず、迷惑のかかることを恐れた。

「何を言われる。ここは寺坊、寺坊に兵が踏み込んではくまい。じっと身を潜めていれば、いずれ嵐は去るものじゃ」

と止めてくれても、何しろここは六波羅に近い。そこで三日ほど体を休めてからある日の夜明け、こっそりと宿坊を出、鴨川の東を急ぎ伏見に向かった。

「常盤様、ここは平家の屋敷の立ち並ぶ前でござりまするよ」

侍女にそう言われても、この道しか知らず、一行はひたすら急いだ。早朝とて、起き出す者の姿はなく、黙々と南を目がけ、どうやら夕暮れどきには伏見に着いた。

そこで一行の哀れな姿に目をとめた老婆に声をかけられ、その夜は老婆の家で暖と食事をとることになった。

「行かれる当てはありますのか？」

落人だとは一目でわかる。途中、捕吏にでも捕まったらそれまでと老婆は案じてくれるが、

「当てはあります」

と明くる朝、礼を述べて大和路へと南へ急いだ。探し探し求めたところは、大和国宇陀（うだ）郡岸岡にある母方の親類である。そこまで辿り着いて母の手紙を差し出し情を請うた。

親類一家は既にこのことを知っていたが、関屋の頼みとあれば詮方なく、常盤一行を入れてくれた。

しかし、親類とても、義朝の妻子を匿（かくま）うことに恐れがあり、必ずしも温かくはなかった。それでも我慢しながら隠れていると、なんと母が六波羅の手の者に捕まったという報せが聞こえてきた。

（こうなったらば全て終わりじゃ）

六波羅は母を責めて責めて常盤母子の行く方を吐かせるだろう。いずれにしてもここへ探索の手が延びてくることは確かだ。そこで常盤は決心した。

「わたしは子らを連れて京へ向かおう。母を見殺しにするは不孝の極みじゃ。わたしは覚悟したゆえ、そなたは逃げよ」

とその日の朝、侍女をこっそり送り出すと親類に礼を述べて村を出た。

六波羅の番所に、子連れの哀れな女が入ってきた。姿があまりに哀れなため、番卒たちは物乞いかと思ったくらいだ。

「源義朝の妻と子らにござります」

細い声と縋る幼児、それに赤子の泣き声に番卒たちも思わず同情を覚えた。

「乳を、乳をやる間だけ、暫くお許しを――」

と常盤は門の内に座りこんで胸を広げ、牛若の唇に乳首をあてがった。その左右に寄り添う二人の子らは、今もに泣きそうな顔面だ。

「何者じゃ」

「それがなんと常盤母子」

「常盤母子とは義朝が妻子」

ここ十日余、探しに探しつづけてきたお尋ね者である。どう処置するかについて話し合った結果、まずはお館、清盛公に伝えることだ。すると清盛は暫時考え込んだ末、

「母子ともども余の前に引き出せ」

と命じた。命じながら、かつて義朝と恋を張り合った頃の常盤の姿を蘇らせた。と同時に、失恋の苦渋にどれほど悩まされたかを思い出した。

（三人の子を産みおって、思い知らせてやらねば）

恋仇義朝を葬り、その女を足下に引き据えることへの快感を覚える。

（常盤を辱めてやらんか）

かつての恋に罵声を浴びせ、子らと共にあの世送りへの最後通告を与える――これこそまさに恋の戦さの復讐であり、勝利である。

清盛は悠々と肩をそびやかして、渡り廊下から広縁の床几に腰をおろした。

「常盤と子らにござりまする」

見ると白州に一人の女が蹲り、二人の童子が悲しげに女に寄り添っている。その情景は、恋と戦さの勝利者という興奮を一気に消し去るものがあった。

女の衣は破れ、その破れ衣に縋っている二人の童子の足からは血が滲み、寒さと恐れに震えている。

（これではまるで乞食の母子ではないか）

辱めるにはあまりに哀れ過ぎた。

「常盤か」

清盛が直に訊いた。

「はい」

あるかなきかのような声である。衣は裂け汚れていても、俯いている髪は黒々と

生きている。

「顔を上げよ」

言われて常盤は上目遣いに清盛をチラと見上げた。ハッとしたのは清盛の方である。

雪と寒さに打たれた花とはいえ、いやそれだけに痛まし過ぎるほど美しい。

(常盤は変わっていなかった)

清盛の心の奥の恋の疼きを思い出させた。

「余の顔に覚えあるか」

清盛の顔など覚えはない。畏怖の人だというだけだ。

「常盤」

「はい」

「自首して出たそうじゃな。いよいよ諦めたのか」

「老いた母をお許しいただきたく……」

「それで出てきたのか」

常盤は微かに頷いた。

「ほかに、申すことはないのか」

すると常盤はいきなり顔を上げ、懐の子を抱えながら白州の砂利を躙った。

「わたしはこのままここで打ち首になろうと覚悟はいたしております。したが、したが上様……」

途端、常盤は滂沱と涙の堰を切った。その姿に、二人の子らも母に縋って泣き出した。

「三人の子らの命だけは……お情けをいただきたく……それのみお願いつかまつります」

この姿からは、いずれどこかを逃げ惑っていたのであろう。それをこうして自ら六波羅に出てきたのは、捨て身でやってきたということだ。

元源義朝の妻だとか、武家権門の女という衒いはない。どん底に落ちた女が、わが身を賭して老母と子の助命だけを願っている。

清盛の心の内に変化が起こったのはこのときである。

(辱めるにはあまりに健気な――)

正直言って、清盛はこんな女をこれまでに見たことがなかった。女とは、美貌と肉体と血統を売りものにして、男を把むものである。

しかし目の前の女は、己を無にして縋っている。

(哀れじゃ)

惻隠の情が湧いた。これ以上辱めて何とする。常盤の姿は、悲母観音のように美

しいではないか。もしここが白州でなかったら、その手を取って労わり、慰めてやりたいくらいだ。

「いかがいたしまするか。お指図を」

番卒が言った。

「うむ。許して遣わす。ただし、二人の童は寺へ送れ。常盤と赤子はここに留め置け」

清盛が立ち上がると同時に、懐の赤子が火のついたような泣き声をあげた。

その後常盤は、六波羅の清盛館に移され、夜伽の女となった。

清盛は十年来の恋を、そしてまた義朝への恋の報復を果たした。

その清盛の腕の中で、常盤が何を思ったかを明かす者はいない。

常盤は間もなく妊り、娘を産んだが、その後清盛館を出て、藤原長成の許へ再嫁した。その常盤の側には、幼さをもって牛若だけが許された。

そこで静の物語が途切れた。

「母から聞いたお話にござりまする」

「忝い」

「常盤様をお詰り遊ばしてはなりませぬ。常盤様の捨て身あってこそ、お館様や二人の兄君、それに関屋様のお命が救われたのでござります」

「そうじゃな」

「常盤様は苦界を生きられた観音にござります」

「うむ」

母の秘事と悲しみをはじめて聞かされた。それを語り聞かせてくれたのは静である。その静が母にも見え、観音にさえも思えてくる。

「常盤様にお会いなされませぬか」

「……」

「心待ちなされておられましょうに」

（いや、わしは十五年前、母上と別れた）

母があの男（藤原長成）という館へ行こうとは思わぬ。それより静に母の面影さえ重ねているのだ。

「静よ、わしの側にいてくれぬか」

愛を乞うような眼差しに静の心が揺れる。

（武将の妾にだけはなってはなりませぬ）

と口癖のように言う母のことばが蘇る。一ときの盛運はあっても、一たび敗れた

ならば、武家の女ほど哀れなものはないということだ。
（それでも……）
と静は迷う。
（この純良で孤独な男を、放ってはおけぬ）
「判官様」
「ああ、静よ」
その夜、静は母禅師の許へ帰らなかった。

第十一章　屋島・壇ノ浦

(一)

堀川館の対の屋で、女の高声が聞こえた。何かとみれば、佐登が逆上しているようだ。
「静など遊女ではないか。そんな女に惚れ込むなど、わたしという歴とした妻がありながら！」
そう言って静の起居している部屋に走り出そうとしている。
「なりませぬ。姫様がそのように取り乱されては傍目もございまする。それに却ってお館様のご機嫌を損ずるばかりでございます」
と乳母こよと美津が懸命にとりなしている。
「姫様、ようございますか。いずれの殿も、女の二人や三人、同じ館に住まわせて

おりまする。それは京の公家衆から地方の武家までいわば普通のことでござりまするよ。それを北ノ方が騒ぎたてるなど、見苦しゅうござります」

「ではどうすればよいのじゃ」

佐登の気はおさまらない。

「超然となされませ。姫様は静などのような遊女ではござりませぬよ」

「超然となどと言っても、わたしはそんな悟りなど持ち合わせぬわ」

「悟りではござりませぬ。北ノ方という誇りでござりまするよ。誇りさえあれば、他は足許の塵のようなものではありませぬか」

そうは言われても、まだ二十歳を出たばかりの姫では、こよの言う気概など持ち合わせない。

ともかく佐登は、静への嫉妬以前に、義経が急に部屋に現われなくなったことに気を病むのだ。

「したが殿は何ゆえ急に……」

たとえ静の舞に惚れたとしても、妻の存在を忘れるということが考えられない。後ろめたく思ってくれるなら、佐登には更に優しくしてくれてもよいではないか。打ちしおれる佐登に、美津はあのことを口にした。

「もしやしたら殿は、あのことを知られてからでは」

「あのこととは何じゃ？」

佐登は顔をあげた。

「実は――」

と美津は、主筋の重頼から、義経主従の一切を書き送るよう命ぜられていたこと、つまり、「一ノ谷合戦」の後、京における義経の評判、更に院との折衝やまた軍監梶原景時との確執などを書いた文を、使者が旅の途中、近江辺りで襲われ、とりあげられてしまったことを告白した。

「なに！　そのようないわば告げ口を、そなた父から」

「お父上様のご本意ではござりませぬ。これは鎌倉殿のご命令であったかと」

「義経様は、鎌倉殿の弟君ではないか。その弟を疑って、いわば密偵のような役目をそなたに命ずるなど考えられぬことじゃ」

佐登は頭から信じなかった。

「普通なら仰せの通りにござります。したが、鎌倉殿はことのほか義経様のお働きに半ば驚き、半ば恐れを感じておわします」

「恐れとはどういうことじゃ」

「詳しいことはわかりませぬが、もしやしたら、鎌倉を超えるようなことになってはと――その一つに、院からいただいた検非違使や殿上のみ位など。つまり鎌倉殿

が一番警戒されるのは、院と義経様が繋がることでございましょう」
「それを、そなたが逐一書き送ってきたというのか」
「お父上様のご命令にございましたゆえ」
ということは、この結婚は、はじめから頼朝の策略。即ち義経に嫁させて、義経の身辺を全て盗み報じさせるということだったようだ。
武家や公家の政略結婚は世の常だ。しかし、どこもこのように、妻や侍女に、婚家のことを逐一報じさせているのだろうか。
「そなたの文を、使者が近江辺りで奪い取られたというのはいつ頃じゃった」
「夏ごろだったと思います」
(その頃から殿のお渡りが少なくなった)
まるで符丁を合わせたように義経の態度が変わった。それが何ゆえかわからず、悩みつづけたものだった。その佐登を更に苦しめたのは静の入館だった。
しかし、考えてみれば、静の入館は、そうした佐登への当て付けではなかったようだ。
(となると、これはもしかしたら恋)
その方がむしろ苦しい。だからといって静を責めることはできない。
「美津」

「はい」
「父上への便りは止めよ。義経様の身辺を書き送ることが、わたしを不幸にすることぐらいわかっていよう。そなたは義経様を裏切り、わたしをも裏切ってきた」
「申し訳ございませぬ。この罪は死んでお詫びを」
美津は平伏しながら顔を上げなかった。そしてその夜から美津の姿が消えた。
「姫様、美津がおりませぬ」
明くる日、こよが部屋に飛んできた。
「もしかしたら」
こよの顔が青ざめている。
「もしかしたら何じゃ」
「美津はどこかで死ぬやも――」
「さあ、それはどうであろう。美津はわたしより父上や鎌倉の方が大事じゃった。よって鎌倉へ戻るであろう」
逆上するかと思いきや、この平静なもの言いにこよは内心驚いた。
(姫様も気強くなられた)

(二)

文治元年（一一八五）一月半ば、鎌倉から伝騎が入った。何かとみれば平家追討の命令である。義経はニタリとした。

（遂にきたか。わしでなければ）

昨年の八月、範頼は一千余騎を率いて京に入り、意気揚々と西へ向かっていった。しかし、なぜか義経には沙汰がなかった。

（わしがいては邪魔か）

義仲追討や一ノ谷と、いずれも義経の戦功だけが光り、範頼は霞んでしまった。ために却って斥けられてしまったかと思っていたが、やはり義経を必要としたようだ。

範頼の行き先は長門の彦島である。平家は西国に逃れてから二つの陣営を構えた。一つは屋島（讃岐）であり、一つは彦島である。彦島には平知盛が九州武士を率いて門司の関を固め、瀬戸内海の制海権を抑えている。

ところが範頼軍が困窮してきたのは食糧問題である。というのはここ二、三年来近畿・山陽は不作で、食糧の調達ができなくなっていた。

兵の飢餓は戦意を損ない、戦線離脱者や引き揚げ論まで出てくる始末で、軍の統制が厳しくなってきた。

そこで食糧補給を要請したが、鎌倉は頭を抱えてしまったという。そんな情報は早くからここにも届いていた。

それに讃岐の工作に送った橘公業の動きも定かではない。というわけで、範頼軍の悲鳴と讃岐の膠着状態に、やむなく義経の起用をせざるを得なくなったようだ。

「いかようになされます」

佐藤兄弟、弁慶、伊勢ノ三郎らが寄ってきた。

「屋島じゃ」

食糧補給の困難な範頼の周防や九州へなぞ征けるものではない。

「となると船が要ります。われらが船は……」

摂津渡辺ノ津（大坂）に繋留してあるのはたったの五艘だけである。これでは戦さにならない。何百の兵と馬を乗せる船が必要だ。

（これは一ノ谷の鵯越えより難しい）

陸軍のみの源氏にとって、最大の課題である。

「算段はしてある」

「と仰せられますと？」
「弁慶に訊いてくれ」
「弁慶殿!?」
皆は一様に訝った。
「弁慶、熊野詣でのことを話せ」
「熊野詣でとは何のことじゃ」
「ああ、これは紀州田辺の熊野水軍じゃ」
半僧半兵の水軍の大将は、熊野三山の別当湛増である。この湛増の庶子が実は弁慶だ。
故郷を出て久しいが、源義経の麾下にあるといえば、湛増も考えてくれるだろう。いや弁慶にとって生まれて初めての頼みである。そうして弁慶が田辺へ走ったのは一カ月前である。
（これは賭じゃ）
船を持たない源氏に果たして付いてくれようか。鵯越えの逆落としでさえ祈ることはなかった。なぜなら己の馬術に自信があったからだ。
しかし今度は違う。己にない武器（軍船）を大量に調達しなければならないのだ。果たして金や調略が通用するか不安であった。

それをどうやら口約束させた。そこへ再び弁慶を走らせることになった。
二月、義経は渡辺ノ津にきていた。そこは淀川の下流で、辺りは葦や田圃の広がる低湿地である。
その一角に五艘の船を繋いであるが、この船を動かすにしても、ここで勢力を持っている摂津源氏渡辺党の力を得なければならない。
その渡辺館に義経と佐藤兄弟、伊勢ノ三郎が入った。話は当然船のことだが、彼等の舟は漁船程度でいわゆる軍船ではない。そうなるとやはり弁慶の走った熊野水軍を当てにするしかない。しかし、まだ弁慶は戻ってこない。
三、四日滞留していると、梶原景時が山陽道の戦線からやってきた。
「どうじゃ、軍船の当てはござったか」
と相変わらず高飛車なもの言いである。
「軍船というものではないが、渡辺氏が近隣に掛け合われて、商船を十艘ほど用意してもらえそうじゃ」
「それより熊野の方はどうなされました。わしの方は既に伊予の河野水軍に約束をとりつけましたぞ」
と得々としながら、義経の調略の遅れを詰らんばかりだ。

「それでは熊野水軍とやらがくるまで、ここで一服でござるな。で、いつまで待ったらよいのでござろうな」

と景時は義経の不安をあたかも揶揄するかのようだ。

「弁慶が戻ってくれば」

「なに、弁慶じゃと！　あんな奴に何が出来る」

景時は鼻で嗤った。ただでさえいろいろと鎌倉へ讒言している景時のこの横柄な言動に義経は我慢がならなかった。そこへもってきて軍議に入るや、船の逆櫓のことで再び衝突した。

逆櫓とは船の前と後ろにつける櫓のことで、逆櫓によって、船の進退が速まる。この逆櫓のことを実は義経は知らなかった。それを席上、景時は嘲笑した。遂に我慢の緒を切った義経は、

「そのようなもの、おぬしの船にだけつけよ。わしの船には無用じゃ」

と一蹴した。

二月十七日丑の刻（午前二時頃）渡辺ノ津から百五十騎を乗せた五艘の船が出た。といっても烈風吹き荒ぶ暴風雨の中である。

景時とのやり合いで著しく心象を害した義経は、なにがなんでも船出しなければならなかった。たとえ風雨が荒れ、海が逆巻こうと己が矜持を曲げることはできな

かった。

「気違い沙汰にござりまする」

「お考え直しを」

懸命に制止する船頭、水夫たちを恫喝し、遂に船は海上に出た。やがて雨は止んだが風はおさまらず、低く帆を張り帆柱のきしみを聞きながら運を天に任せた。

海上に出てから、義経はあまりの冒険に生きた心地もなかった。

（わしは海のことに全く無知であった）

視界のきかない真っ暗な海の上、波飛沫を左右からどっと受け、芯まで冷える船の上で、更に将士を苦しめたのは船酔いであった。終日病人のように船端や下敷にへばりつき、命の限界に奔弄されつづけた。そしてようよう、

「阿波に着いてござる」

という船頭の声を聞いたとき、一同は窮極の命拾いをしたと思った。そしてやおら頭をあげると、東雲の空の赤い光を受けて、黒々とした陸地が迫っているのが見えた。

（助かった！）

奇跡的に着いた所は椿浦（徳島県阿南市）であった。普通なら三日かかるところを、丸一日で着いたことになる。暴風が余程後押ししたようだ。暦は十八日であ

る。

全身ずぶ濡れで綿のように疲れ切っている。しかも暁暗の寒さである。しかし宿る所はない。するとそこへ一人の漁夫が現われた。漁夫は平家軍と思ったらしく、舟小屋で焚火をしてくれた。

「屋島はどちらじゃ」

漁夫は屋島のことなら、勝浦の平家軍の桜間良遠の館へ行かれよと教えてくれた。疲れてはいるが、時化の暁闇を衝いていけば、敵は油断しているはずだ。

（寝込みを襲う）

それは一ノ谷への鵯越えの逆落としと同じである。

とにかく海岸沿いに勝浦を目ざし、館らしい建物を見つけて侵入した。早暁を襲われ、桜間はひとたまりもなかった。

それからは源氏に味方するという者が現われた。近藤親家という在地武者で、父は「平治ノ乱」で源義朝側に在って戦死したと言う。この親家が付いてくれることになった。

親家を先頭に立て、那賀川、勝浦川を越え、板東・板西郡を過ぎて大河吉野川を渡った。そして親家の館に入った頃はすっかり暗くなっていた。館に入り、ようやく人心地がついた。

翌朝、親家は郎党ほか、近隣に話をとりつけて数十騎を集めてきた。そして粛々と阿波と讃岐の国境、大坂山を越えて讃岐に入った。

引田からは海岸沿いである。海風がハタハタと頬を打つ。そこで小休止をとりながら、親家から屋島の陣容を聞くことにした。

まず屋島の形は全容が珍しく台形であること。そして島と陸地は浅い海峡で隔てられ、馬で渡海が可能だという。

「ほう、それは結構な」

と一人が笑った。そして平家の主たる人物は幼帝・生母建礼門院（清盛の娘）や二位ノ尼（清盛の妻）、そして本営は島の東海岸、守将は平宗盛（清盛の三男）だとわかった。

それから地元勢力の豪族、田内教良が伊予方面に出向いているため、目下の人数は千騎余りということだ。

「そうか、ならば今宵はこの辺りで宿をとろう」

と義経は地図を畳んだ。

「ではその間に兵の数を募りまするか」

「いや、その必要はない。何しろ敵の船には幼帝と女院、女官たちも多かろう。そんな船は戦さになれば、必ずや逃げを打つ筈じゃ。よって兵の数はこれでよい。と

もかくわれらの動きを気取られぬことじゃ」
「では何刻頃屋島に――」
「早暁でなければ夕刻じゃ。ここからでは屋島は夕刻になろう」

文治元年二月十九日、屋島の対岸古高松村と牟礼村に火が放たれた。火は風に乗って大波のように燃え上がり、屋島本陣の平宗盛らを吃驚させた。
「あの火は何じゃ」
「源氏の攻撃にございます」
「何じゃと？　いつ源氏が四国へ渡った！」
宗盛への注進にはこれまで前方（陸地）からの異状はなかった。もし源氏が追撃してくるとなれば、船なら明石、陸上なら鳴門と、常に警備を怠らなかった。
しかし、そこからの注進でないとなると、
「一体どこから来たのじゃ」
「それがわかりませぬ」
「して大将は誰じゃ」
「目下のところそれもわかりませぬ」
（まさか義経ではあるまいな）

宗盛は体を震わせた。何しろ田内教良が留守である。それにこちらは幼帝や女院たちを抱えているのだ。
宗盛は直ちに幼帝と女院、それに従う女官たちを海岸に繋いだ御座船に移すべく下知した。逃げの支度である。彼女たちの前で激しい男たちの殺戮を展開するわけにはいかない。そうして平家軍はいとも簡単に陸地の本営を捨てて海上に浮かんだ。
（船のない源氏じゃ。こうなればこっちのもの）
そう思いながら船の垣楯の隙間からのぞくと、源氏軍は島に上陸した。そして行在所と本営に火を放ち、火はみるみる猛炎となって辺りを舐めつくしている。
（ということは、帰るべき本拠がなくなった）
本拠は屋島から船上にかわったのである。
「源氏の将は誰じゃ」
「どうも義経らしゅうございまする」
「なに、義経じゃと！」
宗盛は身震いした。「一ノ谷合戦」は、あの鵯越えの逆落としによって、勝つべき戦さを攪乱され敗北に終わった。あの義経が、一体どこから四国に上陸したのであろうか――。

東海岸という海岸は全て厳重に警備していた筈だ。
（戦さは義経一人でできるわけではない）
となると、源氏の兵はもしかしたら、この讃岐や阿波を懐柔していたのではなかろうか。
（迂闊であったわ）
その平家軍で将有りと謳われる男、平教経が現われた。
「我にお任せを――、一ノ谷の怨み返さん」
一ノ谷の山の手、印南野の陣の守将は教経だった。それが義経の逆落としによって敗れた遺恨を今も忘れてはいない。
焼け落ちた行在所の辺りに布陣した教経は、五百ばかりの兵を指揮して源氏軍への弓射を行った。この激しい弓射に、源氏軍は次々と倒れた。
「九郎殿はいずれに」
という大声に、義経は、
「おーっ」
と応じた瞬間、強弓から放たれた教経の矢が空を切ってきた。途端、義経は激しい兵の体当たりを受けた。
「どうした!?」

ドーッと義経の背からずるずると倒れたのは、なんと佐藤継信ではないか。
「御大将、退がってくだされ。危うござる」
それより体当たりして崩れた継信の首に、矢が深く刺しているではないか。
「継信殿は駆け寄って御大将の楯になられました」
「継信！」
義経は継信の体を抱きながら膝を折った。
「兄上――」
忠信も声を震わせて継信の体に縋った。
平泉以来の友であり忠臣であった佐藤継信は、こうして義経の身代わりとなって戦死したのである。
それから暫く、屋島と海上で激しい矢の応酬がつづいたが勝敗はきめ難かった。
そして双方疲れが見えたとき、沖から一艘の小舟が近づいてきた。既に陽は傾きかけている。
「あれは何でござろう?」
兵の高声が聞こえた。見ると舟の中に女官がひとり立ち、その傍らに長い竿が立ち、竿の頂に開いた扇が括られている。扇面の地は赤く、真ん中に金泥で日ノ丸が描かれている。そして女官が大袖をあげて手招きしているではないか。

「どういうことじゃ？」
「戦さの最中に女を前面に押し出してくるとは」
「扇をどうせいというのじゃ」
「これは謎じゃ。御大将には気をつけられませ。女に見入っておられると、その隙にまた強弓の矢が飛んできまするぞ」
「いや、これは遊びなどではない」
義経はまじまじと女官と扇子を見つめた。
「射よというのであろう。平家にとっては占いかもしれぬ。どうじゃ、あの扇の的を射抜く者はおらぬか――」
大声で叫ぶと、
「それがしが射落としてご覧に入れます」
現われたのは、萌黄縅に揉烏帽子をかぶった若武者である。
「おお、那須与一宗高ではないか」
義経が平泉から鎌倉へ下る途中から参じてくれた若者である。日頃から空飛ぶ鳥の百羽のうち九十九羽を仕止めるといわれている弓の手練である。
重籐の弓をとり、颯爽と海中に馬を乗り入れた与一は、暫し黙念と扇の的を見つめた。風にハタハタと扇が鳴り、舟も馬も波に揺れ動く。

暫し祈念した与一は、鏑矢をとり、一瞬の風と波の静止の間を狙って、弦を放った。途端、矢は唸りをあげて飛び、源平双方環視の中で、矢はものの見事に的を射ち、扇は要を離れて空高く舞い上がって海上に散った。
「ウオーッ、ウオーッ」
と双方から歓声があがり、一時の美技に酔った。

その夜、義経はつくづくと海上と陸の戦さのもどかしさを痛感していた。
平家は海上に船を浮かべて悠長なものだ。それをこちらが地団駄踏んでも、船がなければ話にならない。強いていえば、彼らの食糧の尽きるのを待つばかりだ。
ところが二月二十一日朝、平家軍は舳に立って目を疑った。東南の沖に突如として現われた軍船百数十艘が、いずれも白旗を翻しているではないか。
「何じゃあの船は？　一体どこから来た！」
船中大騒ぎとなった。そればかりではない。恰も示し合わせたように、西南の方角からも数十艘がこれも白旗を靡かせてくるのが映った。
一方、宿営にいた義経の許へ、浜辺から警備の兵が転び込んできた。
「御大将、遂にきましたぞ船団が――」
「おお、遂にきたか」

義経は跳ね起きると、身支度もそこそこに浜辺に走った。
「あちらからくる船団は、熊野水軍にござりましょう」
「うーむ、ようやったぞ弁慶」
「そして西側からくる船団は多分、河野水軍にござりましょう」
(これでどうやら武器を手に入れたわ)
海戦の経験はないが、ともかく船は必要不可欠のものである。その水軍が、義経の求めに応じてくれたことがまず感無量だ。すると、
「おう、平家の船が一斉に動き出しましたぞ」
という声があがった。見ると船首を並べて西へ動き出したのである。ということは、屋島戦線の離脱である。
「あれは逃げじゃ、逃げていくわ。御大将、われらは遂に勝ちましたぞ」
ウオーッ、ウオーッと喚声があがった。そのとき義経の耳元で忠信が囁いた。
「嵐の船出も、つまるところは判官殿の勝利にござりました」
「ああ、継信殿の献身によってじゃ」
二人は手を取り合った。
それから間もなく、戦さの終わった屋島の海へ、ようやく播磨船百余艘が現われた。梶原景時の調達した船であった。

(三)

彦島(下関海峡の西端)に本営を構える平知盛(清盛の四男)は狼狽と腹立ちを隠しきれなかった。なぜなら瀬戸内の東の拠点、屋島を守るべき兄宗盛が、いわば平家の旗艦たる幼帝や女院ともども敗走してきたからである。
宗盛にそれだけの器量がないにしても、敗戦の因が義経に攻められたからというのには驚愕と恐れを禁じ得ない。
「どこからやってきたのじゃ」
という問いに、渡辺ノ津からたったの五艘で百五十騎ばかりが暴風雨の中を渡ってきたというのには身震いした。
(考えられぬことじゃ)
水軍をもってする平家にとって、それは有り得べきことではない。
(彼には鬼神が憑いておるのか)
「一ノ谷」といい、「屋島」といい、尋常の戦さではない。となるとここ周防灘で何が起こるやわからない。
とはいっても、こちらは水軍をもっている唯一の軍団である。一度たりとも海戦

の経験のない源氏に、一体何が出来るというのか。

（義経の奇略も、海の上では通じまい）

これが唯一の誇りであり頼みである。

連日の如く軍議を持ち、源氏をいかにして迎撃するかを談じ合った。

まず海戦の場をどこにするかということ。知盛の頭にあるのは潮流である。知盛自身、ここへきて初めてもの凄い潮流の速さと、それも時刻によって東西が入れかわるという、海の大原則を知り驚きかつ恐れた。

「早鞆の瀬戸」といわれる壇ノ浦は、外界の玄界灘と内海の周防灘との間を海流が、日に二回、奔流となって東から西へ、西から東へと流れを変えるところである。

（この激流に源氏を誘いこんだら）

戦うどころか、あっという間に疾風のように流れ去るだろう。その光景を想うだけで、知盛は痺れるような快感を覚えた。

それにはこの彦島では西に過ぎる。地形と水流を考えると、海峡の出入り口、壇ノ浦でなければならないだろう。

その壇ノ浦に臨む基地は、一ノ谷のような浜や汀であってはならない。そこで定めたのが対岸の豊前（九州）田ノ浦であった。

「どうじゃ。異存あるまいな」

彦島での軍議は知盛の一人饒舌で、他は黙して語らない。それには異議があるわけではなく、全く地理・地情を知らない無知からである。その中で、

「異存ござりませぬ。直ちに田ノ浦に移りましょう」

と真剣に考え、同調したのは平教経であった。

一方、義経は一カ月近くも四国に滞留した。即決、即戦の義経にしては珍しい粘り腰である。というのには訳がある。軍船を更にふやさねばならず、海戦の知識も得なければならないからだ。

海技については、屋島に繋留した熊野水軍や河野水軍から毎日のように手取り足取りされる。そして鳴門海峡の渦潮に息をのみ、震えた。

「海にはこんな凄い所があるのか」

「田辺からやってくるには、紀伊水道を越えてきますから」

源氏軍はただただおとなしく聞くばかりだ。

「ともかくわしら水軍は気が荒い。早いとこ平家とやり合いたいものじゃ」

そうした鼻息の荒い水軍を率いてようやく今治に入ってきた。今治は伊予水軍の一派・来島氏の根拠地である。

既に平家の屋島撤退を知っている伊予衆は、そんな軟弱な平家に見切りをつけて、渡辺ノ津から大時化を賭してきたという源氏軍に乗り替えようとしていた。

そこで義経は今治に腰を据え、今度は来島水軍から船の操舵を習うことになった。そして今治の沖、大島との間、来島海峡の凄まじい海流にも吃驚した。

鳴門の渦潮にも魂消たが、この猛き海流が相手では勝ち目はない。それでも水夫たちから、高潮、落潮、低潮を覚えさせられた。

「平家軍もこのような経験をもっているのであろうか」

「そりゃ戦さの経験はないかもしれぬが、瀬戸内をいくからは潮のことはわかっておりましょう。よって屋島と違い、今度こそ本格的な海戦を挑んできますぞ」

「それで海域は？」

「多分、壇ノ浦かと」

「壇ノ浦……」

「来島と並ぶ潮流のすさまじい所で、勝負の帰趨は潮流をどう利用できるかで決まりまする」

（潮流任せでは奇襲はできぬ）

鵯越えの逆落としや、大時化の渡海にはなかった戦慄を覚える。

ともかく源平双方、潮流を戦術とする以上、潮流に乗るための配船と戦闘時間を

考えねばならない。いよいよ船の数が問題だ。

「弁慶、三郎。伊予か周防で、兵船の数をふやして貰いたい」

義経は調略に巧みな二人を放った。

すると程なくして弁慶が、周防から船所正利という者を連れてきた。見れば正利も潮焼けした逞しい四十男である。彼は周防、下ノ関の警護をつとめる役人で、櫛崎の関船をもって海賊の取り締まりに当たっているという。

関船とは艪数四十二挺だて以上の軍船のことで、櫛崎ノ浦を根拠地としているため「櫛崎船」とも呼ばれる。ともかく壇ノ浦の潮流のことなど、わが庭の如く思っている男である。

この正利が、平家に見切りをつけたのか、それとも弁慶の弁舌がよかったのか、五十艘をもって加勢に応じてくれたのである。

「忝い。勝利の暁には鎌倉の御家人にも……」

と義経は言わずもがなのことまで言ってしまった。

三月二十日早朝、義経は船団百艘をもって、今治から来島海峡を抜けて西へむかった。

源氏の船は大小合わせて凡そ八百艘。ただし、平家の物見船の眼を紛らすため、

時間をずらして航行する。行く先は周防の大島である。周防大島の海港に集結し、そこから乗り出す算段である。

昼をまわって港に着くと、白旗にとり囲まれるようにして一人の将が近づいてきた。大鎧を着けたその顔には覚えがあった。

「三浦介義澄にござる。判官殿と聞き、急ぎお迎えつかまつりました」

「おお、三浦介か」

義澄は範頼軍の将の一人である。範頼軍は目下は九州に在り、義澄がここにくるとは解せぬことである。

「どうしたのじゃ、おぬしがここにくるなぞ？」

すると義澄は、

「いやあ」

と兜の下で白い歯をみせた。

「三河守（範頼）が九州へ渡るとき、それがしは周防の守備を命ぜられ残留いたしておりました。船も十艘ほどござりますれば、是非御大将の戦さに加わらせていただきたく」

「それは有難い」

二人は手を取り合った。ところがその夜の軍議で、またまた梶原景時と衝突した。

屋島で遅れをとった景時が、今度こそ軍監としての面目を立てんと、

「先陣をそれがしに」

と言い立てたからである。景時としては、「一ノ谷」といい、「屋島」といい、つまるところは義経に先陣の功を奪われた。よってここ周防の決戦では、己が先途の勲功をたてたいと思っているのだ。それを、

「三浦介に」

と義経は命じた。

「何ゆえ三浦介ごときに」

景時は毒づいた。

「陸上ならともかく、今度の決戦は海上じゃ。わしとて先陣はできぬ。よってこの海の地理に明るい三浦介は当然であろう」

返すことばがないだけに、鬱憤は鉛のように重く沈んだ。

三月二十二日早朝、義経の船団は伊予今治を出航した。目ざすは壇ノ浦に近い周防の奥ノ津である。

源氏最前線の基地で、現在までに集まった大小あわせて無慮八百艘が、小隊に分

かれて白旗を靡かせながらいく。まさに壮観である。

風は追風、海上も穏やか、先登をきる三浦介義澄の傍らに義経が立っている。そして丸一日、ようやく夕刻に満珠・干珠の岩礁の間から奥ノ津の港に入った。

一方、平家の総大将平知盛は、それまでの本営を彦島から、壇ノ浦水域の豊前（九州）田ノ浦に移した。ここは壇ノ浦水域でも最大の潮流をみるところである。

しかも不思議なことに玄界灘から入ってくる海流が、この田ノ浦でくるりと回流し、沖の流れと逆の方向へいくという現象がみられる。知盛はこれを利用して源氏軍を包囲せんと考えた。

それから瀬戸内へ入った潮流が、午を過ぎて一時半ほどすると、漲潮となって玄界灘へ逆流をはじめ、やがてそれは高潮となって奔流する。これを利用することが勝敗の鍵である。

それに次は、一見してわかる大型の御座船を囮にすることである。即ち幼帝や女官たちと兵を入れ替えて源氏軍を誘き寄せる。ここで問題は義経の船を早く見つけることだ。

その頃義経は奥ノ津でまだ見ぬ壇ノ浦の潮流にこだわっていた。いかに来島海峡で乗船を経験してきたとはいえ、自信はない。それに来島と壇ノ浦では情況も違うだろう。

弓矢の戦いは武士だが、潮流を利して動かすのは水夫・舵取りたちである。三浦介義澄と船所正利はじめ、各小隊の水夫・舵取りを集めた。そして、一日のうちの潮の流れとその時刻を、細かく紙面に明記させ、また布陣に当たる配船の位置を明記させた。

「ともかく朝、矢合わせが始まったら、緒戦は平家に有利でござる。平家は潮に乗って東へ東へと押してきます。そして潮が変わるのは陽が少し西に動いた頃でござる。それまで戦さを持ちこたえることが勝負の要でござれば、何がなんでも持ちこたえて下され」

それからもう一人が進言した。

「敵の目標は御大将でござろう。そこで一見して御大将とわかってしまうようでは忽ちにしてやられまする。よって御大将の装束を誰かに着せて身代わりを立てるか、御大将が兵と同じ恰好になられまするか……」

なるほどとは思ったが、素直に返事ができなかった。

「御大将、われら瀬戸内の船乗り衆は、皆戦さの経験がござる。よって潮の動きや、戦さ次第の船の動かし方はお任せを。したがいかなることがあっても諦めてはなりませぬ」

「相わかった」

まるで子供に言い聞かせるようだが、彼等とて一身を賭ける戦さである。彼等と一心同体となって、平家軍と潮と戦うのみである。

船頭らが引き取ってから、義経の頭に一つの思案が閃いた。

（要は、敵船の水夫・舵取りを射てばよいではないか）

船はたちどころに舵を失い、彷徨するだろう。海上の戦さとは、水夫・舵取りを攻めることだ。

文治元年（一一八五）三月二十四日、辰の刻（午前八時過ぎ頃）平家水軍が一斉に赤旗を朝風に泳がせ、攻め太鼓を打ちながら潮に乗ってきた。全軍を三段に分け、先頭を豊前の水軍山鹿秀遠、二陣を肥前松浦党、三軍が平家一門である。

海上を圧する赤旗船団を、こちら満珠・干珠の間で待ちかまえていた源氏軍が、一斉にともづなを解いて迎え撃とうと近づいた。ところが船が容易に進まない。それどころか岸の方へと流され気味である。

そうした遅滞と狼狽をみてとった平家軍から、矢の雨が襲ってくる。義経の兜や大鎧にも次々と衝撃がくる。

そのとき、ここぞとばかり梶原景時の指揮する船十艘が平家船に近づき、一艘が熊手をもって引き寄せると平家船に乗り移って斬り合いを始めた。

（これはまずい！）

海上の蛮勇がどういう結果をもたらすか——船上の斬り合いに、続続と赤旗船が詰め寄ってきた。そして源氏軍の後続を許さない。結局、十数名はそのまま元の船に戻ることはなかった。

源氏軍は次第に岸の方へ岸の方へと追い込まれていく。しかし、これこそまさに天恵であった。岸には和田義盛らの騎射隊が、一斉に自慢の遠矢を平家船目がけて射ちだしたからだ。

海岸寄りの潮流は緩やかで、ここぞとばかり源氏兵の飛矢が目立つ。そうした彼我の矢の応酬が長くつづき、一進一退けりがつかない。

（こんな局面で手間取って）

と気がついたのは平知盛であった。知盛の頭に描いた構図とは、落潮に乗った平家の三軍が、低潮とともに源氏の船艘を、あたかも漁網で巻く魚のようにとり巻き、矢の一斉集中を浴びせて射殺、あるいは転覆させるというものであった。

ところが局面は一方の海岸寄りに停滞し、ほかは遥か洋上に赤旗・白旗が広く散開しているといった様相である。

（こんなはずではなかった）

次に、

（おかしい？）

と気づいたのは十艘ほどの動きである。飛射はしているものの散発的で戦意が見られない。

「あの船団の主は誰じゃ」

「阿波の田内でござりまする」

田内とは田内成良のことで、阿波随一の豪族である。成良の子の教良が屋島で義経に降伏し、ために父子は敵味方に分かれた。だから戦さに力が入らぬのかもしれない。

（したがまさか裏切りはせぬか）

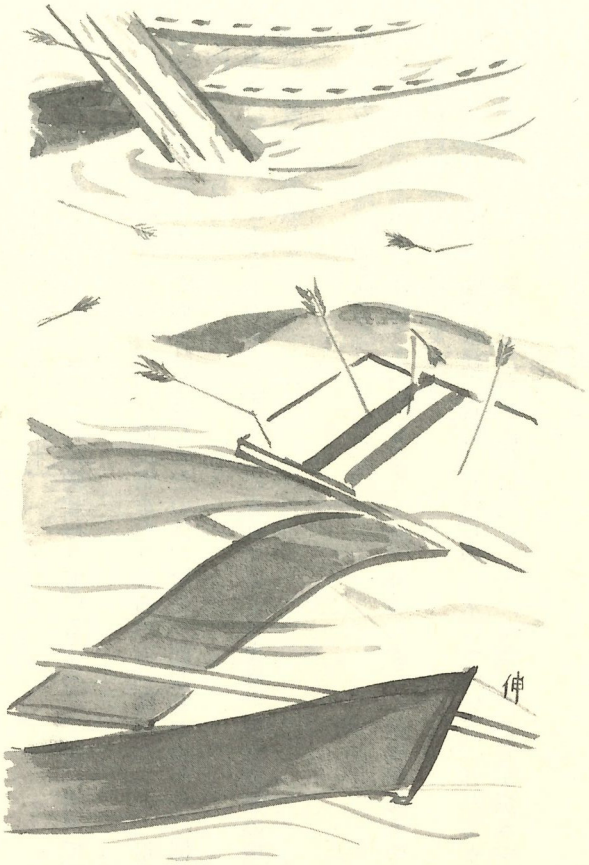
そんな疑心が頭を掠めた。すると疑心暗鬼は妄想となり、田内のみならず、松浦や山鹿までそう見えてくる。

（所詮信ずべきは平家のみ）

その第三軍平家船を岸から洋上にくり出さねばならない。先頭の教経に合図したとき、洋上の波の動きに気がついた。頼るべき潮流が、琵琶の湖のようにひたと静まっている。

（しまった！）

仰げば天空の陽は西の方角に移っている。岸辺に気をとられて、勝機となるべき



潮流を逃がしてしまったようだ。

（ということは義経は潮流を知っていた――）

海岸の停滞は作戦であったようだ。それに乗せられているうちに、時は過ぎてしまっていたのだ。

それから間もなく潮流は、勢いづいた源氏軍を滔々と西の方へ運びだした。追われる形となった平家軍が、隊形を乱しはじめたのは、水夫・舵取りが狙われ、倒れるようになったからだ。

舵を失った船が、まるで木の葉の漂うように流れていくさまは、平家窮極の壇ノ浦の戦いの敗北を象徴していた。

源平最後の堰、「壇ノ浦の戦さ」は終わった。

夕映えの洋上、平家船には動く人の影もなく、血で染めたように赤旗が海を染めている。まさに平家終焉の絵図である。

安徳天皇、二位ノ尼、知盛、教経、資盛（すけもり）、有経らの入水につづいて、遅れじと緋の袴に白衣、そして黒髪を翻しながら波間に消えていった女官たちの姿が焼きついている。

（静（しずか）をこのような目に遭わせてはならぬ）

そのとき一斉に凱歌があがった。

「御大将、遂にやりましたぞ」

その声を聞きながら、

（父上、この凱歌をお聞きあれ）

義経は喉の奥で叫んだ。

第十二章　吉野

(一)

女の柔肌と温もりに溺れ、堰を切った精液の噴出に至福のときを過ごした義経は、静の体から身をずらすと、仰向けになった。

心地よい火照りと余韻に浸りながら頭をずらすと、白地の優雅な几帳が目に映った。ぼんやりと眺めていると、几帳が船の帆に見えてきた。

壇ノ浦の海に葬いた船も人も、最後はまるで塵芥のように流れ去った。そのときの船の帆を想起させた。こうして終わってみると、それはまるで影絵のようですらある。

「何を考えておられますの？」

寄り添っている静が低声で言った。

「ああ、壇ノ浦のことをな」

「もう戦さのことをお忘れなされませ。わたくしといる時ぐらい」

「したがな、静」

義経は手枕をして向き直った。

「わしは戦さのさ中、二度そなたのことを思い出した」

「まあ、わたくしのことを」

「一度は屋島へ渡る船の中じゃ。無謀な冒険じゃったが、あのときわしはそなたから貰った髪の毛の束を握り締めていた。そして次は壇ノ浦の海じゃ」

「壇ノ浦で？」

「平家の敗けと決まったとき、女たちはためらうことなく、まるで急ぐように船端へのりだして、緋の袴に白衣をひるがえしながら海中に飛びこむのじゃ。わしは女子の覚悟というものを初めて見た」

「……」

「それから海中に広がる白衣と長い黒髪が、まるで藻のように揺れながら沈んでいくのじゃ。その情景が目から離れぬ。惨いことをしたとな……。そしてそのときわしはそなたを想った」

「どのように」

「そなたをあのような目に遭わせてはならぬとな」
と、いきなり、
「お館様」
静が義経に縋り、抱きついた。
「嬉しゅうございます。そんな戦場で、わたくしのことを想い出していただいたなんて。わたくしはお館様の所に上がったときから、そんな覚悟はできていたのでございまするよ」
「まさか？」
義経は驚いた。
「白拍子は男舞。剣も帯びておりましょう。武士の心も体しておりまする」
「……」
「それにわたくしは義経様の女子にござります」
（なんと嬉しいことを言うてくれるものか）
それにしても、今から義経は心苦しいことを言わねばならないのだ。
「静よ、わしはそんなそなたに、言い難いことを言わねばならぬ」
「なんのことでござりましょう」
「聞いておろうか、かつらのことじゃ」

「ああ、聞いておりまする」
かつらとは、今度の戦さで生き残った元大納言平時忠の娘のことである。凱旋して数日たった頃、後白河法皇の強い勧めでかつらを妻に迎えることになった。
敗者の名門が、娘を献上するということは珍しいことではないが、佐登の手前遠慮した。それに鎌倉への思惑もある。あの頼朝が何を言い出すかわからない。
それを断りきれなかったのは、強い法皇の要請があったからだ。政治感覚の鋭い法皇は、鎌倉の抬頭を牽制すべく、京における武家を温存させる必要があった。そのためにはこの際、源氏と平家を融和させなければならない。その融和策として、平家の娘を義経の妻に送りこむことであった。
これぞまさに政略結婚以外の何ものでもない。佐登にそれを告げると、
「わたしというものがありながら、どうしてお断りにならなかったのです」
と激しく抗弁した。それを宥めたのは乳母のこよである。
「これは一時の策にござりましょう。『平治ノ乱』で敗れたときも、平家は頼朝様や、常盤様母子を目こぼしされました。今回の目こぼしが、かつら様でござりましょう。よってこれはあくまでも形の上のことで、時忠殿を生かす一時の策」
そう言われては返すことばもなく、佐登は黙るしかなかった。
そしてかつらが堀川館に入り、平時忠は近くの小さな屋敷の住人となって世間の

目から逃れた。

静もこのことはわかっていた。ただこのことが、のちのち義経にとって不利になるのではないかという懸念があった。

「ところで鎌倉から、こたびの戦勝のことで沙汰がござりましたか」

義経は驚いた。静がまさかそんな問いをしようとは思いもよらなかった。

「ない。わしには兄上の心中がわからぬ。したがどうしてそなた、そういうことを言う」

「女の余計な嘴かもしれませぬが、これは母から教えられたものかもしれませぬ」

法皇はじめ、堂上人や京の富家で静の母、磯ノ禅師の名を知らぬ者はない。出自のことは不明だが、歌舞を論じ、歌と舞の気品は他の追随を許さず、古くから御所へも出入りしている。ゆえに歌舞のみならず、自と政治的感覚も身につけたようだ。

「勝手な言い条かもしれませぬが、かつら様のことはともかくとして、平時忠殿をこのままにしておくことはお館様の障りになりましょう」

「ほう――そなた」

(よくそこまで気の付く女子じゃ)

「宗盛殿や囚人たちは、いずれ鎌倉に送るか、こちらで(首を)打つことになりましょう。かつら様の父君ならば、その前に手を打たねば」

静の愛の深さと、怜悧が身にしみる。

この後、義経は早速時忠の能登配流を決めた。

数日して、こっそりと夜更け、義経の部屋の庭に時忠が現われた。時忠は、膝をつきながら、

「判官殿のお情け、忝うござりまする。能登へ下りましたらば、必ずや慎ましゅう生きますほどに。かつらをよろしく……」

と声涙ともに下った。時忠が能登へ発ったのはそれから二日後であった。

(二)

義経が凱旋してから、平泉の使者が二度やってきた。秀衡からの祝いの文かと思ったら、なんと平家の残党と組んで鎌倉を攻めよという内容である。義経は困惑した。

「御所様(秀衡)の本意がわからぬ」

そんなことを話し合える相手は吉次である。

「殿はまだ鎌倉殿を信じておられまするのか」

いきなり吉次は言った。
「そりゃ兄上じゃからな」
「それが甘えというものでござる。某、頼朝殿をこの目で見、これまでの殿への仕打ちを見まするに、兄弟などという血の温みなど微塵も感じられませぬ。いや、むしろ冷たく厳しゅうござる」
「どういうことじゃ」
「まず兄弟といわれましても、一般の民、百姓と異なり、高家では嫡兄と庶弟は天と地ほど立場が違いまする。黄瀬川でのご対面、それから鎌倉八幡宮での馬曳きのことを、よもやお忘れではございますまい。頼朝殿を、兄上などとは思し召されまするな。殿は鎌倉殿の御家人の一人にござります。鎌倉殿は勿論、景時はじめ、鎌倉からきた兵たちも皆そう思っております」
「したがわしの命懸けの戦功を、どう思っているのじゃ」
「それではお訊ねいたします。殿の命懸けは一に鎌倉殿への為でござりましたか――」
暫く答えに詰まった。
「そうじゃな、率直に言うなら鎌倉の為というより、父の仇討ちという方が当たっていようか。それにわし自身の気負い」

「殿の甘えと気負いを、鎌倉殿は見抜いておられます。それはもしかしたら鎌倉殿には迷惑、いや脅威。主従の関係には、甘えと気負いは許されませぬ。それを断つのが党の棟梁。それに反するときは、追放か成敗ということになりまする」
「したがわしは兄上を凌ごうとは思ってなぞおらぬ」
「先も申しましたが、その兄上というおことばをお使いなされまするな。鎌倉殿でござりまするよ」
「……」
「それで平泉へは何とご返事なされまする」
「したが平泉はどうして兄上を、いや鎌倉を討てというのであろう」
「殿は今、見事に平家を討たれました。そして法皇の寵を得られるということは、鎌倉にとっては脅威。ことばは悪うござるが、殿に平家を滅ぼさせておいて、次は邪魔になる殿を除かんと――。
平泉にはそれが見えているゆえに心配されておられまする。そればかりではござらぬ。いずれ鎌倉は平泉にも攻め上らんと――これは前々から予見していたことでござる」
「鎌倉が平泉へじゃと？」
「鎌倉殿の目ざす武家政権は、北から南と、全国を視野に」

「したがわしは、平泉と同心して鎌倉を攻めようなど考えてもおらぬ」
「ではその前に、殿が鎌倉から攻められたら何となされまする」
「どうして鎌倉がわしを――。わしは何も鎌倉に叛意などないではないか」
「殿になくとも、鎌倉殿にありと見えまする」
義経とて、それくらいの懸念を持たないわけではない。しかし、これほどはっきりと吉次から言われると、いよいよ気が重くなる。

一方、頼朝は既に義経を見限っていた。奥州から駆けつけてきた義経と黄瀬川で対面したときから、義経という人間を見抜いてしまった。十二歳違いの弟に、少年のような甘えと気負いを見た。

たしかに彼は戦さの天才ともいうべき能力を持っている。しかし、あの種の人間に官位や権力を持たせたらどういうことになるか――。

義経はあくまでも鎌倉御家人の一人であって、頼朝の弟などという血の甘えと奢りは許さない。

その義経が、法皇の術に嵌まって官位を得、つづいて鎌倉から送った郎党のうちの二十数人までが官位を得た。これでは鎌倉の立つ瀬がない。

それに奥州の藤原秀衡である。秀衡は法皇に金を送りつづけ、義経と与して鎌倉

を窺おうとしている。

更に不届きなのは、平時忠の娘を妻にしたことだ。ということは、いずれ平家の残党どもと組むということであろう。

それらを考えると、義経の用途は壇ノ浦で全て終わった。よってこれからの義経は、鎌倉にとって害になる。

その前に、京に在る兵を悉く鎌倉へ帰さねばならぬ。名目は、捕虜の護送と凱旋である。

文治元年五月五日、頼朝からの命によって、義経は威風堂々と京を発し、鎌倉へ向かった。

檻送されてゆく捕虜は元平家の総帥、平宗盛と清宗、信基、時実らである。

道筋に並んで見送る京人たちは、金の鍬形を光らせていく兜姿の義経と、かつては権勢の絶頂にあった平家の落魄を目のあたりにした。そして皆は、次は間違いなく義経の源氏の世だということを疑わなかった。

ところが行軍のきらびやかさと裏腹に、義経の心中は複雑に縺れていた。この四月末、頼朝から田代信綱宛に下文が送られてきていたのだ。

信綱は源為綱の子で、頼朝が伊豆で旗上げしたとき頼朝に従って石橋山で活躍

し、その後は義経軍に属して、一ノ谷・屋島・壇ノ浦を共に戦ってきた男である。信綱に宛てた下文の内容は、義経指揮下の家人に義経からの離反を命ずるものであった。

（やっぱり鎌倉殿は）

頼朝からの義経排除の下文を見せられ、吉次の言ったことが単なる憶測でないことがわかった。それでもまだ心の隅に、

（兄弟だ、会えば解る）

そんな情緒がある。それが膾（なます）のように切り刻まれていくことを、まだ知らない。

東海道は晴れの日が多く、表面は穏やかな旅である。蒲原を過ぎ、富士を仰ぎながら箱根にさしかかった。芦ノ湖畔で休息していると、下の方から十数頭もの馬蹄の響きが聞こえてきた。

一行は立ち上がった。先頭は野良着に兜をつけ、裸身に鎧を着ただけの者もいる。十数騎である。

（賊か）

と思ったが、

「義経殿、お覚悟！」

の一声でこれは山賊に非ず、鎌倉からの廻し者とわかった。敵はすかさず弁慶や

忠信、三郎義盛によって倒され蹴散らされたが、義経の気持ちは沈んだ。

「判官殿、油断なりませぬぞ、鎌倉殿は」

まさか待ち伏せさせて道中の義経を襲うとは――。

「引き返されては」

「いや、ここまで来たのじゃ。それに捕虜を送らねば」

義経の決意で、それから進むことになった。

酒匂川（さかわ）の宿に入ると、なんと鎌倉からの使者がやってきた。それも北条時政である。時政といえば頼朝の妻政子の父である。それがわざわざこんな所まで一体何のために――。

時政とは初対面ではない。黄瀬川でも八幡宮でも顔を合わせているが、狷介（けんかい）で傲慢である。その時政から、なんと、宗盛ら捕虜の引き渡しを要求された。

「いや、われらは鎌倉殿の命令により、こうして護送している」

と言えば、

「それが途中で引き取って参れとのお指図じゃ」

と強引である。相手が相手だけにやむなく引き渡すことになった。

（われらに護送を命じておきながら、何ゆえ途中でそんなことを）

義経一行は不満というより怪しんだ。すると入れ違うようにしてまたまた使者が

現われた。今度の使者は小山朝光という若者だ。使者の口上は、
「これより鎌倉へ入るべからず」
というものである。
「何をもって？」
いきり立つ弁慶らの問いに、朝光は黙って答えない。答えられないような男を差し向けたともとれる。義盛が刀の柄に手をやった。それを義経は目で制し、朝光を出口まで送った。
「殿、ご決意なされ！」
「鎌倉は殿を潰す算段でござるよ」
彼等は義経に迫った。義経もその気になったが、今ここで鎌倉を奇襲するにしても、百騎そこそこでは勝ち目はない。
折角ここまで来たからは、せめて鎌倉の鼻先までと義経は腰越まで足をのばすことにした。
腰越は相模湾に面した漁村で、頼朝が鎌倉に入るまでは、侘しい寒村だったが、今は鎌倉へ出入りする人たちのために、茶店や宿が設けられている。
一行は満福寺に入り、鎌倉の反応を待つことにした。しかし、数日がたっても何の音沙汰もない。そこで遂に義経は、最後のいわば泣訴状を書き送った。世に「腰

越状」といわれるものである。
中味は、鞍馬山から今日までの来し方、即ち平泉までの苦難の旅、そして黄瀬川の対面から壇ノ浦までのことを、悪びれず連綿と綴った。些か情緒的にはなったが、義経の偽らざる心情であった。
しかし、それから四日たっても鎌倉から何の音沙汰もない。ということは、義経のいわば最後通牒というべきものまで無視され足蹴にされたということだ。
そのとき義経の脳裏に、はじめて藤原秀衡の顔が蘇った。
（わしは平泉と連携するか）
六月九日、寺の境内が騒々しいと思ったら、なんと鎌倉から宗盛・清宗らが逆送されてきたではないか。口上は、これらを護送して京へ戻るべしという命令であった。
（虚仮にしおって！）
どの面下げて彼らを率いて京へ戻れるか。
（いよいよわしは鎌倉に叛かん）
義経がはっきりと決意を固めたのはこのときである。
そこで帰途、近江の篠原でやむなく宗盛らを斬り、京へ戻ってくると、なんと義経に分けられていた元平家の領地二十四カ所が頼朝によって没収されてしまってい

た。腰越で無為に日を送っていた間のことである。
（鎌倉は本気で潰す気だ）
義経を丸裸にしたも同然である。
更にまずいことが起こった。新宮蔵人行家が義経を頼って堀川館に転げ込んできたことだ。
行家は義経・頼朝の叔父である。それに、かつて以仁王の令旨を諸国に持ち回り、源氏旗上げの功労者である。ところが頼朝と不仲になり、鎌倉を出ると木曾に走り、義仲と共に京に攻め上った。しかし義仲が敗死すると法皇の許に出入りしては策謀を進言などしていた。その行家が堀川館に入ってきたことが、鎌倉方の密偵に知られていた。
頼朝の差し向けた刺客は土佐坊昌俊という男である。昌俊は元義朝の郎党で、頼朝に仕え、平家討伐に当たっては範頼軍に属していた。彼が選ばれたのは近江に生まれ、叡山寺領の年貢の世話をしていたことから、京周辺の地理に明るいからである。
十月十七日の深夜、手勢三十騎をもって堀川館に侵入した。ところが館の中はシンとして静まり、慌てふためく男の気配がない。おかしいと思いながら進むと、彼方から鼓の音がしてくる。そこは対の屋である。

鼓はそこから聞こえてくる。さては女とまだ遊んでいるのかと、部屋の戸をサッと両開きした。すると不思議なことに、部屋の中は女一人で、灯を前に無心に鼓を打っている。
「女――義経はどこにいる」
静であった。彼女はかくあることを覚悟していたらしく、顔色一つ変えず、
「お館様は今朝から兵を連れて出ていかれました」
と涼しげに答えた。
「出て行ったと!?」
昌俊らは一瞬呆気にとられた。そういえば館の内外、森閑として人気が感じられなかった。
と、急に馬蹄とざわめく人声がしてきた。それは外から逆に攻めこんできた義経勢だと気が付いた。
「さては謀られたか」
「土佐坊、おぬしらの動きなど前からわかっておったぞ――」
続々と集まってきた義経勢に、昌俊勢は押された。そして戦さは五条大橋付近に移動したが、そこで昌俊勢は全滅した。ところが昌俊の姿がなく、必死の探索を行った。そしてとうとう鞍馬山に潜伏しているところを見つけた。

「鞍馬とは遠くへ逃げたものよ」

昌俊の首が六条河原に梟首されたのはそれから三日後であった。

(三)

十一月七日未明、摂津大物ケ浦を二艘の唐船が密かに出ていく。義経主従二百騎の中に、女人十余人が混じっている。静に久我大臣、唐橋大納言、鳥飼中納言の娘らである。佐登がいないのは、行き先の苦難を慮り、河越に戻ることを勧めた。それに妊っていたからだ。

乗船の目的は西国行きである。頼朝追討の院宣が下されたといっても、畿内には既に鎌倉の将兵が潜み、摂津源氏多田行綱の攻撃も受けた。そうなると目ざすは西国九州の地で、捲土重来を期さねばならない。

ところが午過ぎ頃から黒雲が空を覆い、時化の前触れがあらわれてきた。船長は一旦引き返すと言い出したが、それにしても既に陸から離れ過ぎていた。

そうしているうち、突風と大波に襲われるようになり、楫も利かず強風と雨に帆も下ろせない。遂に楫も帆もなくなり、船は大波の奔弄に任せるだけになった。

(屋島へ渡るときと同じではないか)

義経の肚は決まっていた。しかし、女たちの悲鳴と船酔いに、船中は地獄である。

そして夜明け、どうやら時化のおさまった海の彼方に、うっすらと黒い陸地が見えてきた。

「助かったぞーッ」

「和泉ノ浦じゃ」

船頭が言った。

「和泉ノ浦と言うてもどの辺りじゃ」

「陸の形からみて、どうも淀の口が近いようで」

「ということは、大物ケ浦に吹き返されたというのか――」

ともかく一同蘇生の面持ちである。しかし、もう一艘が見当たらない。ということは、兵の半分を減らしたことになる。そして船頭に渡した金で路銀も半分になってしまった。

「殿、これから船を調達するも難しく、まずは女人を京に帰させ給え」

弁慶らの発言で女人たちを京へ帰すことにした。濡れた袿を小袖に替え、馬一頭に二人ずつ乗せて京へ急いで走らせた。ところが一人、戻ろうとしない女がいる。静である。

「お帰りなされ、これからは苦難の道じゃ」
いかに諭しても静は首を振らない。そして、
「果つるときは殿のお側で」
と繰り返す。そこで止むなく連れることにしたが、一行にとって静の存在は邪魔としか言いようがない。ともかく近くで身を潜めるとしたら天王寺である。天王寺の寺司がこの辺りの長者で、宿坊の当主でもあり、かねがね義経に好意的だからだ。
「別当の眼もありますゆえ、明るいうちは境内に出られぬよう」
と宿坊の当主は気を使ってくれた。そこで二日間、静の体を思って長居した。
「どうじゃ、付いてこれるか」
小袖に黒脚絆、市女笠に替わって男笠をつけた静が馬の背に揺られていく。
男たちの迷惑と裏腹に、義経はそんな静を愛しく思い、静もまた落ちぶれた義経に却って強い思慕を覚える。静の愛はそれほど深く、人間的なものであった。
天王寺を未明に出て南を指した。錦織を過ぎて長野へ出る。そこからは山道である。一日中騎乗して、はや陽は暮れかかり、この分では野宿である。雪のかむった蔵王峠が見え、寒気が体を差してきた。
「寒いじゃろ」

男たちは衣を一枚ずつ剝いで静の背に着せかける。静は涙が出そうになる。京の公卿たちにこんな優しい男がいたであろうか。
武士は猛きものと思っていたが、心根はむしろ優しく温かい。静が義経に惹かれてきたのもそういうところだ。
野宿の火を焚き、つい暖められて眠った。そして気がつくと、鳴神、葛城、生駒という山の名が聞こえ、それからまた、大峰、弥山、釈迦を経て熊野という名も聞こえる。
（一体どちらに？）
すると、
「大峰より吉野へ入るがよろしかろう」
という声は弁慶である。
「したが吉野は雪であろう」
そう言う義経は、静を気遣っているようだ。
「暫く吉野に潜まれますれば、某が都へ入り、様子を探って参ります」
（吉野か――）
静は眠ったふりをして、男たちの話を聞いていた。
吉野は金峰山を頂に、山裾を吉野川が流れる。金峰山の下にあるのが金峰神社、

蔵王堂である。吉野川を奥に遡ると大峰に至り、そこが山伏修行の修験場である。金峰山寺山伏を、世に吉野山伏という。しかし、吉野山伏が義経の味方になってくれるかどうかはわからない。

交替しながら焚火の火を守っていたらしく、夜が白んできても火は赤々と燃えている。

出発に当たり、馬を放つことにした。山路を忍びながら往くには馬が目立つからだ。いよいよ静も歩かなければならなくなった。そうなると歩行はなかなか捗らない。

静は一行の荷物になっていることを自覚した。

（いつまでもこうした道行きはできまい）

義経もやはりそう考えている。いかに愛しい静といえど、女連れでは皆の行途に障りが生ずる。

ようやく右が大峰、左が蔵王堂の岐れ路にある吉水院にきた。雪は踝まであり、足もとから冷えが伝わってくる。と、弁慶が義経に言った。

「殿もお気付きと思いますが、これより先は修験の霊場でござるゆえ、女人禁制となっております」

「うむ、そうじゃな」

義経は頷いた。

「捨てかねて、つい道連れにしてきたが、おぬしたちに面倒をかけてきた。面目もない」

そう言うと義経は吉水院の階で休んでいる静の側に歩み寄った。

「疲れていような、静」

「いえ、殿のお側なら」

それを言われては返すことばがないではないか。義経は静の冷えきった掌を取った。

「聞きわけてくれ、静よ」

それだけで静は、これから何を言われるかを察知した。すると涙がハラハラと頬を伝った。

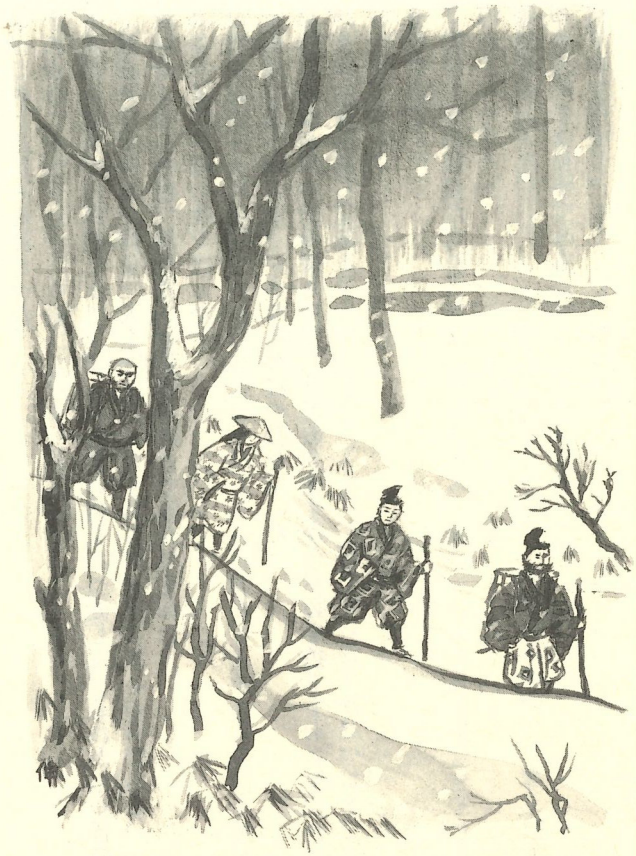
（ここまで付いてきたものを）

たとえ落ちぶれてゆく義経であっても、それだけに愛しさはいや増す。このまま野に果て朽ちるとも、義経と共にあるなら——と思えばこそ付いてきたのだ。

「これからは女人禁制の霊場となる。よってそなたを連れることができなくなったのじゃ」

その理のわからぬ静ではない。それゆえに悲しい。

「静よ」
両手を取ってくれる義経の目にも、涙の露が光っている。
（この人はわたしを愛しんでくれている）
難行苦行の道行きで、静一人を背負いながらの道中であった。それだけで十分ではないか。
（わたしはどの女よりも愛された）
これ以上気儘を通すことはできない。
「わかりました。わたしの気儘が、どれほど皆様の足手まといになりましたことか」
「そうか、了見してくれたか」
すると義経は鎧の下から一面の鏡をとり出した。
「これは母の形見じゃ。よってわしは片時も離すことがなかった。これをそなたに――わしと思うて手許に」
「有難うございます」
それと笛一管、これは鞍馬時代から用いたもので、弁慶との出会い、五条大橋の上で吹いたものである。
「ああ、笛でございますね」



静はこのとき笑みを浮かべた。

「それから……」

と義経は京までの路銀として、ずしりと重い袋を二つ渡した。それから一行の中で、渡辺ノ津で雇った雑色三人を呼んだ。いずれも四十そこそこの男である。

「よいか、近くの村で馬を買い、静殿を京まで運んでくれ」

とこれまた所用の金を渡した。

「それでは」

と静は立ち上がると、いきなり義経の腕を引いた。

「京にて殿のお帰りをお待ち申し上げておりますゆえ、必ず必ず――」

縋るような眼差しである。

「わかっておる」

「それから……」

と静は一寸口籠った。

「何か？」

「実は殿のお子を」

初めて明かす秘事である。

「何、わしの子じゃと！　いつ頃じゃ」

「来年の夏頃かと」

「そうか。それまでにわしは凱旋せねばのう」

懐妊と聞いた義経は、一入優る絆を感じながら、未練の尾を引いて静を見送った。

しかしこの時、既に法皇は頼朝の要求を呑み、義経・行家追討の院宣を下されていたのである。

三人の雑色に挟まれるようにして山を下りた。男たちは折々咳払いはするものの、無口である。何度か休みを取り、吉水院の近くで湯茶を商っている店で食べ物を求めたらしく、午餉を三人と共にした。

男たちはなぜか押し黙ってものを言わない。それは実直ともとれ、また不気味でもある。

陽が傾きかけた頃、男たちは静を村の小さな堂に休ませると、

「夕餉を買うてきます」

と言って離れていった。それからどういうものか、一時（約二時間）たっても帰ってこない。あたりは早、夕闇に包まれてきた。

（さては逃げられたか）

静はここに至って気がついた。あのとき渡した銭袋の一つも、つまりは盗み去ってしまったようだ。

（迂闊であった）

はじめから彼等はその気であったのだ。それにしても、薄暗くなった古堂の周囲は森閑として寒さが攻めてくるばかりだ。

（たとえ物盗りでもいい。人がいてくれた方が……）

そんな人恋しさを覚える。雪の吉野の山中で、女一人とり残されたということは、死を予感させるものがある。

涙が溢れてきた。置き去りの孤愁――その静を立たせたのは、腹の子を意識する母性であった。

よたよたと行くと、彼方から数人の男たちの群が近づいてきた。近づいてくるや否や、

「そちは、もしかしたら静ではないか」

いきなり名を言われ囲まれた。かくなる上は覚悟しなければならない。息を吐いてから黙って頷いた。

「やっぱりそうか。なら聞かせるが、義経追討の院宣が出ているのじゃ。よって義経の行く方を聞かせよ」

静はハッとしたが、そこは愛の度胸が据っている。

「わたしに何がわかりましょう。わたしはただ義経様の後を追いかけただけで――それでもこうして置き去りにされました」

と瞼を押さえて泣いてみせた。

「さもあろう」

男たちは暫く小声で話し合ったが、もはや暮れた雪の中、探索を諦めたようだ。そして静を伴って夜の宿に入った。

明くる日、静は馬の背に乗せられて二日かかって京に戻った。すると、京の入口に武者が十数人立っていた。こちらは刀剣を提げている。

「義経の妾、静でござる」

「ほう――静か。して義経の行く方は？」

「この女だけが置き去りになっていました」

「さもあろう」

静はここで武者たちに引き渡されて別の馬に乗せられると、男物の笠をかぶせられた。

「どこへ行くのじゃ」

「そんなことは訊かずともよい」

（もしやしたら……）

鎌倉殿が来ているのではなかろうか。そこへ引き据えられるかもしれない。

市中に入ると、通行人は縄こそ打たれていないが、馬の背にうなだれていく細身の囚人に、哀憐の目を注ぐ。まさかそれが京一の舞姫、静だと気づく者はいない。

そして馬は堀川館の前で止まった。

堀川館はこの間まで義経の居館であり、また静の住まいでもあった。しかし門前の衛士の顔も既に変わり、出入りする武者たちの覚えはない。

（やっぱり頼朝殿が――）

暗澹とした。義経を追った頼朝の前に、今から引き出されるのであろう。

（かつての常盤ノ方様のように）

追われるようにして庭へ廻り、白州の上に座らされた。するとややあって奥の方から廻廊を渡ってきた男が広縁の床几に腰を下ろした。

「義経の妾、静を召し取りましてござります」

「顔を上げよ」

髪は乱れ、土埃に汚れた薄い着物で寒さに震えている。まるで乞食女が放り出された感じだ。

しかし、前髪の乱れを掻きもやらず見上げている女の顔に衝撃を受けた。

寒さと屈辱に打ち萎れながらも、その眼は差すようだ。それに粗衣に草臥れてこそいるが、凛とした美貌は損なわれていない。

「名乗れ、女」

「わたくしは元、判官源義経様の妾、静にござりまする」

部屋に引きあげてきた北条時政は黙然と火桶の前に座った。時政の心に初めて動いた憐愍の情である。

（哀れというより美しい）

坂東の武骨を地でいく時政だが、彼には十一人もの娘がいる。顔や言動に似ず、女の無事を願うようになったのは、そのせいかもしれない。

それに彼女は、政子の亡き母の面差しに似ていたではないか。

（斬るわけにはゆかぬ）

こうして危うく一命を拾った静は、母磯ノ禅師の住む白川の里に移った。とはいっても無罪放免ではない。年が明けたら鎌倉へ下り、頼朝の尋問を受ける身である。

外は雪が舞っている。火桶を真ん中に親娘は肩を合わせた。

「腹の子のこと、明かしたのか」

禅師は溜息まじりに訊いた。
「いえ」
「したが鎌倉へ着けば外見にも知れよう」
「……」
「今なら間に合おう。薬師に頼んで堕ろすことじゃ。その方がそなたのためじゃ」
しかし静は首を縦に振らない。
「もし男の子なら、捨てられよう。子の顔を見てからではもっと辛い」
禅師は白頭巾の裾を撥ねながら静に迫った。
「したが母様、男の子とも限りますまい。女子ならば、母様のようにこうして共に生きられますものを……」
静は肩で息を吐きながら、母の勧めを受けなかった。

第十三章　衣川高館

(一)

白川の里から風花の舞う市中を歩いてきた静母娘は、堀川館に一旦入り、それからは二基の張輿に乗って京を離れることになった。
二人が罪人としてではなく、舞姫母子の扱いを受けたのは時政の図らいであった。時政に、
「一度舞わせてみては」
と何人もが進言したが、敢えてそれを斥けた。さぞ美しかろう、一度見てみたいという男心が動かぬではなかったが、今度だけは勝者が敗者に強いたくはなかった。
(いずれ鎌倉で見ることになろう)

あの頼朝がそれを求めるはずだ。その席で観ればよい。それがわしの心というもの——なぜか静に心優しい時政である。

そして輿はゆるゆると京を離れていった。その輿を見送ったのは京人たちである。

「鎌倉の人になってはいけまへんよ——」

「必ず戻ってくだされや——」

そんな声々を、静はほろりとしながら聞いていた。

そして鎌倉へ入ったのは文治二年（一一八六）の三月一日であった。

鎌倉へ入ると、甘縄にある安達清常の屋形に入った。そこで長旅の疲れを癒すため、四、五日静養の時を過ごした。

そして六日、頼朝の屋形のある大倉の門注所に呼ばれた。門注所とはいわば警察・裁判を行う所で尋問を受けるためである。

そこで二人の公事奉行人から、義経とどこまで同行し、どこで別れたかなどということを、細かく訊かれた。しかし、そこでの取り調べも、威嚇的なものではなく、訊かれた内容も北条時政の調書と違いはなかった。

となると、何のために無力な女性をわざわざ京から呼んだのか——御家人たちの

間で話題になった。

「源二位殿の意図は？」

源二位殿とは従二位になった頼朝のことである。

「恐らく二位殿のご本心は、京一の美女という静を見たいのでは……」

「それに、白拍子の舞というものをご覧になりたいのじゃ」

「ほう、成る程、そうなるとその舞を舞わせる機会を作られるであろうなあ」

「ま、二位殿はあれでなかなか面食いじゃから。折あらば女子の一人や二人……」

「そうじゃ。御台所（政子）がきついゆえ、思うようにはならぬようじゃが、ああ見えて二位殿は女好きじゃ」

そんな憶測や噂どおり静の舞が実現することになった。四月八日、鎌倉八幡宮の祭りに頼朝が妻政子と共に参詣、そこで静の舞を奉納させ、上覧というものである。

「それではわれらも相伴にあずかれるわけじゃ」

と御家人たちは喜んだ。そして百人に余る木匠が八幡宮に集められ、拝殿の修理から、舞殿の三方に桟敷を造り始めた。

ところが八幡宮奉納の舞要請に、使者としてやってきた工藤祐経に、静は断わってしまった。その理由として、初めて身重であることを告げた。祐経は、

「そは一体誰のお子じゃ」
と訊ねた。
「勿論、義経様のお子にござりまする」
聞いて吃驚、祐経は直ちに頼朝に告げた。
「ほう、義経が子を……」
考えられぬことではない。しかし、まだ先のことであろうし、姿態が目立たなければ舞わせなければならない。なぜなら木匠たちが既に工事にかかっているのだ。
それを今更、静の言で止めさせることはできない。それは頼朝の沽券にかかわる。
「余の命令じゃ。舞わせろ」
頼朝は不機嫌であった。義経の子を孕んでいる女が、頼朝の命令を断わるとは何事だ——。それに、京一の美女が義経の子を孕んでいることへの妬心もある。ともかく静を見たいという男心がうごめく。
その日、舞殿をめぐる桟敷に金屏風や緋毛氈が敷かれ、周りには五色の幔幕が張り廻らされた。
簾の中は頼朝と政子、娘の大姫の三人である。それに左右には主だった御家人と女房たちが晴れ姿で居並んだ。

そして桟敷は御家人・郎党たちで埋まり、境内も鎌倉内外から集まってきた人々で埋まっている。かつてこれだけ多くの人々が集まったためしがない。それほど京の白拍子の舞は人々の耳目を集めた。
歌方もそろい、銅拍子、笛、小鼓の三人が舞殿にのぼり、揃って手合わせを始めた。
舞殿の袖に立った静は瞑目した。
（ここは敵地だ。そこで何故舞う）
それは一に、神前に義経の無事を祈らんがため、それから京白拍子の舞を、頼朝はじめ関東武者たちに披露せん。そのためには華麗に雄々しく舞わねばならない。
（わたしの存念と意地を——）
静は舞を承諾したときから、決まった歌詞のほかに、己が歌詞をも考えようとした。
白小袖に唐綾を上に重ね、胸高に着けた緋の袴の上に、萌黄色の水干を着て、高々と髪を結いあげた静が、爪紅の中啓を手にしてゆっくりと舞殿へ進み出た。
「ホウーッ」
小波のような嘆声が起こった。鎌倉ではかつて見たこともない美しさである。
笛と鼓、それからひときわ高く銅拍子が鳴って、歌方がうたい始めた。そして、

「万(よろ)ず代も　生(お)い添う松の　枝ごとに……」と歌が終わると、静はゆっくりと神前へ歩み寄った。満座は寂(せき)として見入った。

　すると笛が一声ぴゅうと高く鳴り、静はやおら透(とお)る声で歌いながら舞い始めた。

「神山の岩根の松は　言わねども……」と以下歌いながら中啓を開いてすり足で「岩根の山」を舞う。萌黄の水干の大袖が蝶の翅(はね)のように舞い、緋の袴が目に沁みる。

　歌が中段へとすすみ、鼓と銅拍子の音がゆるやかになってきた。今度は「鶴の子」の歌である。ところが「鶴の子」の歌詞が終わりに近づいたとき、意外なことがおこった。別な歌詞が歌われだしたのである。しかも朗々とした声だ。

「吉野山　みねの白雪　踏みわけて
　入りにし人の　跡ぞ恋しき」

　白拍子の歌詞を知らぬ者は、その歌詞に疑義を挟む者はない。陶然と静の歌と舞に見惚れ、聞き惚れるばかりだ。

　しかし、列座の楽頭や、頼朝はじめ、歌詞を心得ている者たちは喉がつまり、手が震えた。

（何たること――）

　即興かもしれぬが、鎌倉殿の御前で、義経を恋うる歌を歌うとは……。

　頼朝の顔に忽ち険が立ち、重臣たちも青ざめた。その中に北条時政がいた。しかし時政の顔に動揺はない。

　さりとて途中で止めさせるわけにもいかず、歌は更につづいた。そしていよいよ舞納めの後段を知らせる銅拍子が鳴った。

　本来ならここで「神明ここにましませば」の舞に入るはずだが、またも思いもかけぬ歌が歌われはじめた。

「しずやしず　賤(しず)のおだまき　くりかえし
　むかしをいまに　なすよしもがな」

　歌が終わったとき、祐経は蒼白になって終曲の鼓をひときわ高く打ち鳴らした。

　満座は水を打ったように静まり、感動と興奮の余韻が残(あと)を引いた。ところがここで感情をむき出しにした男がいる。頼朝である。

「不遜じゃ、許せぬ」

　それを予知し、恐れたのは時政である。時政は政子の方へ向いて目で合図した。

（鎮めよ、鎮めよ）

　政子はその意図を解(げ)しかねているようだ。すると思いがけないことが起こった。

　簾がさらさらと落ちたとき、忍び泣く声が聞こえ、頼朝夫妻はびっくりした。見ると後ろに座っている大姫ではないか。

「どうした？　なぜ泣く？」

大姫は頼朝夫妻の長女で、十七歳になる。

「静殿があまりに哀れで――。わたくしには静殿の気持ちが悲しいほど解ります。父上様、静殿をお許しなされて」

意外なことである。まさか娘が静をとりなそうとは……。

しかし、これには訳がある。今から五年前、木曾義仲の子清水冠者（義高）が鎌倉へ人質として送られ、大姫と娶せた。ところが義仲の上洛後の独走を討つこととなり、義仲の討死後、頼朝は義高まで武蔵の入間川で討ってしまった。

愛する義高を父によって奪われた嘆きを、静の歌に思い出して涙したのである。政子は直ぐにそれを察し、

「大姫の嘆きと涙がおわかりになりませぬか。女子の心も察せられでは、真の将軍にはなれますまい。静とて、ああして歌うことが精一杯の真情の吐露だったと思いまする。哀れとこそ思し召されませ。静はただの白拍子ではありませぬか。何の力もない哀れな女子でござりまするよ」

政子から窘められ、娘の涙を見るに及んで、さすがの頼朝も怒りを鎮めねばならなくなった。そこで用意しておいた卯の花襲の衣装を敢えて静に贈与した。

この逸話は、瞬く間に鎌倉中に知れわたった。

「貞女じゃのう」

「大胆というより見事じゃ。さすがの鎌倉殿も一体参られたか」

「もう一ぺん観たいものじゃのう」

等々、鎌倉市井の語り草になった。

静母子は、これで京へ帰れるかと思ったら、産を終えて身軽になってから――と言われ、そのまま安達館に滞留することになった。

そして春を送り、夏のさ中、つまり七月二十九日、男児を出産した。

静を長く逗留させたのは、静の腹の子がもし男児ならば、始末させねばならぬと頼朝並びに側近が考えたからである。

「始末をいかに」

頼朝は直臣四人に諮った。しかし、誰も押し黙ったままだ。すると口を割ったのは時政である。

「二位殿には、平家の尼殿（池ノ禅尼）に一命を拾われまいた。こたびの子は、何も平家の子に非ず、ご舎弟のお子なれば、何も死なすことはござりますまい。鎌倉にて養わば、いつの日か鎌倉の為になりましょう。よってこのまま、安達の館で育てるか、あるいは鎌倉内の寺に入れるか、いかがでござろう」

ほかの三人もそれに同調した。ところがそれを拒んだのは頼朝である。

「ならぬ。処置いたせ。海など山など、いずれかに棄つることじゃ。余の命令じゃ」

と言い捨てて頼朝は立ち上がった。

そうして赤子は取りあげられ、安達新三郎清常によってその日のうちに由比ケ浜の海に棄てられた。

静がそれを知ったのは翌日であった。狂わんばかりの悲嘆を慰めるのは付き添う母のみである。

「諦めなされ。わたしの言うた通りであったろう」

その通りだ。それにしても、顔も見ずに捨て去られたことが悔しい。

「顔を見たら、そなたはもっと辛かろう。狂うかもしれぬわなあ。死んで生まれたと思いなされ」

一言、一言、母のことばが身に沁みる。

八月半ば、産後も癒えて、静母娘は鎌倉を離れることになった。往きと同じ張輿の後に、荷車一杯の荷は、政子母娘から贈られた財宝であった。

賢夫人政子の方の顔は目に浮かばぬが、八幡宮の舞殿で、静の歌詞に泣いてくれたという大姫の顔のみ網膜に残っている。

（あの姫には人の悲しみも情もわかっている）

そして秋、静は京へ戻ってきた。京人たちは、いろいろと鎌倉でのことを訊ねてくれるが、一人微笑みを返すだけだ。それより義経の消息の知れぬことが淋しい。

「静はん、白拍子をやめはったと」

京中に噂が広がり、人々を寂しがらせた。

（二）

文治三年（一一八七）春、義経は平泉に入った。

二度目の懐かしい平泉である。十三年前、吉次（きちじ）に伴われてやってきたときに比べると、何たる違いであろう。

静と別れて吉野から奈良へ、そして伊賀・伊勢・美濃へと逃走し、その間、都にも何度か立ち戻り、鞍馬や比叡に身を潜めた。しかし、今やどこにも身を置くことができず、つまりは平泉を最後の拠り所とした。

一ノ谷・屋島・壇ノ浦と、千軍万馬全て義経の意に叶い、まさに旭日昇天の勢いであった。それがひとたび崩れかけると、人も兵も背を向け、掌の中の砂の如く消えてしまった。

（全てこれ鎌倉の意向）

頼朝の恐さを身に刻んだ。

（自分はやっぱり甘かった）

七年前、平泉を出るとき、秀衡は何度も止めた。頼朝という人間をわかっていたからだ。それを振り切ったのは、ひとえに兄に会いたい一念だった。

その兄に、ここまで追い詰められ、やられようとは——どの面さげて秀衡殿に見えん。

山伏姿に身をやつした難行苦行の逃走を共にしてくれた十二人。亀井六郎・片岡八郎・駿河清重たち。その中で最も力になってくれたのは弁慶である。弁慶がいなかったら、北国路で加賀富樫荘や、越中如意の渡り（小矢部川の渡り）を抜けることはできなかった。

「弁慶よ……」

平泉の吉次の屋敷で、心身共に疲れ切った義経は、思わず吉次と弁慶の前で涙をこぼした。

「そちたちに報いることとて何一つなく、苦労をかけるばかりじゃ」

「何たるお心根の弱い。某は打たれ強うござるゆえ、何とも苦しいとは思い申さぬ。それより暫く休まれたら、伽羅御所に参上いたさねば」

と逆に激励される。

替わって吉次が小声で言った。

「驚かれる前にお話ししておきまする。伽羅御所に上られますと、佐登様と姫様がおられまする」

「何、佐登じゃと——して姫とは？」

驚いた。

一昨年の十一月西国行きを決意して大物ケ浦から船出する前、懐妊していた佐登の身を気遣い、河越へ一時送り帰した。

ところが父河越重頼は義経の舅として、既に誅されてしまっていた。そこでやむなく平泉を頼ったようだ。

秀衡は快く佐登を受け入れ、伽羅御所内の部屋を与え、そこで佐登は姫を出産したという。

「そうじゃったか。彼女にも苦労をかける」

それにしても温かいのは秀衡である。

四、五日して義経は弁慶と吉次を伴って伽羅御所へ上った。

広い邸内や連なる庭も、あのときのままである。しかし、風雅と温顔の秀衡の衰えが目立った。

「お懐かしゅうございまする。かつて深いご恩情にあずかりながら、こたびは尾羽

打ち枯らして再び参上いたしました」
手をついた義経は暫し顔が上げられなかった。
「判官殿」
「いや、今は無位無官の逃亡者にござります」
「それより顔をあげられよ」
秀衡は、かつて愛した若者の相貌をつくづくと見つめた。
（苦労された――）
一目でわかる変貌に、瞼の裏が潤った。ところが口を衝いて出たことばは厳しかった。
「遅かったぞ義経殿。戦さには時機というものがあることぐらいお解りであろうに。どこをうろついておられた」
「は、はあ」
「余は何度そなたに使者を送ったことか」
壇ノ浦の戦勝後、平家の残党と組んで鎌倉を攻めよという書状であった。すれば奥州と呼応して、鎌倉など容易に倒すことは可能であった。それを義経は頭から消し去った。その結果がこの為体（ていたらく）である。
「某（それがし）の不明、愚昧（ぐまい）にござりました」

「その通りじゃ」
「したが今からでも某、発（た）てまするが」
しかし秀衡は答えなかった。一年半の逃亡が、義経の相貌を変えてしまっている。この憔悴からみて、それだけの体力と気力が疑われる。
それにこちらの戦機も逸している。つまり鎌倉はあれから着々と布陣の網を張りめぐらしてしまった。それが逃亡者には見えていない。
「義経殿」
「はっ」
「七年前、血気にはやるそなたをなぜ止めたか。鎌倉殿が何を考えているかわかっていたからじゃ。鎌倉殿は平家征伐と同時に、この奥州も視野に入れていた。それが何ゆえかお解りであろうか」
「それは奥州における藤原氏勢力の大きさを無視できなかった……」
「そんなことは誰にでも言えることじゃ。よろしいかな、鎌倉殿の目当ては藤原氏ではない」
「と言われますと？」
義経は目を剝くようにした。
「われらの繁栄の基盤が何であるか。それは奥州で産出する砂金や馬、鉄、皮、絹

など、それが平泉の繁栄の基。鎌倉の目ざすものがおわかりであろう」

義経の人生で、そういうことを聞かせてくれる者はなかった。全て世の中は武力によって決まるもの、武力の背景に何が必要かなどということを学ぶ機会はなかった。

「某の無知、未熟にござりました」

「それだけではない。政（まつりごと）の非情さも知らねばならぬ。余が院に何を運び、院に何を働きかけてきたかを知っておられよう。みちのくは都から遠い。じゃからといって決して安閑としてはおられぬ。いつ、どこから鎌倉殿のような人物が攻めてくるかわからぬ。そういうものぞ」

「――」

「余が義経殿を必要としたのは勿論そなたの武力じゃ。そなたの武力をもって、わが息子たちを鍛え、奥州の守りを盤石（ばんじゃく）たらしめる、これが余の夢であった」

「なればあのとき、そのことをお指図いただきとうございました」

すると秀衡は皺の深い相貌をニコと和らげた。

「七年前のそなた、自分を思い出してみなされ。余の言うことなど耳に入らなかったであろう。ただただ、鎌倉の兄上――それのみじゃった。その兄上がどんな人物かなど、聞く耳もなければ、聞こうともしなかった」

「お恥ずかしゅうございまする。無念にござりまする」

「若いとはそういうものじゃ。そなたに学問の師を付けなかったことがこちらの不手際であった。人間は武術だけでは駄目じゃ。それではただの野狼じゃ。学問の素養を身につけてこそ、人物となる」

言われることが一つ一つ身にこたえる。自分はただ父の仇、源氏の再興のみを考え、逸（はや）っていた。それではただの野狼、武術士でしかない。

今（こ）のたびの失敗も、人間知らず、政（まつりごと）知らずの猪突にしか過ぎなかったようだ。そして猪は遂に牙を折られた。

「平泉でもう一度、立ち直ること叶いましょうか」

「そなたがその気になればのことじゃが、諸情勢をみて、余が最初に申した通り、遅かったということは確かじゃなあ」

「何が遅うございまするか」

「平家を滅ぼし、義経殿を追うた今、京は鎌倉源氏の掌握下となった。そして次は、法皇に武家政権を迫るであろう。その前に、この平泉を討つ――これが鎌倉の意図じゃ。そなたの帰りが遅かったことの意味がおわかりであろう。ものには時機というものがあるのじゃ」

秀衡は深い溜息をついた。

「それに……」

と言いかけて秀衡は口を噤んだ。

秀衡の言いそびれたことは、五人の息子たち、即ち庶子の国衡、嫡男泰衡、三男忠衡ほか二人の子らが、義経を立てて平泉を守れるかどうかだ。

七年前ではまだ武人としての義経の真価を見ることはできなかったが、壇ノ浦の戦いで凱旋した時期、平泉は大手を広げて迎えることができた。

そこで息子たちにも、戦術家の義経を認め、立てることができた。そして平泉軍団を組織し、次第によっては奥州十七万騎を率いて鎌倉攻略も夢ではなかった。

そのために何度か義経に使者を送り、平家の残党を率いて奥羽下りを勧めたものだ。そのときこそが、平泉にとっても義経にとっても大いなる時機であった。その時機を逸したのは義経である。

敗残者となった今では、息子たちにそれを言う迫力に欠け、息子たちがどう思うかもわからない。

そして今はっきりわかることは、頼朝が必ず北上してくるということだ。現に鎌倉からの義経引き渡しの書状を提げた使者がここに二度も往来している。

ということは、早晩、ここが戦場になるか、こちらから鎌倉討ちの兵を出すかである。

「義経殿、体力をつけて下され。余はそなたに賭ける夢は失ってはおらぬ。ただ、余も年じゃからなあ」

秀衡は呟くように言った。

柳ノ御所に近い丘の上に、新しい館が急造された。義経一家の住居が建てられたのだ。そして同時に弁慶ほか従者たちの住まいも館裏に造られた。

「何と有難い配慮であろう」

秀衡の要請にも応えず、つまりは尾羽打ち枯らした逃亡者を、またして温かく迎えてくれたのである。

十三年前、吉次に伴われて初めて登ったこの丘、前方に束稲の麗峰を、そして眼下を流れる北上、衣川の眺望は心を洗うが如きものである。しかし、あのときまさかここに館を構えるなど思ってもみないことだった。

抑ここは民部少輔藤原基成の屋敷の一部になってはいるが、今から百年以上前、安倍氏（宗任・貞任）の領内であったようだ。その安倍家の明神に高明神というのがあり、それがこの場所だったことから高館とも呼ばれるという。

「そのようなやんごとなき地に、どうして義経が館を？」

「御所様のお考えにござります」

「……」

「御所様は義経様を立てて、この陸奥を坂東より守らんとするお考えにございます」

兵之助という伽羅御所の家人からそれを聞かされ、義経は胸が熱くなった。

（御所様はわしをそんなに当てにしておられるのか。男冥利に尽きるわ）

ならば、今度は平泉のために起たねばならぬ。

元気の出てきた義経は、それから泉三郎忠衡らと共に、いよいよ練武に入った。

しかしここで気になるのは嫡子泰衡の態度である。

十三年前もそうだったが、義経を意識していながら、無視するような態度をとる。それがどこからくるのか、当時はわからなかったが、今はそれと察しがつく。

（御所様がわしに目をかけられるからであろう）

いわば男の嫉視である。

（いずれ時期がくればわかることじゃ）

時期とは鎌倉軍と戦うときのことである。しかし、それが意外な方向に向かうとは、このとき思いもつかなかった。

妻佐登、それにまだ一歳に満たない娘との生活は、神仏が三人に与えた最後の恩恵ともいうべきものであった。

「こんなに美しい都で、こんなに幸せな日々を送ろうとは夢にも思いませんでした」

静をはじめ、久我大臣の姫や平時忠の娘ほか、あまたの愛妾に苦しんだ日々、そして父重頼まで頼朝に討たれた佐登にとって、京は苦い思い出しかない。ところが高館の日々は、初めて味わう幸せである。

「もうわたしたちは京へ戻ることはありませぬね」

と佐登は義経の胸に顔を埋める。しかし義経には、この日々が最後の饗宴のような予感がしている。

耳の奥に、折々、遠雷のような鎌倉軍の鯨波が聞こえる。それを迎え討つことができるだろうか。この不安は、これまでの戦さにはなかったものだ。即ち藤原軍団に対する不安である。それを纏められるのは一に秀衡の存在である。その秀衡がこの頃衰弱が甚しい。

「御所様は今年いっぱい持ちましょうか」

この頃平泉ではひそやかにそれが囁かれている。

九月、月見の宴ということで伽羅御所に一族一門が集められた。義経も弁慶らと共に伺候した。

宴が終わると、国衡・泰衡・忠衡・隆衡が秀衡の枕頭に寄った。その中に義経と弁慶も加わった。ということは、子等に特別言い残すことがあるようだ。

「今宵義経殿に加わって貰ったには訳がある。それは平泉藤原の浮沈にかかる一大事のことじゃ」

と前置きして、自分の余命がいくばくもないこと。秀衡死せば、必ず鎌倉より義経を討てという宣旨を楯に攻めてくるだろう。その代償に、常陸国を与えるという馳走を鼻先にちらつかせながら——。

その術にゆめゆめ嵌ってはならぬ。兄弟一族一つになって向かうべし。そのためには義経殿を大将に立てること。なぜなら久しく戦さの経験のない平泉は、義経の戦術、武技なくして守ることはできないからだ。

このことよくよく臍を固めよ。でなければ平泉は滅ぶであろう。悲壮感を滲ませた言い置きであった。

それから一カ月余の文治三年十月二十九日、秀衡は死後を気遣いながら身罷った。鎮守府将軍・陸奥守享年六十六歳であった。

報せを聞いた義経は一瞬息が止まった。まさに奥羽の巨星墜つ。のみか慈父を喪った。義経の生涯で、これほどの慈愛を与えてくれた人はいなかった。

（御所様——）

涙が滂沱と落ち、暗然となった。

この悲嘆と裏腹に、鎌倉の歓声が聞こえる。

いずれ近いうちに、雪崩の如く押し寄せてくるだろう。そのとき平泉は、一丸となって義経の采配に従ってくれるだろうか——国衡、泰衡が脳裏に重くのしかかってきた。

（三）

比叡、鞍馬、愛宕の新緑が映え、高野川の瀬音が涼感をそそる。鎌倉から戻ってきて、早三度目の夏を迎えようとしている。

尼になろうとしたのを、母や京人たちから寄ってたかって止められた。

「尼にはいつでもなれるではないか。したが静ほどの舞を失うは惜しいことじゃ。京のために思いとどまって欲しい」

と言われても、まだ舞の袖に手を通そうとしない。

その静の許へ、義経の訃報がもたらされてきた。三十一歳であった。やってきたのは吉次の息子平三である。京への往復は、もう何年も前から父に替わっていた。京へくれば、三条屋敷に入り、必ずといっていいくらい白川の静の許を訪れる。そ

して、平泉の一部始終を告げてくれた。

それによると、平泉は義経にとって必ずしも安住の地ではなくなっていた。しかも秀衡の死から険難にさえなっていた。というのは、秀衡の遺言・誓約を斥け、義経をめぐる兄弟たちの対立が起こったのである。

鎌倉と院からの義経捕縛の宣旨と命令が執拗に下されるに及び、泰衡・国衡は恐れた。長年の平和と繁栄に酔いしれてきた平泉は、外側からの脅威に怯え、対処する気概と知略を持ち合わせない。

こうして義経を中心とする忠衡・頼衡の主戦派と泰衡・国衡らが真っ向から対立した。そして遂に事は起こった。

鎌倉から軍勢が襲来する前に、こちらで義経を討ち、その首を送れば戦禍から免れるだろうという目論みである。そのためにはどんな謀をめぐらすか——。泰衡・国衡、そして樋爪入道（秀衡の従兄弟で岩手郡に住む）らの密議は、高館襲撃の前に忠衡を塩釜神社へ参詣させて平泉に不在とすること。次に藤原基成（秀衡の妻の父）を決行の当日、伽羅御所に招き寄せてこれも足留めする。すれば高館の軍勢など知れたものである。そこをこちらから急襲するという企てである。

そうした水面下の不穏な動きを、義経はじめ、弁慶らはそれとなく察知していた。そのための警戒、警備は怠らなかったが、致命的なのは、兵を集められないことである。

これが秀衡存命なればともかく、今や平泉の中枢は泰衡・国衡である。こちらは兵を持たない客分でしかないのだ。

閏四月三十日早朝、突如として猫間ケ淵辺りで法螺貝の音があがった。

（遂に彼等は）

覚悟はしていたがそのときがきたようだ。

朝靄を衝いて、伽羅御所から猫間ケ淵、そして北は坂下、西は桜川と、御館家の旗差物が押し寄せてきた。

泉ケ城の忠衡と北の頼衡に加勢の伝騎が走ったが、忠衡はこの時、塩釜神社に出かけていた。それに後でわかったことだが、頼衡は既に討たれてしまっていたのである。

となると、高館を死守する数は十余人でしかない。いかに豪の弁慶やお側去らずの忠義の士がいるといえども、数において敵うところではない。激闘の末、片岡八郎、亀井六郎、鷲尾三郎、大胡小吉太らが次々と倒れた。

「殿、おさらばでござる」

弁慶の悲壮な声とともに、高館に火が上がった。すると火は衣川の風に煽られ、紅蓮の炎の波となって高館を舐めはじめた。

「オーッ！」

藤原軍の目に映ったのは、炎の中に、仁王立ちに立ちつくした弁慶である。既に何百本の矢を総身に浴びながら、弁慶は立っている。あたかも義経妻子を守るかのように――。

吉次の息子平三から、平泉高館焼亡と、義経の最期を聞かされた静は絶句した。しかも義経を追い詰めて討ったのは、鎌倉軍ではなく藤原泰衡・国衡軍だった。ということは、最後に頼った所で裏切られたということだ。

（運に見放されるとはこういうことか）

「泰衡殿が鎌倉に送ったという義経殿の首は贋首にござります」

（……）

炎の中に消えたゆえに、代わりの首を鎌倉に送ったのであろうか。

「それにこの八月の末頃には、鎌倉軍が平泉に入ってきましょう。鎌倉の意図は、義経殿ではなく、平泉の征伐と占領にござります」

平泉の運命は秀衡の死と共に終わり、義経の運命もまた秀衡の死と共に終わったようだ。

二人はそれから暫くことばもなく庭に目を移した。

「お父上も亡くなられたとか、これからいかがなされます？」

三十代、父に似て濃い眉に彫りのある顔立ちの平三は、

「暫く京に潜もうかと――したがわが故郷はみちのくゆえ……」

いずれはみちのくに帰るということだ。

「それでは静様にはお命を全うなされて」

と平三は立ち上がった。

「そなたも全うなされて」

「はい。もうお会いすることはないと存じます」

そう言われては淋しい。味方一人をまた失うような気がした。

平三を見送ってから、静はクッと顔を伏せて忍び泣いた。

瞼の裏に、堀川館での楽しい日々や、屋島・壇ノ浦の武勇談を語った義経が蘇生する。そして、吉野の逃避行までが懐かしく、義経の思い出が、心と体の中に浸みこんでいる。

三年前、鎌倉から戻って間もなく、静は再び義経の後を追おうとした。そのとき母の磯ノ禅師から厳しく窘められたものだった。

「止めよ、静。そなたは吉野や鎌倉でどんな思いをしたか。武家の女がどんなことになるか、十分にわかったはず。それに義経殿には妻子がおありなのじゃ。そんな

所へまたまた分け入ってはならぬ。堀川館でそなたが佐登様をいかに苦しめたか、気がついておらなんだのか。これ以上佐登様を苦しめるでない」

母のことばに静は恋の炎をあきらめ、旅を断念した。

朝夕、比叡から吹き降りる風が衿元にこたえ、頂がうっすらと赤らみ始めてきた。

義経を裏切った藤原泰衡も、つまるところ頼朝に討たれ、奥州藤原氏は滅亡した。そして頼朝による奥州平定が確立した。

そんな話題が専らで、いよいよ今度は頼朝が京に入ってくるのでは——という噂が流れ、ますます気鬱になってきた。そんな静に、磯ノ禅師はまたまたことばをきわめて言った。

「いつまで気落ちしているのじゃ。もうそろそろ自分を取り戻さねば。そなたは大時化の海を越え、雪の吉野を彷徨うた。それに、鎌倉では頼朝殿の前で、見事な舞をもって女の意地を見せたではないか。そなたは生きているのじゃ。生きているからは、生き直さねばならぬ。幸いそなたには舞がある。舞人として、もう一度立ち直られよ。そして京人たちのために、新しい静の舞を見せるのじゃ」

母のことばに、目が醒めるような気がした。

（わたしは義経様への愛を超えて、白拍子の舞に生きよう——）

静、再起の決意である。

それから何日かが過ぎた。紅葉の大原路を市女笠をかぶった女がいく。供人を一人連れて高野川沿いに上る。大原から右は三千院への道である。

それを左にとると路は細くなった。散り敷く紅葉の落葉路を、陽を浴びながら往く。春より秋の風光は絢爛である。

寂光院を目ざしたのは、七歳の安徳天皇を壇ノ浦の海に沈めた母、建礼門院に会ってみたくなったからである。

いかに世捨人の尼とはいえ、かつて権勢の頂点にあった平清盛の娘にして、安徳天皇の生母である。そんな貴人の庵を訪ねるなど無謀だとはわかりきっている。

静の本意は、会いたいなどということではない。その後ろ姿でいいから、チラと見たいだけだ。

愛する吾子を海に沈めさせられた母の後ろ姿に、義経の死を報じ、義経に替わって詫びたいと思うからだ。そんな気になったのは、静自身もわが子を由比ケ浜の海に投ぜられたからである。共に戦さと政争の中で幼き命を葬らされた女人同士である。

やがて紅葉に埋まるようにして簡素な寂光院の屋根が見えてきた。苔生す長い石段をゆっくりと登る。心が波のように騒ぐ。

（わたしのような女が……）

それでも足は動く。そしてとうとう庵の柴折戸まできてしまった。それから先は動かない。市女笠の虫の垂衣をそっとよけて見通すと、広廂の縁に二人の尼が腰かけている。膝に手を合わせているのが建礼門院であろうか――。

（義経様が、このお方から全てを奪い葬り去った）

本来なら、母子共に内裏の奥深く、幸せな日々を送られるべき人が……。

足がすくみ、静は思わず掌を合わせた。すると気配を感じたか、尼が一人踏石を伝ってこちらにやってきた。

「何か？」

小柄の尼がおだやかに尋ねた。

「いえ、こちらに門院様がおられますとのこと、遠くから拝姿させていただこうと」

と静は掌を合わせながら頭を下げた。

「どちらからこられました？」

「白川の方から……」

そう言うと静は一礼して踵を返した。

これが市井の女人なら、共に子を失った者の嘆きと淋しさを語り合えるものを——。そう思いながら静は心を残して、ゆっくりと苔の石段を下りはじめた。

「どちらの方じゃ」

門院は戻ってきた尼に訊いた。尼は首を一寸傾けながら、

「思い違いかもしれませぬが白拍子の静に似ておりましたような……」

と言った。

「静に!?」

建礼門院の目に複雑な光が交錯した。

「あの静が何ゆえここにきたのでござりましょう。身の程もわきまえず」

門院の無言が暫くつづいた。

「あの女も義経と子を喪うたゆえなあ……」

「だからといって、何も門院様のところへ」

「義経が炎に身を焼いて滅び、子を海に棄てられたゆえに、寂光院を想い出し、つい足を運んできたのやもしれぬ」

「今更何を——静は敵の妾ではござりませぬか」

「いや、静も全てを失うた女子じゃ。同じであろう」

「それでもあの女は——」

「いや、武門とはそうしたもの、なべて現世は泡沫じゃ」

呟くように言うと、門院はひそやかに立ち上がった。

その年の暮、京の藤原卿の館で、白拍子の舞が演じられた。その中でひときわ目を奪ったのは、美しい静の舞であったという。

〈了〉

あとがき

源義経といえば、かつては豊臣秀吉と並んで国民的英雄であった。

一介の百姓から身を起こして天下人となった秀吉。対する義経は出自のよさと数奇な運命。更にその華麗な勇姿と嚇々たる戦歴にもかかわらず、三十一歳という若さで自決に追いこまれた。

この華と悲運が、いやが上にも人々の同情と哀惜をそそった。そして後年、「判官贔屓」ということばまで生まれた。「判官贔屓」とは、義経の不運を哀しんだことから、弱者や敗者に対する同情的な気持ちを表わすものである。

横文字の氾濫する今日、「判官贔屓」などという、故事からできたことばを聞くことも少なくなった。

それに近年、義経も秀吉も国民的英雄とは言えなくなってきた。それは二人がともに武人であったからだろう。とはいっても、戦国物の書籍が氾濫する今日では、秀吉は別として、義経の影はまったく薄れてしまった。その理由には、成功者ではなかったことも指摘できよう。

平成の日本人は、福祉を謳いながらも、歴史上の事件や人物に対して、敗者への思いやりや、ものの哀れに鈍感になってしまっているような気がする。

ところが江戸時代はそうではなかった。義経は見事に人形浄瑠璃や歌舞伎の世界に生かされてきた。云わく「義経千本桜」や「勧進帳」の類である。

民衆の芸能とはそうしたものだ。明智光秀も赤穂浪士も、義経とともに民衆芸能によって支えられ生きてきた。

では書き終えた感想、感慨を少々述べることにしよう。

義経と頼朝の関係とその違い。義経の戦術と戦略（一ノ谷・屋島・壇ノ浦合戦）、その後の失速と破滅等々については、多くの関連書籍によって紹介されているであろうからあえてそれは避けよう。

義経の不幸は、若い時に、人間と社会を学ばなかったことにある。武家の男に生まれれば、幼時から武門の子として武家の仕来たりについて学ぶものである。つまり武人としての教育を身につけるものだ。

しかし幼時から数奇な運命の変転に弄ばれた義経には、その時期がなかった。ゆえに、天才的戦術の資質に恵まれながらも、兄（鎌倉）に疎まれ破滅へと追い込まれた。

いや、兄のみか、信じようとした後白河法皇からも裏切られるという、政治と軍事両面から攻められた。政治の非情がわかったときは、既に遅かったのだ。

技術のみでは、一社や一国の経営が成りたたないということは、今日に照らしても言えることではなかろうか。

それでも彼は愛された。それは彼の天衣無縫ともいうべき人の良さである。壇ノ浦の合戦でものの見事に勝利しながら、彼の人生は暗転した。

破滅の道行きに従う、弁慶たちお側去らずの男たちの忠実、これは主従の理念ではなく愛であろう。そして彼等は義経に殉じた。

愛といえば藤原秀衡がいた。しかし、秀衡の心をわかったときはこれも遅かった。

それに京の白拍子静御前。人の落ち目に付き従ったのは男たちばかりではない。雪の吉野から鎌倉へと、身重の女がどんな思いであったろう。しかも頼朝の前で、義経を想う歌を歌いながら舞うという度胸は天晴れ過ぎるくらいだ。

その静が、義経を追って行き倒れた、あるいは自害したとする伝説の墓が、埼玉・新潟・福島・香川県下などにあるらしい。しかし鎌倉であれだけ女の大見栄を切り、子まで喪った女だ。義経の足手まといにはならず、舞人として、京での再生をしたと考えたい。

鞍馬・平泉・京・一ノ谷・屋島・壇ノ浦と、義経の人生絵図はその勇姿とともに美しい。それが三十一歳という若さで平泉で散華したことを惜しむあまり、物語や芸能の中で生かされてきたことは先述した。

もしかしたら義経は、日本人の心の奥に、永遠に若く懐しい人物として住みついているのではなかろうか。

今回の上梓に当たり、PHP研究所文庫出版部の根本騎兄氏にお世話になった。ここに深甚の感謝を申し上げる次第であります。

二〇〇四年八月

中島道子

著者紹介
中島道子（なかじま　みちこ）
福井県三国町に生まれる。実践女子大学国文科卒業。日本ペンクラブ会員。明智光秀顕彰会副会長（大津市）。武蔵歴史フォーラム会長（川越市）。
主な著書に、『岩佐又兵衛　怨念の絵師』『濃姫と煕子（ひろ）――信長の妻と光秀の妻』『天下の悪妻――越前藩主松平忠直夫人勝子』（以上、河出書房新社）、『それからのお市の方』（新人物往来社）、『秀吉と女人たち』（勁文社）、『徳川三代と女房たち』（立風書房）、『湖影――明智光秀（ひでとし）とその妻煕子』（ＫＴＣ中央出版）、『松平忠輝』『柳生石舟斎宗厳』『松平春嶽』（以上、ＰＨＰ文庫）などがある。

ＰＨＰ文庫　源義経と静御前
源平合戦の華　若き勇者と京の舞姫

2004年９月17日　第１版第１刷

著　者　中島道子
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区三番町３番地10
文庫出版部　☎03-3239-6259
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
制作協力　ＰＨＰエディターズ・グループ
組　版
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所

© Michiko Nakajima 2004 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-66250-1

本書は、書き下ろし作品です。

PHP文庫

逢坂剛 北原亞以子 鬼平が「うまい」と言った江戸の味
逢沢明 大人のクイズ
逢沢明 「負ける方が勝ち」の逆転ゲーム理論
青木功 ゴルフわが技術
赤羽建美 女性が好かれる9つの理由
阿川弘之 日本海軍に捧ぐ
浅野八郎 監修 「言葉のウラ」を読む技術
浅野裕子 大人のエレガンス80のマナー
阿奈靖雄 「プラス思考の習慣」で道は開ける
綾小路きみまろ 有効期限の過ぎた亭主・賞味期限の切れた女房
アレン・ドラ・ストゥードト 大原敬子 訳 人生は100回でもやり直しがきく
飯田史彦 大学で何をどう学ぶか
飯田史彦 生きがいの本質
飯田史彦 人生の価値
池波正太郎 霧に消えた影
池波正太郎 信長と秀吉と家康
池波正太郎 さむらいの巣
石島洋一 決算書がおもしろいほどわかる本
石島洋一 「バランスシート」がみるみるわかる本
石田勝正 抱かれる子どもはよい子に育つ
石原結實 血液サラサラで、病気が治る、キレイになれる
伊集院憲弘 いい仕事は「なぜ?」から始まる
泉秀樹 戦国なるほど人物事典
板坂元 男の作法
市田ひろみ 気くばり上手、きほんの「き」
稲盛和夫 成功の情熱―PASSION―
稲盛和夫 稲盛和夫の実践経営塾
稲盛和夫 稲盛和夫の哲学
井上和子 聡明な女性はスリムに生きる
今泉正顕 人物なるほど「一日一話」
梅澤恵美子 額田王の謎
梅津祐良 池上重輔 監修 「図解」わかる! MBA
瓜生中 仏像がよくわかる本
江口克彦 上司の哲学
江口克彦 鈴木敏文 経営を語る
江坂彰 大失業時代 サラリーマンはこうなる
江坂彰 「21世紀型上司」はこうなる
エンサイクロネット好感度をアップさせる「モノの言い方」
エンサイクロネット ビジネス どんな人にも好かれる魔法の心理作戦
遠藤順子 再会
呉善花 日本が嫌いな日本人へ
呉善花 私はかにして「日本信徒」となったか
大石芳裕 監修 造事務所 著 図解 流通のしくみ
大島昌宏 結城秀康
太田颯衣 5年後のあなたを素敵にする本
大橋武夫 戦いの原則
大原敬子 なぜか幸せになれる女の習慣
大原敬子 愛される人の1分30秒レッスン
岡倉徹志 イスラム世界がよくわかる本
岡崎久彦 陸奥宗光とその時代
岡崎久彦 小村寿太郎とその時代
岡崎久彦 吉田茂とその時代
岡本好古 韓信
岡野守也 よくわかる般若心経
小川由秋 真田幸隆
荻野洋一 世界遺産を歩こう
オグ・マンディーノ 菅靖彦 訳 この世で一番の奇跡
オグ・マンディーノ 菅靖彦 訳 この世で一番の贈り物

PHP文庫

小栗かよ子 堀田明美 エレガント・マナー講座
小栗かよ子 自分を磨く「美女」講座
奥脇洋子 魅力あるあなたをつくる感性レッスン
尾崎哲夫 10時間で英語が話せる
尾崎哲夫 10時間で英語が読める
快適生活研究会 「料理」ワザあり事典
快適生活研究会 「冠婚葬祭」ワザあり事典
岳真也 日本史「悪役」たちの言い分
笠巻勝利 仕事が嫌になったとき読む本
梶原一明 本田宗一郎が教えてくれた
風野真知雄 陳平
片山又一郎 マーケティングの基本知識
加藤諦三 「やさしさ」と「冷たさ」の心理
加藤諦三 自分に気づく心理学
加藤諦三 「ねばり」と「もろさ」の心理学
加藤諦三 人生の重荷をプラスにする人 マイナスにする人
金盛浦子 「きまったい」の上手な育て方
金盛浦子 「つらい時」をとりこえちょっと方法
金森誠也 監修 30ポイントで読み解く クラウゼヴィッツ「戦争論」
加野厚志 島津義弘
加野厚志 本多平八郎忠勝
金平敬之助 ひと言のちがい
神川武利 秋山真之
神川武利 伊達宗城
唐土新市郎 図で考える営業マンが成功する
狩野直禎 諸葛孔明
河合敦 目からウロコの日本史
川北義則 人生、だから面白い
川口素生 「幕末維新」がわかるキーワード事典
川島令三 編著 鉄道なるほど雑学事典
川島令三 幻の鉄道路線を追う
樺旦純 運がつかめる人 つかめない人
樺旦純 女ごころ、男ごころがわかる心理テスト
菊入みゆき モチベーションを高める本
菊池道人 斎藤一
北岡俊明 ディベートがうまくなる法
紀野一義 文 入江泰吉 写真 仏像を観る
桐生操 世界史怖くて不思議なお話
桐生操 王妃マルグリット・ド・ヴァロア
楠木誠一郎 石原莞爾
楠山春樹 「老子」を読む
国司義彦 「30代の生き方」を本気で考える本
国司義彦 「40代の生き方」を本気で考える本
栗田昌裕 栗田式記憶法入門
黒岩重吾 古代史の真相
黒岩重吾 古代史を解く九つの謎
黒岩重吾 古代史を読み直す
黒鉄ヒロシ 新選組
黒鉄ヒロシ 坂本龍馬
黒鉄ヒロシ 幕末暗殺
黒部亨 宇喜多直家
ケリー・グリーソン 桧井浩一 訳 なぜか、「仕事がうまくいく人」の習慣
ケリー・グリーソン 桧井浩一 訳 だから、「仕事がうまくいく人」の習慣
小池直己 TOEICテストの「決まり文句」
小池直己 TOEICテストの英文法
小池直己 TOEIC(R)テストの英単語
小池直己 佐藤誠司 中学英語を5日間でやり直す本
幸運社 意外と知らない「もののはじまり」
神坂次郎 特攻隊員の命の声が聞こえる

PHP文庫

甲野善紀　武術の新・人間学
甲野善紀　古武術からの発想
甲野善紀　表の体育 裏の体育
郡　順史　佐々成政
國分康孝　自分をラクにする心理学
心本舗　みんなの箱人占い
兒嶋かよ子 監修　「民法」がよくわかる本
児玉佳子／須藤亜希子　赤ちゃんの気持ちがわかる本
近衛龍春　織田信忠
木幡健一　「マーケティング」の基本がわかる本
小林正博　小さな会社の社長学
小巻泰之 監修／造事務所 著　図解 日本経済のしくみ
小山　俊　リーダーのための心理法則
コリアンワークス　「日本人と韓国人」なるほど事典
コリン・ターナー／早野依子 訳　あなたに奇跡を起こす小さな100の智恵
今野紀雄 監修　「微分・積分」を楽しむ本
財団法人 計量生活会館　知って安心！「脳」の健康常識
近藤唯之　プロ野球 遅咲きの人間学
斎藤茂太　逆境がプラスに変わる考え方
斎藤茂太　「なぜか人に好かれる人」の共通点

齋藤　孝　会議革命
酒井美意子　花のある女の子の育て方
堺屋太一　組織の盛衰
坂崎重盛　なぜ、この人の周りに人が集まるのか
坂田信弘　ゴルフ進化論
坂野尚子　「いい仕事」ができる女性
阪本亮一　できる営業マンはお客と何を話しているのか
櫻井よしこ　大人たちの失敗
佐々木宏　成功するプレゼンテーション
佐治晴夫　宇宙の不思議
佐竹申伍　真田幸村
佐々淳行　危機管理のノウハウ PART(1)(2)(3)
佐藤綾子　すべてを変える勇気をもとう
佐藤勝彦 監修　「相対性理論」を楽しむ本
佐藤勝彦 監修　「量子論」を楽しむ本
佐藤よし子　英国スタイルの家事整理術
J&L パブリッシング 編著　今さら人に聞けない「パソコンの技術」
ジェラァー・ホワイト／酒井泰介 訳　「最大効果！」の仕事術
重松一義　江戸の犯罪白書
七田　眞　子どもの知力を伸ばす300の知恵

篠原佳年　幸福力
芝　豪　太公望
柴田　武　知ってるようで知らない日本語
渋谷昌三　外見だけで人を判断する技術
司馬遼太郎　人間というもの
嶋津義忠　上杉鷹山
清水武治　「ゲーム理論」の基本がよくわかる本
下村　昇　大人のための漢字クイズ
謝　世輝　世界史の新しい読み方
シルビア・ブラウン／リンジー・ハリソン／堤　江実 訳　あなたに奇跡を起こすスピリチュアル・ノート
水津正臣 監修　「刑法」がよくわかる本
菅原明子　マイナスイオンの秘密
菅原万美　お嬢様ルール入門
杉本苑子　落とし穴
スーザン・ヘイワード 編／山川紘矢／山川亜希子 訳　聖なる知恵の言葉
鈴木五郎　飛行機の100年史
鈴木秀子　9つの性格
鈴木　豊　「顧客満足」を高める35のヒント
スチュアート・クレイナー／金　利光 訳　ウェルチ 勝者の哲学
スティーブ・チャンドラー／弓場　隆 訳　あなたの夢が実現する簡単な70の方法

PHP文庫

世界博学倶楽部　「世界地理」なるほど雑学事典
関　裕二　古代史の秘密を握る人たち
関　裕二　大化改新の謎
関　裕二　壬申の乱の謎
関　裕二　神武東征の謎
瀬島龍三　大東亜戦争の実相
全国データ愛好会　47都道府県なんでもベスト10
曾野綾子　人は最期の日でさえやり直せる
大疑問研究会　大人の新常識520
太平洋戦争研究会　日本海軍がよくわかる事典
太平洋戦争研究会　日本陸軍がよくわかる事典
太平洋戦争研究会　日露戦争がよくわかる本
多賀一史　日本海軍艦艇ハンドブック
多湖　輝　しつけの知恵
髙嶋秀武　話のおもしろい人、つまらない人
髙嶌幸広　話し方上手になる本
髙嶌幸広　「話す力」が身につく本
高野　澄　井伊直政
高橋安昭　会社の数字に強くなる本
高橋勝成　ゴルフ最短上達法

高橋克彦　風の陣［立志篇］
高橋三千世　爆笑！ ママが家計を救う
高宮和彦 監修　健康常識なるほど事典
財部誠一　カルロス・ゴーンは日産をいかにして変えたか
滝川好夫　「経済図表・用語」早わかり
田口ランディ　ミッドナイト・コール
匠　英一　「意識のしくみ」を科学する
匠　英一 監修　「しぐさと心理」のウラ読み事典
竹内元一　「図解表現」の技術が身につく本
武田鏡村　［図説］戦国兵法のすべて
武光　誠　古代史大逆転
太佐　順　陸遜
田坂広志　仕事の思想
田島みるく 文／絵　お子様ってやつは
田島みるく 文／絵　「出産」ってやつは
立石　優　范蠡
立川志の輔 選・監修／PHP研究所 編　古典落語100席
田中澄江　「しつけ」の上手い親・下手な親
田中鳴舟　みるみる字が上手くなる本
谷口克広　目からウロコの戦国時代

谷沢永一　こんな人生を送ってみたい
谷沢永一／渡部昇一　孫子・勝つために何をすべきか
田原　紘　目からウロコのパット術
田原　紘　ゴルフ下手が治る本
田辺聖子　恋する罪びと
丹波　元　京都人と大阪人と神戸人
丹波　元　まるかじり礼儀作法
柘植久慶　歴史を動かした「独裁者」
柘植久慶　日露戦争名将伝
出口保夫　イギリスの優雅な生活
デニース・スコラフィールド／小谷啓子 訳　少しの手間できれいに暮らす
寺林　峻　エピソードで読む黒田官兵衛
童門冬二　「情」の管理・「知」の管理
童門冬二　上杉鷹山の経営学
童門冬二　男の論語(上)(下)
戸部新十郎　二十五人の剣豪
戸部民夫　「日本の神様」がよくわかる本
ドロシー・ロー・ノルト／レイチャル・ハリス／石井千春 訳　子どもが育つ魔法の言葉
ドロシー・ロー・ノルト／石井千春／武者小路実昭 訳　子どもが育つ魔法の言葉 for the Heart
土門周平　天皇と太平洋戦争

PHP文庫

中江克己　お江戸の意外な生活事情
中江克己　お江戸の地名の意外な由来
長尾剛新釈「五輪書」
中川昌彦　自分の意見がはっきり言える本
長坂寿子　監修　家庭料理「そうだったのか！」クイズ
永崎一則　人はほめられ、ことばで鍛えられる
永崎一則　話力をつけるコツ
中澤天童　名古屋の本
中島道子　松平忠輝
中島道子　松平春嶽
中曽根康弘　石原慎太郎　永遠なれ、日本
永田英正項　羽
中谷彰宏　入社3年目までに勝負がつく77の法則
中谷彰宏　なぜ彼女にオーラを感じるのか
中谷彰宏　自分で考える人が成功する
中谷彰宏　時間に強い人が成功する
中谷彰宏　大学時代しなければならない50のこと
中谷彰宏　なぜあの人にまた会いたくなるのか
中谷彰宏　「大人の女」のマナー
中谷彰宏　人を許すことで人は許される
中谷彰宏　なぜ、あの人は「存在感」があるのか
中谷彰宏　人を動かせる人の50の小さな習慣
中谷彰宏　本当の自分に出会える101の言葉
中谷彰宏　1日に24時間もあるじゃないか
中津文彦　歴史に消された「18人のミステリー」
中西安　数字が苦手な人の経営分析
中西輝政　大英帝国衰亡史
中野明　論理的に思考する技術
中原英臣　佐川峻　なにが「脳」を壊していくのか
中村昭雄　造事務所　監修　図解　政府・国会・官公庁のしくみ
中村彰彦　幕末を読み直す
中村晃　児玉源太郎
中村祐輔　監修　遺伝子の謎を楽しむ本
中村幸昭　アメリカは時速160キロで泳ぐ
中村義作　阿邊恵一　著編　知って得する！速算術
中山みどり　〈なちょ〉シングルマザー日記
中山庸子　「夢ノート」のつくりかた
中山庸子　夢生活カレンダー
奈良井安　「図解決力」がみるみる身につく本
西野武彦　「株のしくみ」がよくわかる本
西本万映子　「就職」に成功する文章術
日本博学倶楽部　「歴史」の意外な結末
日本博学倶楽部　「関東」と「関西」こんなに違う事典
日本博学倶楽部　雑学大学
日本博学倶楽部　歴史の意外な「ウラ事情」
日本博学倶楽部　戦国武将・あの人の「その後」
日本博学倶楽部　幕末維新・あの人の「その後」
日本博学倶楽部　日露戦争・あの人の「その後」
沼田陽一　イスはなぜ人間になつくのか
野村敏雄　小早川隆景
野村敏雄　秋山好古
ハイパープレス　雑学居酒屋
葉治英哉　松平容保
長谷川三千子　正義の喪失
秦郁彦　編　ゼロ戦20番勝負
畠山芳雄　人を育てる100の鉄則
服部英彦　「質問力」のある人が成功する
服部省吾　戦闘機の戦い方
服部隆幸　「入門」ワン・トゥ・ワン・マーケティング

PHP文庫

花村奨　前田利家
パーバラ・コロリ　田栗美奈子　訳　子どもに変化を起こす簡単な習慣
羽生道英　佐々木道誉
羽生道英　伊藤博文
浜尾実　子供を伸ばす一言、ダメにする一言
浜野卓也　黒田官兵衛
晴山陽一　TOEICテスト英単語　ビッグバン速習法
半藤一利　レイテ沖海戦
半藤一利　ルンガ沖夜戦
半藤一利／秦郁彦／横山恵一　日本海軍戦場の教訓
半藤末利子　夏目家の糠みそ
PHPエディターズグループ　図解「パソコン入門」の入門
樋口廣太郎　挑めばチャンス　逃げればピンチ
火坂雅志　魔界都市・京都の謎
日野原重明　いのちの器〈新装版〉
平井信義　親がすべきこと・してはいけないこと
平井信義　子どもを叱る前に読む本
平川陽一　世界遺産　封印されたミステリー
平川陽一　古代都市　封印されたミステリー
平澤興　論語を楽しむ
ビル・トッテン　アングラサクソンは人間を不幸にする
福井栄一　上方学
福島哲史　「書く力」が身につく本
福田健　「交渉力」の基本が身につく本
藤井龍二　「ロングセラー商品」誕生物語
藤田完二　上司はあなたのどこを見ているか
藤原美智子　「きれい」への77のレッスン
藤本義一　丹波哲郎　大阪人と日本人
北條恒一　改訂版　株式会社のすべてがわかる本
保坂隆　監修　「チェストリス」にさよならする本
保阪正康　昭和史がわかる55のポイント
保阪正康　父が子に語る昭和史
星亮一　浅井長政
本間正人　「コーチング」に強くなる本
本多信一　内向型人間だからうまいく
毎日新聞社　話のネタ
前垣和義　東京と大阪「味」のなるほど比較事典
マザー・テレサ　マザー・テレサ　愛と祈りのことば
マザー・テレサ　ホセ・ルイス・バラド　著　渡辺和子　訳　編　「できる男」「できない男」の見分け方
まずいさくら　「できる男」の口説き方
町沢静夫　なぜ「いい人」は心を病むのか
松井今朝子　東洲しゃらくさし
松井今朝子　幕末あどれさん
松沢佑次　駒沢伸泰　監修　やさしい「がん」の教科書
松田十刻　東条英機
松野宗純　人生は雨の日の托鉢
松原惇子　「いい女」講座
松原惇子　「なりたい自分」がわからない女たち
松下幸之助　物の見方　考え方
松下幸之助　指導者の条件
松下幸之助　決断の経営
松下幸之助　社員稼業
松下幸之助　商売は真剣勝負
松下幸之助　強運なくして成功なし
松下幸之助　正道を一歩一歩
松下幸之助　道は無限にある
松下幸之助　商売心得帖
松下幸之助　経営心得帖
松下幸之助　人生心得帖
松下幸之助　素直な心になるために

PHP文庫

的川泰宣　宇宙は謎がいっぱい
万代恒雄　信じたとおりに生きられる
三浦行義　なぜか「面接に受かる人」の話し方
水野靖夫　微妙な日本語使い分け字典
道浦俊彦　「ことばの雑学」放送局
三戸岡道夫　大山巌
水上勉　「般若心経」を読む
宮崎伸治　時間力をつける最強の方法100
宮部修　文章をダメにする三つの条件
宮部みゆき　初ものがたり
宮脇檀　男の生活の愉しみ
三輪豊明　図解「国際会計基準」入門の入門
向山洋一　中学校の「英語」を完全攻略
向山洋一　小学校の「算数」を5時間で攻略する本
向山洋一　向山式「勉強のコツ」がよくわかる本
森荷葉　「きもの」は女の味方です。
森本邦子　わが子が幼稚園に通うとき読む本
森本哲郎　ことばへの旅（上）（下）
森本哲郎　戦争と人間
守屋洋　中国古典一日一言
守屋洋　男の器量　男の値打ち
安岡正篤　活眼活学
安岡正篤　論語に学ぶ
八尋舜右　竹中半兵衛
藪小路雅彦　超現代語訳百人一首
山折哲雄　蓮如と信長
山川紘矢・亜希子訳　ブライアン・L・ワイス　前世療法
山川紘矢・亜希子訳　ブライアン・L・ワイス　魂の伴侶―ソウルメイト
山崎武也　一流の仕事術
山崎房一　心がやすらぐ魔法のことば
山田恵諦　人生をゆっくりと
山田正二監修　間違いだらけの健康常識
山田陽子　1週間で脚が細くなる本
山村竜也　目からウロコの幕末維新
八幡和郎　47都道府県うんちく事典
唯川恵　明日に一歩踏み出すために
唯川恵　きっとあなたにできること
唯川恵　わたしのためにできること
養老孟司　甲野善紀　ゆうきゆう　「ひと言」で相手の心を動かす技術
読売新聞大阪編集局　雑学新聞
李家幽竹　超初級「ハングル入門」の入門
木内康彦　明　「風水」で読み解く日本史の謎
リック西尾　英語で1日すごしてみる
竜崎攻　真田昌幸
鷲田小彌太　「やりたい」ことがわからない人たちへ
鷲田小彌太　大学時代に学ぶべきこと、学ばなくてよいこと
和田秀樹　受験は要領
和田秀樹　わが子を東大に導く勉強法
和田秀樹　受験本番に強くなる本
和田秀樹　他人の10倍仕事をこなす私の習慣
渡辺和子　美しい人に
渡辺和子　愛をこめて生きる
渡辺和子　愛することは許されること
渡辺和子　目に見えないけれど大切なもの